
LENDY CROWZ 第三部

秋山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LENDY CROWZ 第三部

【Nコード】

N4784D

【作者名】

秋山

【あらすじ】

レンディ・クローズ第二部の続きです。

第五十一話・新名の儀式・（前書き）

LENDYCROWZ 2の続編です。

第五十一話・新名の儀式・

冬休みの最初の日を、まさかベットの途中で過ごすことになるなんて、あの日の僕はちっとも想像していなかった。

きっと、薄着で何時間も外に居たのが、いけなかったんだろう。

おかげで風邪をひいた！

母さんには、「まったく、何をやってるんだか。どうせ夜遅くまでテレビゲームでもしていたんでしょ？」といわれた。

夜遅くまで起きたことはあっている。だが、テレビゲームをしていたんじゃない！

魔術師としての大切な任務遂行をしていたんだ！

だから僕は、今こうして風邪を引いてしまったことを悔しくは思わない。なぜなら、そう。ケビンから日記を取り返せたから！

彼は一体、何をたくらんで、あんなことをしでかしたんだろう？
いたずらにしては、なんだかやり過ぎているような気がする。

僕も必死だったが、リトルだって、あそこまで必死だった。彼をあんな風にさせるほど、ケビンは、何かをたくらんでいたのだろうか？ 一体、何を……？ 考えれば考えるほどに、堂堂巡りだ。

それよりも、このことをジェシーに知らせなくちゃ！ 一番、僕のことを心配してくれていたのは、彼女のハズ。

僕は、ジェシーにメールを書こうとした。しかし、携帯を開いた次の瞬間に、メールが受信された。

一体誰からだろう？

メールアドレスは、リトルビニーのようである。

送信メール001

12/25(日) 8:46

送信者: little-vegne@abchotmail.c

om

添付: x

件名: x

私はウィル・ウィツシュ伯爵だ。 普段は、伯爵などと名乗らないのだが、今回は改まった事情があるので、気分的に使わせてもらう。 今回は、リトルの”ケイタイデンワ”というものを使って、本文を書かせてもらった。 早速本題に入るが、君は正式な魔術師として、魔法名を得る必要がある。

”魔法名”というものは、新たな世界に入ったとき、つまり、気味が参入儀礼を受けたついでに、新しい世界での目的を明確にするためのもので、儀式が必要だ。 自分で決めてもらっても構わないが、どうせ君は初心者だろう。 私の家で大体のことは出来るから、何も気を張る必要は無い。

返事を頼む。

- - - e n d - - -

あの人か。 僕はそう思った。 紫色のコートを着ていた、あの
人だ。

それにしても、魔法名とは一体なんのことだろう？ 新たな世界での目的を明確にする、と書いてあるがそれが一体、具体的にどんなものであるのが、さっぱりとわからない。

続いて、男に儀式の日程を聞くと、次のように返してきた。

送信メール001

12/25(日) 8:57

送信者: little-veggie@abchotmail.com

添付: x

件名: x

明日か、明後日でとうだ？

ずいぶん、急いでいるようだ。
解釈すれば、どうせ暇だろうということなのか？

僕は、”あさってなら風邪が治っていると思うから、その日でも
ろしく”と返した。

僕はその後、しばらくベットに寝転がって天井を見つめていた。
ベットの脇に置いてある日記を手取る。 昨日の騒動で、少し
ドロが付いていたが、比較的綺麗であった。 僕は中身を確認した。

やはり、わからない言葉だらけだ。 ラテン語なんて、少し勉強
したくらいじゃ……いや、ここに書いてある記述があまりにも難し
いからなのか、僕にはさっぱり理解できない。 ケビンはすごいや
でも、あの件については許せない。 どうしてあそこまでして欲
しかったのだろう？

結局、僕の考えはそこにたどり着いた。

日記を綴じる。するとそのとき、裏表紙にかかれていた金色の文字が目に入った。

”FRATER WICKER ZOLC”と書かれている。

そのまま読んだら、”フラター・ウィツカー・ゾルク”だが……？その全ての言葉において、僕の知っている要素は何も無い。

真新しい言葉である。

父さんの名前とは、まったく関係がないだろう。父さんの名前は、エリック・クローズだ。

やはり、彼とは何の関連性も無いのだろうか？この日記は、別の誰かが書いたものだとするれば……やはり、リトルが言っていたとおりの、”魔王の日記”なのか？それとも、ケビンの言っていた、”魔術師が何かの日記”という意見の方が正しいのか……？

二つをつなげようとしてみても、なかなかつながらない。魔王と魔術師は別のものだろう。大概のRPGでは、魔術師が主人公の仲間になって、魔王を倒す手助けをする。

だが、この世界はRPGじゃない。

”魔”という字が同じだけに、二つとも怪しげな雰囲気を持ち合わせてはいるが、その素顔はわからない。わかることは、字面での違いのみだ。そこからさまざまなイメージが湧きあがりもするが、それは所詮個人的な先入観に過ぎない。だから、どんな人物であるのか、想像がつかない。

ますますわからなくなる。この日記は、そもそも父さんが書いたのではなく、得体の知れない誰かが書いたものなのだろう。一体誰が、こんな日記を書いたんだ……？

再び思い悩んでいると、次第に眠くなってきた。

昨日の騒動のせいで、精神的にも身体的にも、困ぱいしている。意識がぼんやりとしてきた。

眠い……再び寝てしまいそうだ……。そんな風にまどろんでいる中、母さんの甲高い声がドア越しに聞こえてきた。

「レンディ？ ジェシーから電話よ」

こんなに朝早くから電話をくれるとは、なんて律儀な子なんだろう。

ジェシーは昨日の騒動のことについて聞いてきた。勿論、ケビンたちの方である。

まさか、昨日まで命の危険にさらされていたことなど、彼女は知る由も無い。

「昨日は大変だったでしょう？ 大丈夫？」

大丈夫ではないが、僕は格好をつけて

「もちろん、どうってことないよ」

と、返した。しかし、セキが出る。それが、ジェシーにバレないように、セキをするときは受話器を顔から話したが、ジェシーにはバレてしまったようだ。

「嘘よ。レンディっていつもそう。格好つけたって、仕方ないの」

相変わらず、テキパキと何でもしゃべる。遠慮が無い。

ケビンのときだってそうだった。

あんな奴、最低よ！

僕は、身にしみるその言葉を反芻したあとで、別の話題を切り出した。

「そういえば、僕の持っていた日記は、父さんの日記じゃなかったんだ」

ジェシーは拍子抜けした言葉を言った。

「え？ 嘘……それじゃあ、彼方の持っていた日記は、一体誰のもだったの？」

「フラター・ウィツカー・ゾルク……？」

読みに自信が無い。 おどおどと言うと、ジェシーは

「誰よ？ フラター……何？」

と言った。

「僕もよくわからないんだ。とにかく、父さんの日記じゃないことは確かだよ。 リトルも言っていたし」

そもそも、この日記を書いた人が、フラター・ウィツカー・ゾルクだとも、断定できない。 宛名かもしれない。 有名人のサインだということも有り得る。

それにしてもリトル……。 彼女にリトルのことを話したのは、おそらくそれが二度目だ。

リトルの女装した姿が蘇ったが、ジェシーが気持ち悪いと言って、

嫌悪しないように、その話題については触れないことにした。（僕は正直なところ、色々な意味ですごくいいと思ったが）
リトルだって、そのことを公に出されたら変装している意味がなくなってしまうだろう。

その話題を最後に、ジェシーとの電話は途切れた。

外は、しんしんと静かに雪が降っていた。

クリスマスも過ぎ、にぎやかにイルミネーションで飾られていた町は、今やその面影すら見当たらない。

カチカチに冷え込んだ空気のせいで、鼻水が垂れてくる。また風邪をぶり返してはいけないと思って、僕はニット帽をかぶって、厚手のジャンパーを羽織った。

母さんには「図書館に行くから」と言っ、断つてある。本当は、ウイルの家に行くつもりだ。

リトルからは、「迎えの車をだすから、お前の家の近くにある駐車場で待っている」と連絡されている。

僕は朝早くから、家のすぐそばにある駐車場へと向かった。

駐車場一体には、雪が降り積もっても、タイヤの跡が汚らしく這っている。

しかし、それほど多くの車は駐車されていなかった。比較的早くリトルの車を見つけられた。

濃い、銀色の乗用車だ。

僕は、全部座席の脇にある窓の雪を振り払って、リトルに挨拶をしようとしてみた。

「リトル？」

しかし、中にいたのは、リトルではなかった。小柄のおじいさんである。

僕は驚いて謝罪したが、中に居た人物は、僕を引きとめて、ドアを開けた。

「リトル殿の代役としてお迎えにあがりました。執事のトモヒサ・オオガミです」

彼は、そう言って、僕に挨拶をした。

外国人のようである。黒いタキシードに、白髪の混じった髪をきつちりと後ろに撫で付けていた。

息が白く、煙っている。

「やることは分かっておりますか？」

「うん、勿論だよ。でも、一体何をするつもりなの？」

僕がトモヒサから理由を聞き出す前に、彼は車に乗れと指図したので、僕は後部座席に座ることになった。なんだが、丁寧に扱われている気分だ。リトルと一緒に車に乗るときとは、感じが違う。同じ車なのに、と僕は思った。

「なんと説明するのは、難しいですな。詳しいことについては、あとで分かるでしょう。とりあえず、出発しますよ」

ウイルの家は僕等の住んでいる町から大分なれたところにあった。

標識を見てとるに、ここはもうエディンバラに近いところらしい。既にお昼を回っている。この前ここに来たときは、ヘリコプターだったから、それほど時間もかかっていなかった。ヘリコプターで行ったなら、もっと早くについただろう。それに雪が降っていないければ、すばらしい景色だって見られたはずだ。しかし、僕は

車酔いのせいで、それどころではない。

時間とか距離がどうであれ、早く車から降りてもらいたい一心だ。

ウィルの家に着いてから、僕は玄関先でウィルに迎えられた。

「おはよう、元気にしていたかな？」

「もちろん！」

その、逆だ。

「只今ご到着いたしました」

今は、トモヒサだ。

すると、奥のほうから、リトルがマツバ杖をついて、出てきた。

「来たな」

僕は、マツバ杖を付くリトルに釘付けになっていた。リトルは何を考えているのかわからない目つきで、僕のことを見ている。

一瞬の沈黙のあと、ウィルは

「さあ、あがれ。外は冷えるからね」と言っつて、今までの空気を取り戻し、僕たちを中へと招き入れた。

まず、玄関の大きさからして尋常ではないと思ったが、家の内部も尋常ではなかった。それにこの前、ヘリコプターに乗せて連れてこられたときに見えなかったものも、多く見れた。

細かいところまで目を配ると、ところどころに新聞紙や雑誌が散乱しているのがわかる。それ以外にも、変わった形の壺（飾っているわけではなさそうだ）が、所々に置かれていた。何が入って

いるのかは、予想がつかない。

僕たちは、ウイルに案内されて、長い長いテーブルのある部屋へと向かった。

天井には、蝋燭が何本も立てられたシャンデリアがぶら下げてあり、右手側の壁には巨大な絵画が。左手側には、雪の降る窓辺が続いている。絵画を見ていると、今にも吸い込まれそうな錯覚に陥った。

左手側からは、かすかな雪の光が差し込んでくる。青白い光だ。

僕は、ウイルに案内されて、ドアをあけてすぐのところにある椅子に座った。対面にもドアがある。だが、そこまでは十メートルほどありそうな細長いテーブルが続いている。その先に、ウイルが座った。リトルは脇に置いてあった別の椅子に座っている。どうやら、リトルは関係していなく、ウイルは僕にだけ話用あるようだ。

トモヒサは、僕たちがこの部屋に入る前から、さっさとどこかへ行ってしまった。

ウイルが口を開く。

「今日、君がここに招かれた理由は知っているね」

「はい。新名の儀式……でしょう？」

「そうだ。君はこの前、参入儀礼を受けただろう」

あのひどい儀式のことか。

「それで、自ずと魔法名が必要になってくる。新たな世界に入っ

た者は、その世界での目的を明確にするのが、魔術師としての常識だ。 そうしなければ、次のステップには進めないからね」

なるほど。 魔法名とは、ただの魔術師としての名前とは違うようだ。

ウィルがそこまで言うと、背後からドアをノックする音が聞こえてきた。 彼は「どうぞ」と一言口にする、背後のドアが開かれた。 僕は振り返る。 さっきまでいたトモヒサだ。 銀色の洒落たカートを引いている。

トモヒサは丁寧にドアを閉めた後で、僕たちのいるテーブルまでそれを運んだ。

まず最初に、僕のところへきて、カートに乗っているものを次々と僕の目の前に置いていった。

紅茶のカップに、ナプキン、スプーンと……砂糖菓子が出される。 砂糖菓子なのか、よくわからない。 ハートやクローバーの形をした白い塊だ。 もしかしたら紅茶用の砂糖なのかも。

つづいて、トモヒサは、ポットに入っていた紅茶を、僕のカップに注ぎ始めた。

甘い芳香がほんのりと漂う。 トモヒサは

「インドのセイロンティーでございます」と言って、軽く一礼した。

「次のステップというのは、つまり魔術師として、人間として成長することだ。 あまり堅苦しく表現したくはないのだが、やはり魔術師としての仕事を行っている以上、成長しなければ、やっている意味が無い。 それを望まなかったら、ただの趣味と一緒だ」

なかなか厳しい発言が出てくる。

そもそも、まともにも働いたことすらない僕に、魔術師は仕事だ、などと言われても、いまいちイメージがつかめない。

僕は、しばらく黙っていた。

「まあ……百聞は一軒にしかず、というな。実際に身体で覚えるのが良いだろう」

ウィルはそう言って、立ち上がった。

「私に着いてくると良い」

背後にあるドアを開けている。

最後にウィルは、僕に顔を半分だけ向けて、ウィンクをした。

第五十三話・新名の儀式3

ここでリトルとは別れた。

ここから先は、自分だけの世界に入れと、彼は言っている。ウ
イルも同じ意向であった。

「名前というものは、結果的には自分で決めるものなのさ。自分
で目標を定め、それを達成する」

僕は、時々話すウイルの熱弁にうんうんとうなずきながら、彼の
後に付いて行った。

途中で多くの景色が目に入る。埃っぽくて、大分長い間掃除さ
れていないのか、それともカビが繁殖しているのか知らないが、図
書館特有のあの”におい”が立ち込めていた。

なんだか、落ち着く。僕は、いつもからよく図書館に通ってい
る。

なぜなら、本を読むことが大好きだから！ それだけじゃない。
調べ物だっしてしている。

ただ、それがなかなか学校の先生なんかに認めてもらえないだけ
で、僕にとっては立派な勉強だった。

しかし、リトルによって、それがくつがえされていると思うと…
…僕なんか、まだまだだったんだろかなあ、と思える。

何しろ、僕はオカルトチックなものに興味津々だ。

魔術師の世界がオカルトだと割り切っていた僕は、まるでそれを
知ったような気分でした。しかし、違った。本当の魔術師の世
界は、大分シビアで難しいんだと思う。（それよりも、重要なのは、
魔法戦士キリマン・ジェーロに出てくる主人公のキリマンジェロに
似ているかどうかだ！）

リトルを見れば、いかに期待を裏切ってくれたかがよくわかる。僕には彼の言っていることや、彼自身についてのことが、まったく理解できない。

ウィルとは仲が良いらしいが、僕はウィルについてもまったく無知だ。だから、彼については知る余地がない。これからは、何が待っているのだろう。きっとこの先に待ち受ける扉が、その第一関門なんだ。

僕は、ワクワクする気分とドキドキする気分を同時に持ち合わせて、彼の後についていた。

「さあ、心の準備はいいかい？」

ウィルが立ち止まる。この先には、扉が待ちかまえている。

鋼鉄で出来た、いかにも厳重な警備、といった雰囲気漂う扉だ。それをウィルが右手を突き出して押すと、重い金属音を響かせて鋼鉄の扉が開いた……中の空気が僕等を出迎える。緊張の瞬間だ。

「おっと」

そういうと、ウィルはさっと僕のほうへ振り向いた。

「君には、あらかじめしてもらったことがあるんだ。さ、扉の向こうは見なくて良いから、私に着いてきなさい」

僕は、扉の向こう側の世界を見る間も無く、ウィルに押し戻されてしまった。

廊下を五メートルほど引き返すと、脇にある粗末な扉を彼が開けた。

「まずは着替えてからだ。その棚に法衣が入っているから、自分のサイズに合うものを着てくれ」

ウィルは部屋の奥を指差した。

そこには、クローゼットがある。同じような黒い服が何枚も掛けられていた。

「儀式の場は神聖だ。着たら、そこでおとなしく待っていてくれよ？ 私は儀式の準備をしてくるから」

「わかったよ。着るだけで良いんでしょう？」

すると彼は相槌を打ち、ドアを閉めた。

それにしても、どうして”ホーイ”なんてものを着なければならぬんだらう？

別に着なくたっていいじゃないか。

神聖な場だから？ どういうことなのか、僕にはよく理解できない。

僕は、適当に選んだ法衣を着てみた。さらさらとした着心地で少し埃臭い。

ずっとクローゼットの奥にしまいこんでおいたときのような匂いだ。

服は、室内の涼しさを吸収して、ひんやりとしていたが、不思議と直に身体が温まった。

落ち着く。余計な考えが思い浮かばない。

しばらく更衣室で待っていると、ウィルが儀式の準備をし終えたらしく、閉まっていたドアをノックした。

「入っても良いかい？」

ウィルがドアを開けて中へ入ってくると、僕は彼に誘導され、儀式の場へと連れてゆかれた。

扉を開け、中に入った瞬間から、その場所の重苦しい空気が僕の上にのしかかってきた。ウィルは平然としているが、僕はそれどころじゃない。

ウィルが口を開く。

「いいかい？ 新名の儀式は、君の体力・精神力・及び賢さを判定する。緊張する必要は無いからね」

ウィルの声が天井に呼応して、響いた。不可思議な音響効果があるようだ。

僕は、彼にそうなだめられたものの、なかなか緊張はほぐれなかった。

「まずは君の体力を測定する。少しどいていなさい」

すると、床の中央が一メートル四方の四角い板に切り取られ、ふたのようにして、開いた。

真っ暗な四角い穴からは、何かが機械音とともに競りあがってくる。

僕は想像した。大概の漫画なら、ここで何らかのマシンが登場するはずだ。

しかし、想像のとおりにはいかなかった。

四角い穴から現れたのは、ごくごく普通のランニングマシンであ

る。

「ま、体力を計るといったら、これが適当だろう」

まあ、確かにそうだが……

「ねえ、これが一体魔術とどんな関係があるっていうの？」

と、言いたい。

「魔術師として活動していれば、そのうちわかるぞ」

一体何がわかるのか、僕には分からない。

僕は狐にだまされたようにウイルスになされるがまま、ランニングマシンの上に立った。

「それでは、はじめよう」

うるような機械音とともに、ランニングマシンのベルトコンベアがゆっくりと動き出す。

最初のうちはそうでもない。だが、一分二分と経っていくに連れ、次第に息も上がり、足がおぼつかなくなってきた。下手したらこけるかもしれない。

マラソンをはじめてから、十分と経たないうちに、僕はギブアップしてしまった。

「これくらいでへこたれているようでは……」

ウィルは首を振っていかにも深刻そうにつぶやいた後、僕をさっさとランニングマシンのところからどかした。

そして、ウィルは真後ろにあった本棚の縁にあるスイッチを押し、ランニングマシンを元通り床の下に収納した。すべて全自動である。どれだけハイテクなのか、それとも墮落なのかわからない。

僕がそんな彼に関心をしていると、今度はどこかから鉛筆と机を持ってきた。

「さあ、次は精神力を判定する」

そう言うと、彼は僕を机に就かせ、問題用紙を目の前に置いた。

方眼用紙であるが……？

「そこにマスがかかっているだろう。そのマスを使って、いくらでも円周率を計算してくれ」

まさか！ ランニングの次に円周率と聞いて、僕は嫌気がさした。僕は数学が苦手だ。一体、精神力を判定するのに、何が役に立つというのだろうか？

「あの、円周率の計算の仕方がわからないんですが……」

「それなら、数学の教科書を貸してあげよう」

そういうと、ウィルは本棚から数学の教科書を取ってきて、僕に渡した。僕が使ったことのある教科書だった。

そもそも魔術と円周率は何か関係があるのか？

「ずっと続けることは忍耐の洗練にもつながる。 忍耐力を養うのは賢者の石を作り出すカギでもあるんだよ」

意味がわからない。

「もしかしてウィルは錬金術師？」

すると、ウィルはニツコリと口元だけ笑い、僕の意見を流した。僕も、それ以上は聞かなかった。

秒針が時を刻む。ふと、時計に目をやると、まだ十分しか経っていない。僕の中では、もう一時間近くの時間が流れたような気がする。ウィルはさつきから本棚のところをうろろしており、背表紙を眺めては書見していた。さつきから、それが気になって仕方が無い。一体何を調べているのだろうか？ 彼が何か動作をするたびに目が行く。

ウィルはそんな僕を見兼ねたのか、こう言った。

「気が散るようなら、私は外に出ているが」

僕は「はい」と返事をして、ウィルに外へと出てもらった。彼が外に出た瞬間、僕は今までに堪えていたのかもしれない眠気に見舞われた。ウィルは外に出ている。少しくらいなら寝ても平気かな……？

僕は机に肘をついて、あごを支えた。

ちよつとくらいなら……寝ても大丈夫……

次に僕が起きたのは、一時間後だった。頭上で男の声がある。どうやらウィルのようだ。

「いくらでも、とはいったが、その時間を睡眠に使って良いとは言っていないぞ」

彼は、優しい声音で刺のあるセリフを吐いた。半分寝ぼけていた僕だが、その意味は直に理解できた。

「ごめんなさい……」

「もう、計算しなくて良いんだね？」

僕はうなずく。もう円周率なんて計算する気分じゃない。寝て起きてまでも、そんなことをする根気は無かった。

「次は寝ないでくれよ？ 君の賢さを判定するんだから」

僕は目をこすりながら、準備をしに行ったウィルを待つ。しばらくして、彼は一冊のファイルを抱えて戻ってきた。今度もペーパーテストなのか？ うんざりする……。

「問題を解いてもらおう。これも時間制限は無しだ」

そう言って、ウィルは僕に紙を渡した。

紙に書かれている内容を見て、僕はうんざりした。どう見てもIQを診断するような問題にしか思えない。僕はこういうのが苦手なんだ。あーあー、嫌になっちゃうよ……。

ウィルから紙を渡されてからしばらくは、鉛筆をくるくると回して無制限の時間をもてあそんでいた。

ふと、ウィルの方に目をやる。相変わらず無表情だ。もしか、

またさつきと同じように、本来の使用目的でない用途に時間を費やしたら怒られてしまうのではないだろうか。

僕はそう思い、慌てて問題に取り掛かった。

しかし、数分後には集中力が切れて呆けていた。これではきりが無い。

それを見兼ねたのが、ウィルはこう言った。

「邪魔であるようなら、私は外に出ているが、良いかね？」

僕は、今回もウィルに外へ出てもらうことにした。彼は、部屋を出て行く瞬間にチラとこちらを見やって、寝るなよ、と僕に合図を送った。きつと、寝ないさ！

僕は再び問題に取り掛かる。問題の内容は、計算問題から文章題、図形問題など、バラエティに富んでいた。だが、どれも簡単なようで難しい。考えるのが面倒くさいや……。なんだか、眠くなってきた。さつきと同じ展開には……したくないが、本能には勝てない。

僕は再び眠ってしまった。

次に起こされたときは、時計の針がもう午後の三時を周ろうとしているところだった。

「いやはや、君。ちゃんと毎晩寝ているのかね？」

「はい……」

そういえば、昨日は徹夜してルービンコックの魔法シリーズを読んでいたんだっけ。でも、二時間は寝たはずだ。（病み上がりだが、本を読むためなら、これくらいお茶の子さいさいなんだ！）

「何時間寝たんだ？」

「二時間くらい、かなあ」

すると、ウイルはあきれた、と言わんばかりにぐるりと目を回して、肩をすくめた。

僕は、昨日読んだ本の内容をぼんやりと思い出す。その間にウイルは、僕の解いた問題用紙を吟味していた。そして、その答案用紙をファイルにしまいこむと、また別の部屋に向かおうとした。そのとき、ウイルは僕にこう言った。

「リビングでくつろいでいな。そこにリトルもいるだろうから」

僕は、儀式の場を出た後、法衣を着た部屋で普段着に着替えた。寒い。廊下の温度は外と大して変わらないくらいなんだろう。僕は、リビングに着いたとき、再びぬくもりにつつまれた。リビングに着くと、リトルが早速質問してきた。

「新名の儀式はどうだったかね？」

あの意味不明な儀式……いや、ただのテストか。僕はその内容を思い返した。

「どうもこうも、あんたたちの考えていることはさっぱり理解できないよ」

流石に言い過ぎたか。 リトルは、なんだと?!といきり立った。

「お前こそ真剣なんだろうな?」

僕は彼を睨んだだけで、その場をやり過ぎた。 争いたくは無
い。 彼の方が能弁なんだ。 言い争ったところで、結果は目に見
えている。

僕は皮肉を言ってやった。

「真剣ですよ。 子供は大人の鏡ですから」

リトルは、この言葉を聞いて黙りこくった。 返す言葉が見つか
らないのか?

しばらくして、彼はため息をつき、再びソファーに沈んだ。
無音の時間が流れる。 二人の間に流れる沈黙は、いつでも嫌な
雰囲気漂っている。僕は、この沈黙が苦手だ。 彼と二人きり
でいるときは、よくこうなる。

十五分くらい経ったとき、ウィルがリビングに入ってきた。 手
には、ファイルがある。

彼は、リビングの入り口でそれを開くと、語り始めた。

「今、分析した結果を述べよう。 ええ……君は少し体力が無さ過
ぎる上に、賢さにも欠けているようだ」

するとリトルはけしからん、とでもいわんばかりに、鼻でフンとた
め息をついた。

「まったくだ」

ウィルはリトルを無視して、僕を見た。

「しかし、君の場合は、寝不足も関係しているだろうから、これが正確なデータだとはい概に言う事ができない」

そう言うとウィルは、僕等の座っているソファに腰掛けた。僕からもリトルからもメートルほど離れている。

僕は、それを聞いて少しだけ機嫌が良くなり、リトルにむかって「ほらみる」と毒づいた。

しかし、リトルは食い下がった。

「だが、こういう日のために、体調は整えておくべきなんだぞ」

ウィルはリトルをなだめた。

「まあ、大目に見てやれ。そして、レンディ君。今日は疲れただろう。もうやることは無いさ」

その後、三人はしばらくの間、リビングでくつろいでいた。執事のトモヒサがお菓子を持ってきてくれたので、僕はそれにありついた。しかしリトルとウィルは一口も食べていない。ウィルはファイルとにらめっこしている。リトルは帽子を深くかぶつて、何か物思いにふけているようだ。なんだが、僕だけがお子様であるかのような気分になる。

しかし、子供いでいられることは、幸せなことなんだ。だが、それも時間の問題である。

時計の針が午後の四時を周った。すると、さっきまでファイル

とにらみあっていたウイルが不意に立ち上がり、克明に言い放つ。

「名前が決まったぞ」

名前、というのは、おそらく僕の魔法名のことだろう。

さつき行った儀式の結果が出たのだろうか。

ウイルは、こう続けた。

「レンディ君？ 君にもっともふさわしい魔法名は……」
C R O W^{クロ}
Z^ズ”だ！”

第五十四話・クローズという名

「え……？　それが、僕の魔法名？」

すると、ウィルはいかにも真面目そうな口調で

「そっだ」

と答える。僕は、彼にだまされているようにしか思えなかった。

「ちよつと待って！　クローズは僕の苗字だよ？　どうしてそれが魔法名になるの？」

適当なのだろうか？

「どうしてと言われても、そう決まっちゃったのだから仕方がない。君の運命さ」

ウィルはきつぱりとそう言った。

運命とは奇遇なものだ、と僕は思った。続いて、彼はぶつくと呟く。

「それにしても、珍しいな……過去に、まったく同じ名前の魔術師がいた」

「まったく同じ名前？　どんな魔術師だったの？」

僕は、ウィルの言葉に興味が湧く。

「どんなも何も、私はあまり知らないのだが、幸せと言うものについて、かなりの執着心をもった魔術師だった」

幸せを求めるのは人として当然のことではないのだろうか？

「彼は自らの追い求めるものに対して私の意見をよく求めてきたが、その執着心というものに、私は着いていけなかった。そして、ある日を境に姿を消した」

「それで、どうなったの？」

「知らないさ。その後のことは天のみぞ知る、と言ったところかな。彼がこの世に残したのは、ある一言だけだ」

僕は、その一言について、聞いたかった。しかし、いざ聞こうとしたときに、ウィルのかもし出すことなく人を寄せ付けない雰囲気、困気に圧倒されてしまい、結局僕は、何も聞けず仕舞いに終わった。そして、彼は遠くのほうを見て

「君と似ていたような……気がするな」

と、言った。

僕はその魔術師と自分を比較した。彼（もしくは彼女）は、僕にみたいに勉強も運動もダメで、おまけにネクラな性格なのだろうか？ そして僕は、幸せに対して執着心を持っているか？

答えは、わからない。きっと幸せになりたい、とは思っているのだろう。ただ、それについて他人に意見を求めるほど執着心を持っているわけではないと思う。だとすれば、名前は同じでも、

中身は違う人間同士のハズだ。僕はどうして彼と同じ名前になったのかわからなかった。

すると、今まで押し黙っていたリトルが

「レンディ？ 世の中では不思議な偶然というのも、よく存在する」

と、言った。しかし、それを言い終わるか終わらないかのうちに

「必然だよ」

と、ウィルが付け加えた。リトルは彼の一言により、閉口した。そして、今までこわばらせていた目つきをふとゆるめる。

「確かに。伯爵に言わせて見れば 必然かもしれん」

伯爵、というのはウィルのことだ。

すると、その伯爵がリトルに目を合わせ、不思議な笑みを浮かべた。

「クククク……」

僕は、彼等の話している内容がいまいち飲み込めなかった。

偶然？ 必然？

前者はともかく、後者については、さっぱり……。

すると、ウィルは手を叩いて、話題を変えた。

「さあ、ともかく！ 名前が決まったんだから、今日はそれでよし、だ。ちなみに”クローズ”という名前には、どんな目的が含まれ

ているのか、説明しよう」

リトルと僕は、ウィルの方を見つめた。

「クローズの”クロー”というのは、すなわちカラスのことだ。次の”ズ（Z）”には、魔術的な記号で”つかさどるもの”という意味がある。

カラスは昔のローマでは戦いのシンボルとされていてね。他にも、イヌイットや中国などでもカラスにまつわる伝説はたくさんあるんだ。どちらにしろ、君に足りないのは、賢さと体力と精神力、すべてだ。その全てを補うために、少なくとも、賢さを養う必要がある。方法を知らなければ、元も子もないからね。つまり君には三つの足りない要素を補っていく手始めに、賢さが必要だ。カラスには諸説があるが、賢い、ということだけは、君でも言えるだろう？」

「だから、カラスなんですか……？」

僕がそっと聞くと、彼は

「そうさ」

と、笑顔できっぱりと答え

「だから、君は”カラス遣い”だね」

と、言った。

僕は……絶望した。

第五十五話・夢の世界へ・

カラス遣い……なんて、格好いいジヨブなんだろう！ そのとき、僕が少なくともカラスに嫌われてさえないなければ、そう思えた。

自分の馬鹿！ あともうすこし頑張るか、手を抜いておけば、こんな結果にはならなかったはずだ。

「そんなあ！」

僕はすつとんきょうな声をあげた。すると、ウィルが不可思議そうな目つきで、僕を見る。

リトルは、首を振って、ため息をついていた。

「どうしたんだ？」

「どうしたも……どうしたも……」

僕がなんと説明しようか迷っている間、リトルはちらちらと僕の方を見やる。それをよそに、ウィルは僕の答えを興味津々に待っていた。僕は口をゆがめて、言葉を切り出した。

「その……お言葉ですが、僕はカラスが苦手なんです」

僕がぼそぼそと答えると、ウィルは甲高く笑った。

「はは！ それは気の毒だ」

なんだか、不快な気分になる。彼はきつと、サディストに違いない。

だが彼は、なだめるようにして、こう言った。

「まあ、何事も精進だよ。時にはつらいこともある。だが、まだカラスをパートナーにしていけないのだから、そう焦ることもないだろう」

確かに。焦る必要なんて、どこにもない。第一に、僕はカラスの遣いなんて、必要としていないんだ！

何が、カラス遣いだ。笑わせないでくれ。仮にも僕は、カラスたちから嫌われている。僕の行くところには、決まってイライラしているカラスがいるんだ。何故だかわからない。第二部を読んだことがある人ならご存知のとおり、この前、ジェシーと一緒にウーネ・オズ・クラプスの大道芸を見に行ったときも、僕はたくさんのカラスに襲われた。

一般的に考えてみれば、何か特別な事情でもない限り、カラスはあんなふうに襲ってきたりはしないだろう。でも、僕にとってはとてもそう思えない。きっと誰かに呪われているんだ！

でも、誰に……？ リトルかなあ。

いやいや、余計に被害妄想が膨らむだけだ。よしておこう。

ウィルとの話はそこで一旦幕を閉じた。気付くと、既に時計の針が午後の五時を周っている。

僕は、ウィルに「もう遅くなるから、そろそろ帰ったほうがいいだろう」と指図を受け、彼の手配で執事のトモヒサに車で家に送ってもらったこととなった。一方、リトルと言えば、ウィルの家に残るらしい。骨折を治療をするから、といていた。ウィルは医師免許を持っているそうだ。だが、彼のところで十分な治療を受けられるのだろうか？

もとは、といえば僕が悪い。

あの日、リトルと一緒にビルから降り立ったとき、僕がリトルを下敷きにしてしまったのが原因だ。

あの時は、「何かあったら、絶対に責任を取ってもらうんだから！」などと、調子付いていたが、今更になって、こういう形で帰ってくる心痛い。

しかし、病院に行かないのは、何故だろう。僕には、それが疑問だった。

その日の晩、僕はリアルな夢を見た。

リアル、という感覚は、現実に近いものに対して使う。夢なんてものは、ただの幻想に過ぎない、と思っている人も多いかもしれないが、僕の見える夢は耳が聞こえれば、温度もわかる。目も見えないし、匂いや感触まで本物のように伝わってくるのだ。ここまですりリアルだと、現実世界と間違えてもおかしくない。現に夢の中で夢だと気付くことは、極まれだ。だから、現実に近いのである。

その日、見た夢にはピエロのようなクラウンがでてきた。ヘチマ型の衣装を着て、独特な歩き方をしている。背は高い。百八十センチくらいはあるだろうか。僕は、十メートル程離れた木陰から、そのピエロを眺めていた。

ピエロはあたりをきよきよと見回している。僕は、なぜだか彼に気付かれなくて、じつと息を殺した。

すると、ふと口元を抑える何かを感じる。手袋をした手だ。手袋をしている、といえばリトルと、その次に浮かんだのがウィルだ。(どちらも手袋をはめている)

一体誰だろう。僕は必死に抵抗した。そして、後ろにいる人

物の正体を突き止めるため、振り向こうとした。しかし、身体をしつかりと抱きかかえられている。僕はそいつの胸倉に埋もれるようにして振り返った後、顔を見上げた。

なんと、後ろにいたのは、リトルである。

「どづしてここにいるの？」

「お前の居所を追ってきた」

僕の居所を追って来ただと？

「え……ここは、夢の世界だよね？」

「そうだ。お前も薄々気付いているだろうが、私たちは今、魔術師として無意識の世界をコントロールする立場にいる。だから、リアルな夢の世界にいたことが多いただろう？」

リアルな夢を見ることが多かったのは、そのせいだったのか！
確かに、リトルによつて魔術師にされたあの日以来、僕はリアルな夢ばかりを見ているような気がする。

「魔術と夢は、何か関係があるの……？」

すると、リトルは焦った様子で辺りを見回した。

「それについては、あとだ。ここを離れるぞ。とにかく、私に着いて来い」

僕はリトルに連れられて、さまざまな場所を通り抜けていった。リトルは夢の中でも、足を引きずっている。もちろん、マツバ杖も、現実の世界にいたときと同じように使っていた。

だから、あまり早いスピードでは歩かなかつた。ゆっくりと、だが止まらずに森を抜け、丘を下り、町をいくつも通ってゆく。

はじめて気付いたことだが、僕達は地面に足をつけていない。つけていないが、歩いてはいる。空中を、歩いているのだ。

地面に足をつけていないのに、ひきずっている、というのは、空中でひきずっているような動作をしていたからだ。地面に足をつけていないのに、動作に影響が出るのは、この世界ならではのだろうか。だとしたら、どこまでもリアルだ。夢の世界なのに……と、僕は思った。

でも、夢の世界なら、なんでも好き放題できるはず！

僕達が夢の世界を歩きぬけていく中、リトルはずっと険しい顔をして、一点を見つめていた。何か、考えにふけっているのだろうか。

しばらくしたあとで、僕たちはオックスフォード駅前のこぢんまりとした公園にやってきた。

驚いた。夢の世界にも、現実世界と同じような場所があるとは……

広場の木陰にある、木製のベンチに二人で腰をかけたとき、リトルが話しを切り出した。

「お前は、これから夢の世界にきたときは、ここにいるようにしろ」

せっかく、何でもできるよつになると思ったのに！

「どつしてっ」

「ここが、一番安全だと思うからだ。一人で妙なところに行ってみる？ 夢の世界は天から地までさまざまだ。お前がいつ夢魔に狙われてもおかしくないからな。それに今の私にはお前の面倒など見切れん。何せ、この足だ。それで何かあつたら、都合が悪いからな」

僕は、顔をしかめて、リトルをにらんだ。すると、リトルは仮面の穴からわずかに見える片方の眉を吊り上げて、付け加える。

「お前はまだ初心者なんだから、仕方が無いだろう。それにウイールにも言われたじゃないか。お前には賢さが足りない。それを補うための修行はこれからだ。まだ時間はある。早々に命をたれては、お前を魔術師にした意味がないのだ」

彼の言葉には、ところどころひっかかるところがあった。僕を大切に思っているのか、それとも単なる義務なのか知らないが、僕を危険な目にあわせたくない、と言う彼の思いはなんとなく伝わった。

「わかったよ。ここにいればいいんでしょ？」

「そうだ。わかったなら、良い。今日は、お前がいつ魔術師として見る夢の世界にきてもいいように、パトロールしていたからこそ、今救えたが……レンデイ？ 夢の世界には恐ろしい夢魔がたくさんいる。中でも、さつき見たピエロの男。あれは夢魔の中でも有名な奴だ」

僕は、そう聞かされた瞬間、背筋に悪寒が走るのを感じた。

「まさか……！ あんなおどけたような、クラウンが？」

リトルは、うなずいた。 ”有無”と返事を返している。

「今は物騒なんだ。 夢魔が人からエーテルを奪う。 それも尋常でない量を、だ。 昔はそんなことがなかったんだが……きっと奴もその類に入るに違いないからな。 油断できん。 だからこそ、魔術師は技を見につけ、それに対抗するんだが……」

リトルはそこまで言うと、いかにも「僕が悪い」というように、骨折した右足を叩いた。

「このざまだ。 だからお前の面倒は見切れんのだよ」

僕はリトルに反抗したい気分になった。 しかし、その反面、僕が彼の骨折の原因だったのではないかという自己嫌悪も見え隠れする。 一人にされるのは、嫌だ。 それを振り切るために

「僕は、ひとりだって、なんとかできるよ」

と、言った。 しかし、そう言ったは良いものの、やはり一人でこの世界に放りだされたらどうすればいいんだろう、という不安がよぎる。

そういうことを考えながらしばらく黙り込んでいれば、リトルが仮面の下で口を開いた。

「お前ひとりでは無理だな。 まずは誰かお前の面倒を見てくれる口を見つけないならならぬだろう」

「どつやってさっ？」

すると、リトルは深いためいきをついて

「さあな」

と言った。

「私はこのありさまだ。それに、伯爵も何かと忙しい見でな。私の治療が終われば、すぐに別のところへ発つと言っている。だから、ゆつくりと探すしかないだろう」

そう言ったリトルだが、彼の目にはこの先の平明さを垣間見ることが出来なかった。

彼は、未来から来ている。確か、三十年後だ。

三十年後の未来から、彼の知り合いの魔術師などを連れてくることはできないのだろうか？

「ねえ、リトル？ 一旦、未来に戻って、知り合いの魔術師とかを連れてきたら、いいんじゃないかな」

彼は、僕の発言を聞いて、ぎょっとしたらしい。そして、落ち着き無くそこらを見回した後、彼は俯いて、またため息をついた。

「その仲間が、生きていればな」

僕は、その言葉の衝撃で、しばらく声が出せなかった。そして、次に彼の境遇に対する興味が卑しいほどに、むくむくと湧いてきた。

「死んだの……？」

僕は、そつと聞くつもりだった。しかし、彼から帰ってくるのは、厭世的な色に塗り込められた、言葉だけだった。

「ああ、死んださ。一人残らず。それも全て、夢魔のおかげだ」

彼はそついうと、マツバ杖をついて、立ち上がり、足早に公園を立ち去った。

僕はこのとき、本当の意味で、一人にされたのだと、錯覚した。

第五十六話・再会・

もしものことがあったら、不安である。僕は、誰か先輩になつてくれるような魔術師がいないか、探してみることにした。

一概に探す、といつても、方法はさまざまである。だが、僕は一番身近で手っ取り早い、「インターネット」を利用して、魔術師を探すことにした。

一通り調べてみたが、まず僕の年齢に適応した人物が見つからなかった。

魔術師のことについてなら、本などで調べたりしたからわかっていたものの、実際の魔術的活動をしている人を探すのは、かなり困難なことだ。そういった人が運営しているサイトなどを見ても、遠すぎたり、身元がよくわからなかったりする。魔術師だけに、ミステリアスではあるが、これではダメだ。僕には、かなわない。

次に、魔術団についてのサイトを調べてみた。しかし、これも入団する際に年齢制限が設けてあったり、テストが必要だったりするので、ダメだった。どれもこれも、なかなかいい具合に条件がそろわないので、当てが見つからずに終わっていた。

やっぱり、ダメか……

三日間、ネットで探してみたが、結局いいところが見つからなかった。

そうしている間に、僕はまたリアルな夢の世界へと入り込んだ。

最初に僕がいたのは、シルヴァニア公園の中である。鬱蒼とした茂みにか囲まれ、水の匂いが僕を取り巻いていた。ふと、何かの鳴き声が聞こえてくる。

僕の勘は、するどくその鳴き声の持ち主を当てた。　しゃがれたような、低い声。

そう、カラスだ！

僕は、慌てて、辺りを見回した。　木陰の薄暗がりから、まるで僕を警戒するように、カラスの鳴き声は聞こえてくる。　やがてそれは、数を増し、僕の立っている場所の四方八方を取り巻いて、壁や天井となつていった！　きつとこの公園に生えている木の枝一本一本にカラスが止まって、一様にこちらを見ながら、鳴いているのだ。

その鳴き声に、脳内を占領されそうになる……僕は、その恐怖から逃れたくて、必死で耳をふさいだ。　しゃがみこんで、いないふりをする。　下手に動いたりしたら、気に障るかもしれない。　しかし、その声は、僕の両腕をすり抜けて、鼓膜の奥に入り込んできた！　もう逃げられない。　いや、逃げられる。

僕は、死に物狂いでカラスの壁を突き抜け、オックスフォード駅へと向かった。

リトルから、夢の世界にいるときは、あそこにいる、といわれている。　その理由は、彼が面倒を見切れないから、だ。　と、いうことは、きつと安全にしていることができるから、なのだろう。

僕は、そう解釈し、必死でオックスフォード駅へと、向かった。　いつも見ている景色の町をどんどん通り過ぎてゆく。　やがて、オックスフォード駅についた。

オックスフォード駅の広場は、反対側のプラットホームを出たところにある。　僕は、反対側のプラットホームを目指して、かけた。　後ろからは、カラスの鳴き声が聞こえてくる。　追ってきている

のだろうか。

予想は……当たっていた。僕の頭上を何十羽ものカラスが一斉に羽ばたいて、オックスフォード駅へと向かってゆく。そして、駅の屋根を越え、広場の方へと舞い降りていった。

僕は、絶望した。何故、彼等は僕のしようとしていることができるのか。僕には、わからない。

頭の良いやつらだ！ と、思うしかないだろう。僕は、仕方なく、もと来た道を引き返すことにした。

今度は、道のりを帰る。同じ道では、カラスたちにもよく分かっってしまうだろう。出来るだけ、人気の無い小道を通っていったほうが、安全だ。僕は、もと来た道の一本横にそれた小道に入って、身をくرامせることにした。

見たことがあるんだか無いんだかわからない看板がよく目につく。記憶にないものが現れることもあるが、その場合は単なる偶然の産物だ。僕は、それを気にすることなく、狭い路地を分け入って隠れた。

そろそろ、カラスたちはあきらめた頃だろうか。不安げに空を見上げた。すると……黒い一点が。あれは、カラスだ！

僕の頭上にある、雨よけ用のテントにも、カラスたちが留まっているらしい。テントから出てみたら、三羽のカラスがたむろしていた。恐ろしいことだ。気配もなく、僕に近づいてい来るなんて！

僕は、カラスたちから逃れたくて、必死で走り出した。もう、いいかげんにしてくれ！僕はうんざりなんだ。どこか、隠れさせてくれそうな、店はないだろうか？

僕は、それを探しながら、狭い路地を走り抜けていった。相変わらず、カラスたちは僕の後を追いかけてくる。焦る気持ちばかりが、優先して、身体はそれについていけなくなってきた。

そして、とうとう、僕は転んだ。

視界が吹っ飛ぶ。両膝をはげしくすりむいたようだ。最初の頃の感覚は麻痺しているが、すぐに痛みが襲ってくる。泣きたい。もう、泣きたい！ けど、それどころじゃない。僕は、隠れさせてくれそうな店がないか、視線を夢中で走らせた。

まず、目に入ったのは、僕から五メートル離れた店。白い壁で覆われている。そして、次は、僕から十メートルほど離れた、ガラス張りの窓がある店だ。そして、最後に……一番最後に気付いたのは、なんとすぐ近くにあった木造のこぢんまりとした店だ。

僕は、一番近い店に、我先にと飛び込んだ。カラスにさきまわりされては、元も子もない！

玄関先には、赤いぬいぐるみの置かれたるが、ドアのつつかえの代わりに置かれていたが、僕はそれを蹴倒して、店の中へ入った。あとで、謝ればいいさ。とにかく、今はカラスたちから逃れたい。ここまで必死になるのも、久しぶりのような気がする。

粗い息を抑えながら、僕は、ドアを閉めて店にかくまった。背後でカラスの鳴き声がある……ドアにもたれていた僕は、バクバク脈打つ心臓の鼓動を感じながら、店の中を見渡した。

ほこりっぱい木造のつくりだ。掃除していないのか。独特の店の匂いというものが染み付いている。そこらには、子供が遊ぶような、ぬいぐるみばかりが飾られていた。

「ここは、おもちゃ屋なのだろうか……？」

やっとのことで動機が治まってきて、ふつと一呼吸をついたとき、遠くから聞こえてきた声に、思わずどきりとさせられた。

「誰だ」

どこか、聞き覚えるある声のような気がする。しかし、何処で聞いたのだろうか？ 脇から二回に続いている階段の上の方から、聞こえてくる。

澄んだまあるい声だ。続いて、声の主は、姿を現しながらこう言った。

「あの、お客様ですか……？」

第五十七話・再会 2・

先に言っておくが、僕は目が悪い。

二階の階段から降りてくるとき、僕は声の主が、下から二段目が三段目にくるまで、その正体をつかめなかった。

声の主は、男のようだ。長めの金髪に、灰色の瞳。年は三十歳くらいだろうか？ 紫色のベストを着ている。

男は、階段の下から二段目までくると、驚いた様子で立ち止まった。僕も、驚いた。

すると男は、僕に近づきながら「またきみか」と、気さくに話し掛けてきた。

「お、オッズさん……？ あの、腹話術師の……」

そう、彼はウーネ・オズ・クラブスで見た”天才腹話術師のオッズ”である。

「おお、そうだと。覚えていてくれたんだね。それにしても、君がここにくるだなんて、奇遇だ」

まさか、顔を覚えられていたとは……。

僕は、その返事を返さんと、色々なことを思考した。僕が、ウーネ・オズ・クラブスで、彼の芸に感動したこと、そして、カラスに襲われたこと。そうだ。彼には言い忘れていることがある。

確か、あのとときも、今と同じような状況に陥って……

「あ、あの！ あのとときは、ありがとうございました……。僕を襲ってくるカラスから助けってくれた人ですよ？ でも僕、また襲

われちゃったみたいで……夢の世界なのに。 あははは」

すると、オッズはニヤリと笑ったあとで、そばにあった窓から外の様子を覗いた。 僕も、窓の外を覗く。 カラスたちがいぶかしげに、店の周りをうろついている。

「少しまってくれ」

彼は、そう言うと、無理矢理僕をどかして、店の外へと出て行った。 僕も、彼に押されて、店の外に出された。 すると、僕達に気付いたのか、カラス達は一齐にさわぎだす。

まるで赤ん坊の泣き喚く声にエコーをかけたような、強烈な鳴き声である。 彼のことを警戒しているのだろうか？

続いて、オッズは懐から杖のようなものを取り出すと、それをカラスたちに向け、何か呪文を唱え始めた。 なんとやっているのかわからない。 彼の喋った言葉は、カラスたちの泣き喚く声にかき消されて、ほとんど聞き取れなかった。

しかし、次の瞬間、カラスたちは、いつせいに鳴くのをやめ、地面に落ち着いた。 コトリとも音を立てない。 続いて、カラスたちは、その場から舞い上がり、どこか遠くの方へ、飛んでいってしまっただ……。

「す、すごいや……」

僕が感心している間に、カラスたちは、ほとんどいなくなっていた。

「君によく似た友達がいたからね。 そいつも年がら年中カラスに襲われていたんだ」

彼はそう言うと、杖を懐へと仕舞った。

まさか、僕と同じ人種の間人がこの世にいたなんて！ 彼の一言が、僕にどれだけの勇気を与えてくれただろう！

「ところで、君の名前は？」

突然、彼が名前を聞いてきたので、僕はどきりとした。

「あ。ぼ、僕は、レンディ・クローズっています」

僕がおどおどと答えると、彼はうなずき

「そう。ボクはね。オッズ・リポリアン！……と、いうのは、嘘で、本当の名前は、オレグ・ロマノビッチ・スクリポフと言っんだ。でも、どっちで呼んでくれても構わない。ボクは、どちらでもあるからね！」

と、大層芝居がかった調子で、自己紹介してくれた。さすが芸人だ。

「それにしても、君はどうしてこの世界にいるんだい？」

「え……？」

オッズは笑いかける。

「さっき、言っていたじゃないか。自分が夢の世界にいることを自覚しているんだろう？」

「は、はい……」

「なら、話は早い。夢を自覚しているもの同士の世界なんだ。ここはね。魔術師なんかがよく来るんだけど、君みたいな一般人がくることは、珍しいな」

そう言って、彼は不思議そうに僕のことを見つめた。

僕は、彼になんと説明しようか迷った。今までに色々なことがあったが、ほとんどリトルに関することだ。ましてや、僕が本当は魔術師であるということなど、彼の存在を説明してからでないと、伝えられない。

僕が、なんと返そうか迷っている間に、彼は

「立ったまま話をするのもなんだから、奥でゆっくりと話を聞こうじゃないか。それに」

と、言って自らの膝を叩いた。

「君のケガの手当てもしなくちゃ」

僕は彼にそういわれた途端、再び膝がじんじんと痛むのを感じた。

僕は、オツズに案内されて、店の奥へと通された。オツズは、ちよつと用事があるから、といつて、僕を先に店の中へ通す。そして、一分か二分したときに、彼は僕の後を追って、店の中を案内してくれた。

オツズの店の中は、ほこりっぱさと、どこか懐かしい木のぬくもりでいっぱいだった。ところせましと、かわいらしい売り物のぬいぐるみが置かれている。木は琥珀色に輝いていて、それが外から差す光を受け、店の中を温かく照らしている。つかの間の休息であるような、そんな雰囲気を感じた。

僕は、オツズに「適当な椅子に座ってくれ」と指示された。ケガを手当てする道具を持つてくるから、らしい。僕は、そばにあった、可愛らしいロッキングチェアに腰掛けた。しばらくしてオツズが戻ってくると、彼は僕の両膝を丁寧に手当てしてくれた。

「こんなに血が出ていちゃ、いけない。早く手当てをしなきゃ」

彼の手は、温かかった。優しい人の手は、あたたかいというのは、本当なのだろうか？

一通りケガの手当てが済むと、僕は二階の作業部屋へと連れてゆかれた。

階段を上ったところの突き当たりにある扉をくぐったところが、彼の作業場だった。

ところせましと、書物や手芸の道具が置かれている。作業台として使われているであろう、机の上には、作りかけのぬいぐるみが大量に積まれていた。

僕達は、作業台のそばを通り抜け、隅っこのテーブルと小さなキ

ツチンが備え付けられたダイニングに座った。

「そこに座って。今に、お茶を入れてくるよ」

彼はそういうと、小さな台所の方へと向かっていった。

僕は、作業台に関心しながら、オツズに案内されたテーブルの席に座る。

彼が台所へ向かう途中で、僕は、彼に話し掛けた。

「何を作っているの？」

「ああ、見てのとおり。小さい子向けに、ぬいぐるみをつくっている。職人なんだ」

彼はそう言うのと、鼻歌を歌いながら、ポットのお湯をカップに注ぎはじめた。そして、彼が奥の台所からお盆を持ってもどって来たとき、僕はまた彼に声をかけた。

「職人なの……？」

彼は、うなずいて、向かい側の席に座る。

「そう。ここはボクの工房アトリエみたいなものだ」

そういうと、彼は僕にクッキーの入った皿を進めてきた。中に入っているクッキーは、さまざまな形をしている。猫や犬、猿などの形をしたものから、中には木や芋虫の形をしたものまで！

しかも、色とりどりのビーズやチョコチップで綺麗に飾り付けられていて、なんだか食べるのが勿体無いほどであった。

「手づくりのクッキーなんだ。是非、食べて」

彼が、僕にクッキーを食べると積極的に勧めてきたので、早速それに手を伸ばした。……おいしい！

彼は友好的だ。緊張してこわばった気持ちを、ゆっくりと解きほぐすオーラを放っている。そのおかげで、僕はさっきまで味わっていた恐怖を、ほとんど忘れることが出来た。もう、別世界だ。

オツズは、カップを手に取り、そばにあつた窓から、外の様子を眺めた。外から差す光が彼の金髪を青白く照らしている。

「それにしても、君は珍しい子だね」

すると、彼は僕の顔を覗き込んできた。

僕は、さっきまで考えるのをやめていた、魔術師になったワケのことを思い出した。

「あ、あの……！ それよりも、僕はどうしてオツズさんが僕のことを覚えていたのか、気になるんですが……」

考えがまとまらないので、話をそらせることにしよう。

「何故って」

彼は、僕の顔をしばらく眺めると、フフッと鼻で笑った。顔を遠ざけると同時に、彼の目元には、うつすらとした隈ができているのを発見した。よく見れば、彼の肌は、異様に白い。日焼けしないでおいた白さではなく、どこか病的な白さである。むしろ、蒼白だといったほうが……。

「それは、珍しかったからさ」

途端に、僕は現実に戻された。

「へ………？」

そういうと、オッズはカップをテーブルにおき、座りなおした。

「君みたいな子は、大道芸をはじめて以来、初めて見た。フフ。

あんな風にカラスに襲われている客なんて見たことがない。君は、きつと芸人よりも目立っていただろうな」

最後の方を、彼は一言を独り言のように喋っている。

僕は、それを聞いてなんだか嫌な気分になってきた。もしかしたら、あの騒動の原因は、僕だったんじゃないのか………？

「だが、気にすることはないさ。さっきも言ったろう？ 君とそっくりの友達がいた」

オッズが僕をかばおうとしているのは分かったが、こうして言われてみると、フォローがフォローでないような気がしてくる。

僕は、口を經の字に曲げて、彼から目をそらしていた。

すると、彼がまた話し掛けてきた。

「ところで、話題を戻すけど、君は何故この世界にいるんだいと、いうか、どうやってここに来たんだ」

再び、リトルのことが脳裏に蘇った。リトルは、「魔術師として、無意識の世界をコントロールする立場にいる」といつていたが、

それがどういう意味であるのかは、よくわからない。

「あの……僕でも、よくわからないんです。理由は話されているけど、理解できなくて」

「なるほど」

僕は、彼に、このことをどうやって説明しようか、迷った。

あの日、リトルによって魔術師にされたことを、この人に話しても大丈夫なのだろうか？ また、記憶を消さなくちゃいけない、だなんてことになるのは面倒だ。第一、作者もそう言っている。

だが、よく考えてみれば、これは単なる夢の中の話だ。夢の中なら、別に話したって、平気じゃないのか……？

「あの……僕、実は魔術師なんです。魔術師にされたから、この世界にいるんだと」

すると、オツズは驚いて、目を丸くした。

「ボクも、魔術師だよ」

彼が、魔術師……？ 僕と同じ？

「だから、というのものなんだが、それもぬいぐるみ職人である理由のひとつなんだ。……あ、すまない。話がズレたな。で、君はそれがここに来た切欠だと言っただね？」

僕は、ゆっくりとうなずく。すると、彼は間をおかずにまた質問をしてきた。

「ところで、君は一体誰によって魔術師にされたんだ？ 魔術師であるのなら、参入儀礼を受けたんだらう？」

僕は、言葉に行き詰まった。誘導尋問のような、彼の質問は、答えの偽りを削ぎ落とそうとしている。しかし、それはこの場において、僕でもよく整理のつかないことを、明確にしてくれる質問の仕方だった。

「それは……」

さて、リトルのことをどう言おう？ いや、言ったとしても……

「信じてもらえないかもしれない。けど、そのままのことを言うなら、彼は三十年後の未来からきたリトル・ビーという男なんだ」

「まさか！」

ほらね！ やっぱりそうだ。 まともそうな（彼はきつとそうだと信じている）大人にこんな話をしたところで、信じてくれるわけがない。 ジェシーだって、半信半疑なんだ。

「面白いな。 未来からきた、とっていたね？ と、言うことは、タイムマシンか何かでこの時代に来たというのか？」

僕は、こくりとうなずいた。すると、彼は

「おいおい、冗談はカラスだけでよしてくれよ」

と、言って笑い転げた。

僕にとっては、笑えない。

「別にいいよ……信じてくれないんなら」

すると、オッツは話がこれ以上進まないと察したのか、さて、と
いって話題を変えた。

「さて、君は、見たところ、まだ初心者だろう？ 誰か迎えに来て
くれないのか？ ほら、その……リトル・ビーニーとか」

やはり、魔術師であるのなら、夢の世界が危険でもあるというこ
とを、知っているのか。

「彼は、今、ケガをしていて、迎えにこれないんだ」

「そうか……」

彼は、腕を組んで、背もたれにのけぞり返った。

そして、窓の外を覗く。何かを考えているのだろうか。
しばらくすると、彼はまた僕に話を切り出してきた。

「今夜は、ボクの店に泊まっていくといい。 夢が覚めるまで」

僕は彼の言った案に、耳を疑った。

何しろ、僕は人の家に泊まったことがない。

親戚の家ならともかく、知らない人の家に泊まるだなんて、昔の
僕なら、考えられないことだ。

「いいんですか……？」

僕が謙遜的な態度で聞き返すと、彼は”もちろん”といって、うなずいた。

「汚くて不便かもしれないが、一人で外にいるのは危ないだろう。また、いつ襲われるかもしれないからね」

彼はきつと、まともな大人だ。

第五十九話 - 夢の縫いぐるみ職人 -

その日の晩は、彼の仕事場に僕が泊めてもらうこととなった。

彼は、遠慮せず私の部屋を使ってくれ、と僕に指図した。彼の部屋は、雑然としていて見るからに生活感がある。なるほど、彼は夢の中では、こういうところで暮らしているのか、と僕は納得した。その日の夜と、言っても夢の中での夜だが、僕が眠れずに、ベットの上で日記を書いていると、彼が僕の使っている部屋に入ってきた。（彼からしてみれば、自分の部屋に入っているのだが）

「邪魔だったかい？」

僕は軽く首を振った。すると、彼は安心した様子で僕のところへくる。彼の部屋には、座る場所がベットの上意外に、無かった。彼は、僕の隣に座った。存外に彼は僕の近くに寄ってきたので、何故だか胸が緊張する。初対面ではないか。

その緊張を振りほどくために、何かおしゃべりでもしようと思った。でも、何をしゃべればいいんだろう……。気になることなら、たくさんある。でも、どれから話したらいいの……。そうだ。

「あの、目元に出来ているのは、隈ですか？」

あたりまえだ。なんだ、僕は焦っているじゃないか。そうじゃなければ、化粧か何かか？

「よく気付いたね」

そう言うと、彼は目元を指先でなぞる。

「具合が悪いの？」

「いや、貧血さ。もう、慣れたけどね」

彼は一人でほほえんだ。

「年中？ それは、何故……」

「あまり気にしないでくれ。それよりも、君はこの世界　　つ
まり、夢の中でぬいぐるみと遊んだことがあるか？」

さっきの態度とは一変して、オッズは明るく僕に話題をふった。
夢の世界でぬいぐるみと遊ぶ？ 考えたことが無い。小さい子
なら、ありえそうだが……

「無いよ。ラジコンで遊んだことなら、あるけど」

「それだよ。ボクたちが作っているのは」

すると彼は、目を輝かせて、僕の肩を抱いた。　慣れないスキン
シップに若干戸惑う。

「ラジコンを作っているの？」

すると、彼は僕の冗談を聞いて「いや」と言った。

「ボクの実業は、ラジコンではないけどね。　ぬいぐるみを作っ
ているんだ。　命のこもった奴をさ」

はたまた、命のこもったぬいぐるみとはなんのことだ？ ” 命の

こもったぬいぐるみ”なんて、言い換えたら、”生きた人形”だ。そう言ってみると、なんだかホラーチックに見える。この男は映画、チャイルドプレイにでてくるような怖い人形をたくさん作っているのだろうか……。

「その、ぬいぐるみで遊んだことがあるかって聞いているの？」

「そう。命のこもったぬいぐるみ……すなわち、生きたお友達だな。ボクはね、夢の世界にいる子供達におもちゃを作った上げているんだ。現実には作ったぬいぐるみを買ってくれた人のところへ、夢の世界で作ったぬいぐるみも届ける。そうすれば、怖い夢を見た時だって、仲間がいるから安心だろ？」

なかなか興味深い話である。そうか。僕は小さい頃、ベッドの下にモンスターがいるという話を本気で信じていた頃があった。そんなときに、万が一夢の中にそのモンスターが現れたとしてもいつも一緒に寝ていたくまさんが僕を守ってくれるんだ。そのぬいぐるみが、彼の作ったものであれば。

彼の子供心を大切に作る気持ち、なんとなく伝わってきた。

「良い見本があるから、少し待っていてくれ」

彼はそういうと、やっとベットから離れて、部屋を出て行った。

彼は、トランクを抱えて、僕のいる部屋に戻ってきた。

あるトランクにはどこかしら見覚えがある。何だろう。あの、黒くて大きなトランク……そうか！ あのと、そう、ウーネ・オズ・クラブスの大道芸を見たときに見た、彼のトランクだ。だ

とすると、あのトランクの中には……

「も、もしかして」

僕がそう言いかけると、彼はすばやく唇に人差し指を当て、「あともう少しだから、黙っていて」というように、僕に合図した。

彼は、トランクのカギを徐にはずす。そして、中から赤い塊を引っ張り出した。

その赤い塊は、そう

「カウルだ！」

「そう、ボクの相棒、カウルだ。彼は特別なんだけど、でもちゃんとした生きた人形ではあるんだよ」

オッツは恥ずかしげにそう言った。僕は、彼の言葉そっちのけで、あの珍しい生きた人形、カウルに見入ってしまった。

「それに、彼は喋ることが出来るんだ。しかも、それだけじゃない。普通にご飯を食べたり、眠ったりすることもできる。だから、生きた人形なんだよ。生身の人間の変わりであるといっても過言じゃない」

そう言って、彼はカウルを抱いたまま、僕のベッドの上に座った。そして、カウルを膝の上にちゃんと乗せる。するとどうだろう。カウルは、三歳か四歳くらいの子供のように、活き活きと動き始めたのだ。

「おい、貴様！」

カウルは、僕の顔を見るや否や、甲高い声でわめき始めた。

「あんときのカラスに襲われたガキだろ！」

初対面でいきなりそれとは……、彼は一体、何様のつもりだ？

僕は苦笑しながら答えた。

「そうだよ。襲われていたのは僕さ」

「弱虫！」

あくまで食い下がる彼の態度に、僕は頭の中でぶちっとなちぎれる何かを感じた。

「うるさいなあ……」

「まあまあ、落ち着けって」

すると、オツズが仲介に入って、口喧嘩はそこで幕を閉じた。

「この子は、少し口が悪いけど、音はいい子なんだ。仲良くしてやってくれ。何年も前から、ボク意外とは話をしてないから、きっと神経が過敏になっているんだろう」

そう言っつて、彼は僕をなだめた。それなら……ということでは、僕はさっきの一言を大目に見てやることにした。カウルは依然としてツンとした態度でボクをじろじろと見ている。小憎らしい奴だ！

それにしても”何年か前から”ということは、何年か前までは、他の人ともしゃべっていたのだろうか？

だとしたら、どうして、それ以来、カウルはオッズ以外の人とは、しゃべらなくなってしまったんだろう……？

この人たちには、不思議な点が多いなあ。

「でも、いくら生きている人形だったって、カウルも作られたモノなんだろう？ てことは、元が布や、綿と……」

「”魔術”さ」

そうか！ この人は、”魔術師である”ということを利用して、こんな商売（というと、さわりのよくない印象では有るが、他にどう表したの良いのかわからない）をしているんだ！

魔術師には、こんな進路選択もあるのかと、僕は感心した。

「魔術をつかって、生きたぬいぐるみを作るんだね？ すごいや！」

「その第一号が、カウルなんだ」

彼はそういうと、愛想良くウインクした。

「ボクのぬいぐるみを買ってくれた人が、素敵な夢を見られれば本望なのさ。カウルには、その願いが込めてある。……ただ、カウルの場合は、今とは少し違う方法を使っただけだね」

なるほど。じゃあ、どんな方法で生きたぬいぐるみを作ったかは知らないけど、とにかくカウルはオッズにとって、少なくとも特別な存在なんだ。だから、相棒だと言っていたのか……。

僕は今日、友達が二人も（カウルだって、きっと友達だ）増えたことを忘れもしないだろう。

第六十話 - 初恋のスケートリンク

翌日、目が覚めると、僕はいつものように、自分のベットの上
にいた。

やはり、あれは夢だったのだ。僕は、妙な気分で年明けを迎
えた。

しかし、あれが夢であれ、本当に夢の世界でオッズと会って
いたのだとしたら、またとないチャンスにめぐり合っている！ 何故
つて、魔術師に出会えたじゃないか！ しかし彼は、僕の面倒を見て
くれるだろうか……？

きつと、人はよさそうだ。僕をわざわざ店に泊めてくれたんだ
し。

リトルは、なんていうかなあ。いや、彼に許可を求める以前に、
もう少しオッズと付き合ってみよう。まずは、人物を探らなくち
や。

あの日から三日後、僕の元にジェシーからのメールが届いた。

受信メール001

1 / 3 (土) 10 : 51

送信者 : J e s s i e

添付 : x

件名 : 連絡

今度、スケートに行きましょうよ！

私、割引券を二枚持っているの。

いけそうな日があったら、連絡してね。

- - - e n d - - -

僕は、特に用事も無かったので、”いつでもいいよ”とメールを返した。

すると、このように返って来た。

受信メール001

1 / 3 (土) 10 : 57

送信者 : J e s h e

添付 : x

件名 : 連絡

わかったわ。 じゃあ、日曜日でどうかしら！

- - - e n d - - -

日曜日といえば、明日である。僕は、難なくOKをだすと、日曜日に、オックスフォード駅ということ、予定が決まった。

翌日。

オックスフォード駅で待っていると、ジェシーは定刻どおりに現れた。白いファアのマフラーを巻いて、ピンク色のコートを着ている。

電車に乗って、一駅したところに、僕たちの向かうスケートリンクがある。

僕はスケートが初めてだから、どうしようなどと弱音を吐いていたが、ジェシーは「すぐになれるから大丈夫よ」といって、僕を励ましてくれた。

「私だって、まだ二回しかスケートはやったことがないわ。きっと、大丈夫よ！」

もしも、僕が、フィギュアスケート選手みたいになら、びっくりするほどスケートが上手かったら、ジェシーに格好いいところを見せられるだろうなあ、とも思う。残念だ。

電車は、二人乗りの席が向かい合わせになっていて、真中に通路があった。

僕たちは、電車の接触部分に一番近い座席にすわった。

「ところで、レンディ？ 冬休みの宿題はやっている？」

僕は、そういわれて、急にうんざりした気分になった。だが、まだ冬休みが開けるまでは大分あるので、

「これからやるところだよ」

とって、ごまかしておいた。

「これからって、じゃあ、新聞もまとめて読むの？」

新聞……？

「また、忘れてたんでしょ！ まったく、忘れっぽいんだから……」

僕は、苦笑いした。

「私はちゃんと、読んでいるのよ。休み明けには、時事問題のテストがあるんだから。今日だって、ちゃんと持ってきているわ」

そういつと、ジェシーはバックの中から新聞を一枚取り出した。

「ていうのは嘘。本当は、妙な事件が多いから、レンディに見せたくて、持ってきたのよ」

彼女は、新聞紙を広げて、僕に見せた。

新聞の大見出し記事に書いてある内容を見て、嫌な予感がした。

「謎の変死事件多発。 新型のウィルスが原因か」

ジェシーが演技がかった口調でそう言ったのけると、次にその記事の内容を読みはじめた。

「今日未明、ウエスト・ヨークシャー州にて自宅と思われるアパートから女性（26）が変死体で発見された。 検死によると、極度の貧血によるショック死ではないかと疑われる。 これと同じ原因による変死が、十二月三十一日にエディンバラ、カーディフ、そして一月二日にロンドンで発生しており、いずれも遺体に目立った損傷などがないことから、検察は新型のウィルスによる感染症ではないかという疑いで捜査している」

一通り読み終わると、彼女は「どう思う？」と聞いて、僕に話題をふった。

「どう思っつて、ウィルスもお正月は休みなんだね」

「そうじゃなくて、貴方ならどう推理するかって、こと」

僕は、無関心なことに頭を使うのは苦手だ……。

「吸血鬼の仕業じゃない？」

すると、彼女は眉を顰めて、怒りだした。

「真面目に言つてよ。まあ、いいわ。私が見るところに、これには主犯格がいるわね。同時多発的に起こっている変死事件が偶然のものだとは思えないもの」

「ミステリー小説の読みすぎだよ」と、僕は言った。

「じゃあ、なんだっていうの？ 本当に、新型のウイルスが原因だとしたら、私たちだって、いつ死んでもおかしくないのよ」

脅しか。

「怖いことを言うなよ。それよりも、主犯格がいるってことは、少なくともそいつに指示されて動いている人間がいるってことだろ？ その記事によれば、変死の起きている場所はバラバラで、距離も大分離れている。こんなに短い期間でたくさん人を殺すような理由があったとしても、考え辛い。第一、クリスマス休暇中だぜ？ それに、死体に目立った損傷が無いってことは……やっぱり」

「吸血鬼の仕業、だとは言わせないわ」

しかし彼女は、僕の発言には関心しているようだった。

僕はついでに、

「吸血鬼は、きっとクリスマスにローストチキンを食べそびれたんだよ」

と、ブラックユーモアを付け足したが、彼女はそれを聞かずに

「それにしても、不思議よね。　　なんだか、気味が悪いわ」

と、独り言をつぶやいた。

そうこうしているうちに、僕らはスケート場へとやってきた。

エントランスで受付をしている人に割引券を二枚渡して、スケート場へ向かおうとしたとき、僕は聞き覚えのある声を聞いた。

「どうやら、僕たちの後ろから、団体客が入ってきたようである。振り向くと、そこには、同じクラスのケビン集団がいた！」

「おい、レンディじゃねえか？」

ケビン集団のうちの一人、リップがはやし立てる。

「ケツ。　　二人そろってデートかよ」

そう言ったのは、ケビンだ。

僕はついカッと来たので、ケビンのことをにらみつけた。

「おいおい、ケンカはよそうぜ？」

ケビンの後ろにいた背の高いクラスメイトがそう言ったが、ケビンにはその言葉が聞こえていないようだった。

ケビンは、僕に近寄って、こう言った。

「随分と気楽そうじゃないか。　　え、この大変なご時世に」

「どっぴいっことだよ」

すると、ケビンは声を潜めて

「お前、例の変死事件を知らないのか？」

といった。

さっき、彼女と話していたことか？

「知らないとは言わせないぜ。何しろ、毎日のように新聞に載っているからな。あれは、俺の見たところに、夢魔の仕業だ！」

「ちょっと待てよ！ なんだって、君もそんな……」

しかし僕だって、吸血鬼の仕業だとしか思えなかったじゃないか。それと比べてみれば、ケビンの意見の方が、幾分事実性があるのかもしれない。いや、まだ夢魔の存在を認めたワケじゃないけど……。

「俺は焦っている。だが、今日は仲間づきあいだね。お前、くれぐれもへまをしでかすなよ？ きっと、死ぬぜ」

彼は、おどけたように恐ろしい言葉をいうので、いつもの冗談のように、僕をビビらせる気なのかと思った。

しかし、リトルの言っていた「夢魔の親分」のことを思い出すと、なぜだか 妙に納得してしまう。

ケビンは、僕をどかして、仲間達とさっさとスケートリンクの方へ向かっていった。

あとからジェシーが「一体何かしら」というように、首を傾げた

ので、僕も「よくわからないや」と謂うように首をすくめたが、僕にはどういふ意味なのかが、わかっていた。

ケビンの忠告は、後々に重くのしかかってきたのである。

第六十一話・初恋のスケートリンク 2 -

僕は、スケートリンクの上にいる間、ずっとケビンたちのことを気にしていたので、ジェシーと一緒に優雅に滑るところじゃなかった。

なんたって、僕はスケートをするのが初めてなんだ。

奴等の前で何度もすっ転んでいたら、笑いものじゃないか！

僕だけが笑われるのなら、二百歩譲ってまだ許せるが、ジェシーにまで恥をかかせるのは忍びない。僕は、できるだけ動かないようにしていた。多くの客が僕らの横をすいすい滑っていくのに、僕ら二人はいつまでも壁にへばりついている。自嘲気味に言えば、うじうじ虫もいいところだ！すると、ジェシーが「もっと、滑りましようよ」といって、僕をスケートリンクの中央へ引っ張り出そうとしたが、僕は断固として動かなかった。

「すぐにできるようになるわよ！」

「嫌だ！あとで練習するから、ジェシーは一人で滑ってきなよ」

「何が嫌なのよ。誰だって最初は初心者なのよ？」

彼女の言葉が、僕のうじうじした心をくすぐる気がした。

「でも……」

すると、彼女は、僕をひっぱってスケートリンクの中央へと、連れ出した。

こんなところを、ケビン達に見られてしまったら、どうしよう……

…。現に、彼らは僕と同じスケートリンクで滑っている！

彼女に両手を引かれて中央まで出てきた。四方を見渡すと、皆ものすごい速さで滑っていく！中には、フィギュアスケートのようにくるくる回転したりポーズを取っている人も。

「じゃあ、私が手を引くから、レンディはバランスを取って滑ってね！」

彼女がそつと僕の両手を掴んだ。ふと頬が熱くなるのを感じる。僕は、それを隠そうとして、俯いた。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない」

僕は、彼女に手をとられて、ゆっくりと氷の上を滑り出した。どうしよう……時間が経てば経つほど、顔が熱くなる。

すると、横からものすごいスピードを出して滑ってきた子供が、僕らの間をすり抜けた。

「うわ！」

僕は、一気にバランスを崩して、ジェシーの懐へ飛び込むように倒れてしまった。

僕は、間一髪のところまでジェシーに受け止められた。

「ちょっと！ 離れてよ」

気付けば、僕は彼女を抱きかかえるようにして倒れこんでいたので、慌てて姿勢を直した。

「う、うめん……その……」

僕は、氷のくずを払いながら、辺りを見渡す。

さつき滑り込んできた子供は、もうどこかへと消えてしまっている。僕は、横に目をそらして、どう言い訳をしようか迷った。

すると、ジェシーが静かにこう言った。

「レンディって、そういうドジっぽいところがあるから好き」

そう言つと、彼女はクスクスと笑った。他のどんなに可愛い女の子の微笑みよりも、彼女の微笑みは、幸せそうだった。僕も、何故だか照れてしまって、彼女につられて笑いあった。

ケビンのことなど、忘れていた。僕らが帰ろうとした頃には、彼らは既にスケートリンクから消えていたので、安心してジェシーと一緒に帰ることが出来た。

彼女は、駅を降りて別れる間際、僕の唇に軽くキスをした。そして、「また、今度ね!」と言ってくれた。

駅を降りてから家に向かうまでの間は、まさに夢のような気分だった。彼女が「レンディって、そういうドジっぽいところがあるから好き」と言ってくれたのは、きつと僕に対する告白だったに違いない! そうだと思ってしまうほど、僕は舞い上がっていた。

その日の晩は、きつと良い夢を見られるだろうと思ひ、ワクワクしながらベットに入った。

しかし、実際に見た夢は、違った。

この日も、僕は夢の中でカラスに襲われた。最初にたどり着い

た場所は、オックスフォード駅。

先日から数えて、この駅でカラスと出遭ったのは、何回目だろう。
二度目だ。

どうして、何度もカラスと出遭うのだろうか。僕は不思議に
思う。これはカラスの陰謀ではないか。いや、それは本当か。
カラスは頭が良いっていうけど。

僕は、カラスに目を凝らした。彼らは、何をしようとしている
のだろう。

目の前にいるカラスは、僕に向かって頭を傾げ気味に、カアと鳴
いた。赤い自転車に留まって、こちらを上げ上げと見ている。
頭の奥底を、本能に近い直感でピンとひっぱられる気がした。に、
逃げなきゃ！

僕は、先日カラスに追いかけられた記憶を辿りながら、どうやっ
て逃げたら良いのかを必死で思索した。奴等は僕を先回りして
いた。もしかして、奴等は僕の行動パターンを読んでるんじゃない？
以前はそうだったじゃないか。変に動いたら、きっと危ない。

でも、どうやって逃げよう。さっき僕に鳴きかけたカラスは、
前方十メートルほど先にある自転車に留まっている。他のカラス
は……いないのか。いや、右手側のファーストフード店の屋根に
一羽。そして、左手側の電線にも一羽留まっている。僕は、カ
ラスに囲まれた。

奴等が、一様に僕を見ている。そんな気がする。

しかし、カラスの視線に拘束されてなるものか！

覚悟を決めよう。きつと、どこかに隠れていれば、助かるはず。
そうさ。この前だって、オッズさんが助けてくれたじゃないか

……。

僕は、拳をぎゅっと握り、振り返ってその場から逃げ出した。

第六十二話・カラスの愛情・

夢から目が覚めるのは、思ったよりも早かった。

背後のカラスに背中をひっぱられそうになる感触を覚えながらも、必死で走っていると、そのうち跳ね返るようにして、僕は目を覚ました。

夢から覚めたときは息が荒くて、まだ夢の中にいるんじゃないかという恐怖を覚えていたが、ホットミルクを飲んで一息つく頃に、ようやく落ち着いてきた。

僕は、カラスについてを、リトルにあれこれ相談しようと思った。駅前の広場なら安全だと言っていたのに、そこで二度もカラスに出遭っていて、しかも襲われるようでは、事の收拾がつかない。

リトルにこのことを相談すると、それについては、ウィルが専門の知識をもっているだろうから、彼に相談したほうが良いと提案したので、その通りにすることにした。（リトルも魔術師ではないのか……？）

リトルは、そっちに迎えを送るから、それに乗ってこいと僕に令した。

「執事のトモヒサ・オオガミでございます。お迎えに上がりました」

その日の朝、執事は僕の家の前直前に黒い車を止めて、僕を迎えに来てくれた。

この車に乗ってウィルの家に行くのは、これで二度目である。

執事は、僕を乗せている間、一言も喋らなかつた。前々から思っていたが、この人は、不思議なオーラを持っている。

別段、目立っているわけでもないのに、彼の存在は、すんなりと

心に溶け込んでゆくものがある。

だから、彼がいないときは、どことなく落ち着かない。 守り神のような存在だと、僕は思った。

「やあ、また来てくれたね」

僕は、玄関のところでウィルに迎えられた。

相変わらずの、おっとりとした口調で優しくそうに笑っている。(しかし、僕はこの人の本性を知っている……)

リビングには、リトルとウィル、そして僕が集まった。リトルは、相変わらず右足にギプスをはめていたが、前に見たときより少しは元気を取り戻しているようである。ウィルは僕たちが席に着くと、「さて、用件を聞こうか」と僕に問い掛けた。しばらくすると、いつもどおりに、トモヒサが熱い紅茶を用意してくれた。

「僕、どうしても不安なことがあって」

彼は、静かにうなずいた。

「あの……僕は、カラス使いですよ？ だのに、どうして、カラスは僕のことばかり襲うんでしょうか」

すると、彼は目に薄ら笑いを浮かべて

「心の中が知れてしまっているからさ」

と、答えた。

「へ？」

どういうことだ？

「カラスだけに限らずとも、動物は人の心を感じることがある。それはわかるね」

僕は、ふむふむと相槌を打った。

「つまり、君の心は、カラスたちに知れてしまっている。私のところへきた動物使いの多くは、皆同じような経験をしていたよ。逆にいえば、カラスは君の心に注目しているんだ。他の動物でもそうだが、カラス使いであるためには、まずカラスと仲良くなる必要がある。君がカラスの心に目を向けないだけで、カラスは大いに君の心をわかってきているよ」

まさか。 あんなふうに襲ってくるだけのカラスが、僕の心を分かっているだと？

「ビクビクしていれば、それがカラスたちにもわかる。賢くて遊び好きの連中は、そんな君にちよっかいを出しているのかもしれないね」

「ま、愛情だと思え」

リトルが、突然首突っ込んできた。

「愛情?! 嘘だ。 あんなのが、愛情だなんて、世の中皮肉だ!」

ウィルはククと笑った。

「そんなことはない。君がカラスのことを分かって上げようとする

れば、お互いに理解し合えるよ。ただ、それだけのことだ」

だが、僕はカラスたちの心を分かってやるばかりか、近づくとさえままならない。カラスたちの行動が愛情表現なんだと思っても、僕にはどうしても納得がいかなかった。

それにしても、カラス使いであるからには、と彼は行ったが、僕はカラス使いの名を授かる前から同じようにカラスに襲われていたのは、どうしてだろう。もしかして、これはカラス使いには関係の無いことなのではないだろうか？

やはり不安はぬぐいきれない。

「カラスと仲良くするためには、どうしたらいいの……」

僕が独り言のようにそうつぶやくと、今度はリトルがふむと話題に入ってきた。

「カラスと仲良くする、か。私も苦労したな」

「リトルも？」

「まあな。お前と同じように、カラスはよく私のことを襲ってきたが、慣れていくうちにそうでもなくなった。だが、カラスは今でも嫌いだな」

リトルにも同じような境遇があったなんて。僕は、心底驚いた。

「へえ……」

僕が感心していると、「まあ」とウイルが入ってきた。

「まあ、君がクローズという魔法名を持っている限りは、ずっと同じようなことが続く」

そんな……。

「どうやったら、魔法名を変えられるの」

「魔術師として、昇格すればいいのさ。それが、魔術師をやめるかだね。後者はやってくれても構わないが、君のももとの名前もクローズだから、対して変わりはないだろう。君のその名前は、まるで魔法名のようにだ」

そう言うと、ウイルはひとりで笑った。

まるで、魔法名……。まさか。魔法名を本当の名前に使う奴があるか。

ウイルは続けた。

「まず、魔術師として昇格するためには、名前の目的……つまり、君の場合は”カラス使い”を真つ当することが必要だ。そうしなければ、次のステップに進めない」

僕は、うんざりした。

どのみち、カラスと仲良くなるしかないということか。

「我慢するしかないようだな」

そう言うとリトルは、僕をからかうように、クスクスと笑った。

しばらくして一息ついた頃、リトルはまたこう言った。

「そういえば」

一瞬、彼はウィルと目を見合わせた。ウィルも訳知り顔で、うなずいている。するとリトルは、次に僕の顔を見ながらこう言った。

「夢の世界で何かがあったときのために、私の居場所を覚えておいたほうが良かるう」

「メールは使えないの？」

「それは……」

すると、ウィルが口をはさんだ。

「次元が違うんだ。夢の世界で電波は通じないだろう？」

なるほど。しかし、よく考えると、わからない。

「つまり、直接連絡が取れるように私の居場所を知っておいたほうが良いということだ」

そう言うと、リトルはソファアの脇から分厚い地図帳を引っ張り出して、テーブルの上に広げて見せた。

「これが、夢の世界の地図帳だ。夢の世界は、現実と違ってすこしつくりが違う。同じイギリスの地図でも……ほら、このとおりだ。ウィルの療養所は、ここ。私がいるのは、ここだから」

そう言って、リトルは、地図上のウィルの療養所のところを指差した。それにしても、夢の世界のイギリスは少し歪んでいるように見える。やたらと横に間延びしていて、ねじったような形だ。島の数も少し多いような気がする。

「わかったよ。じゃあ、その地図を写させて」

僕は、リトルに見せてもらった、夢の世界の地図の写しを、家に持って帰ることにした。

しかし、肝心の夢の世界で、この地図を使うことはできるのだろうか……。

枕元にも置いておけば、夢の世界に出て来てくれるのかな。

僕は、地図の写しに願いを込めて、床に着いた。

第六十三話 - 協力 -

僕は、夢の世界で、再びオツズの店を尋ねた。人物に探りをいれよう。探りといっても、彼がどんな性格で、どういうことが好きなのかとか、要するによくある人物研究をするつもりだ。

そんなワケで、僕はオツズの店を訪れた。カラスは何匹か見かけたが、不思議なことにカラスは襲ってこなかった。オツズの店に着くと、彼は、にこやかに僕を迎えてくれた。

「また来てくれるとは思わなかったよ」

何処かしら、疲れているように見えたが、この人の笑顔は、ウィルとは大違いの素敵なものだった。本当に優しそうな笑顔をしている。僕は、そんなオツズが、好きだ。時々、ミステリアスな面があるけど、そこは気にしちゃいけない。

彼は、僕を店の中へ通すと、前に来たときと同じように、紅茶とお菓子でもてなしてくれた。

「随分と冒険心のある子だね」

オツズは、そう言って話題を切り出した。

僕は、冒険心があると彼から誉められたので、つい嬉しくなった。

「しかし、危険だよ。カラスには追われなかったのかい？」

「今日は大丈夫。襲われなかった」

「なら、良いんだけど……」

オッズにはどうしても気がかりなことがあるようだ。

「どうして？」

「ボクのところに来てくれた事は嬉しい。しかし、君のお師匠さんが、心配していると思ってるね。確かリトルだったかな」

僕は、ああとため息をつきながら彼のことを思い出した。

「彼は今、怪我をしていて上手く歩けないんだ。だから、ウィルという人のところで治療を受けているよ」

「そうか。大変なようだ。そうになると、君は魔術師としての修行をする上で、保護してくれる人をどうするつもりなんだい？」

痛いところを突かれた。

「それは……」

言葉を濁していると、やがて二人の間に沈黙が訪れた。僕は、彼に何かを聞こうとしている。僕には保護者がいない。そう、どうすれば良いのかということだ。もっと具体的に言えば、カラスと付き合うためには、何をすれば良いのか……。

「なんだ、じゃあ君は代わりに保護者が必要なんじゃないか。言っておくが、ボクはろくでもない大人だぞ？」

「きつと、そんなことないよ！」

オッズは苦笑した。

「ところで、君も魔術師だろう？ 魔法名があるはずだ。魔法名を教えて欲しいね」

突然、話題を変えられたので、僕は一瞬返答に困った。

「く、クローズです。カラス使いという意味で……」

すると、彼は目を丸くして、「こりゃあ、おったまげた」と言わんばかりに僕を見つめた。

「おかしいな。君、確か名前は」

「レンディ・クローズです」

やはり、ウィルの時と同じように突っ込まれた。

彼は大層驚いたらしく「へえ」と感歎して、笑気に満たされたかの如く笑う。

「へえ、変わった事があるものだ。……それで、カラス使いになるって？」

「それが……」

僕は、言い訳に詰まって、俯いた。

「フフ、わかるよ。それが、問題なんだろう」

この人は、僕の言おうとしていることを察する。こんなに僕の気持ちを良く分かってくれる人がいたなんて、嬉しい。だけど……

…。

「どつしよつ」

僕には疑問が残っている。そう言うと、彼は、椅子にもたれかかって、頭の後ろで手を組んで、手枕を作った。

「カラスかあ……。魔法名はな。そう簡単に変えられるもんじゃない。吸血鬼カーミラのお話を君は知っているかい？」

本のことなら、まかせて！

「うん、知っているよ。カーミラという女吸血鬼が出てくるお話でしょ。初めて読んだときはドキドキしちゃった」

すると彼は、問題はそこじゃない、と行って、苦笑いした。

「カーミラは元の身分に縛られていたね。だから、名前をアナグラムで変えては、色々なところに出現したんだ」

彼は、姿勢をもとにもどした。

「だから、魔法名でも同じ事なんだよ。アナグラムをしても中身は変えられない。魔術師として昇格しないかぎりはどうしようも無いってワケだ」

僕は、しょんぼりと紅茶をかき混ぜた。

「じゃあ……。魔術師として昇格するためにはどうすればいいの？ やっぱり、カラス使いにならなきゃいけない……。」

「その、カラス使いになることが、魔術師として昇格するためには必要なだね。カラス使いになるためには……」

僕は、カラス使いに頼着するオツズに嫌気が差して、机に頬杖をついた。

「僕、一生魔術として昇格できなくても構わないよ。カラスと仲良くなるだなんて、嫌だもん」

すると彼は、僕の言葉を聞くなり、さっと真剣な表情をした。

「そりゃ、嫌な事のひとつやふたつはあるさ。魔術師とて職業だ。好きでやっているやつもいるだろうが、今は少し深刻な問題があるってね」

彼はそこまで言うと、話題を変えた。

「とにかく、このままじゃあ、きっと危険だ。魔術師であるのに、技の一つも身に付けられないでいるようでは、身が持たないよ。君も魔術師なら知っているだろうけど、今は夢の世界に少々危険な輩がはびこっていてね……」

夢魔のことか。

「知ってる。それって」

彼は、うむと頷いた。

「だがボクはね、夢魔が悪いと一点張りで攻めるつもりはないんだ。

彼らだって、何が事情があつて、こんな事態を引き起こしている。事件にはかならず真相というものがあるのさ。それを突き止めない限りは、前へも後ろへも進めないだろう」

夢魔の起こしている事件がどんなものなのか、気になった。

「夢魔が事件を起こしているというけど、それは一体どんな事件なの？」

すると、彼は目を細める。

「人間のエーテルを奪うのさ」

リトルやケビンの言っていたことと、一致しているようだ。

「だが、その原因がわからない。普通は人が死ぬほどエーテルを奪ったりはしないだろう。何か特別な事情があつて、たくさんエーテルを必要としているのか、それとも反乱か、狂気……」

そういうオツズの顔は、いつものやさしい顔とは違って、少し怖く見えた。横を向いて爪を噛んでいる。

しばらくすると、彼はまた話し掛けてきた。

「どうしてもカラス使いになりたくなければ、魔術師を辞めるんだ。そうすれば下の通りの暮らしができる。ボくら魔術師のことなんて、気にしなくて良い」

しかし、僕は、何故だか諦めがつかなかった。このまま、何もせずに、ただ日常に潜む死の恐怖におびえながら過ごしていて、それで良いのだろうか？ 魔術師になつてしまったからには、真相を

確かめたいという、好奇心が湧き上がる。それに、僕が何もしなかつたせいで、ジェシーに危険が及んだら、それこそ大失態だ。この前だって、ジェシーが死にそうになっていたところを助けたじゃないか。あれは僕が直接戦いに挑んで助けたワケじゃないけど、僕の作ったマフラーが役に立った。だから、きつと何かできることがあるんじゃないか……。

「いや」

僕は、オツズを正視した。

「僕は、魔術師をやめたりしないよ」

カラス使いになるという試練が目の前に横たわっているけど、ジエシーや他の仲間、家族のためを思うと、引き下がれない。今の僕はとても弱いけど、いつかは強くなって、皆を妖魔から守らなきゃ。

「だから……」

しばらく彼のことを見つめていると、彼はこう言った。

「一緒に、君のお師匠さんのいるところへ言つて、相談しよう。少しでも君の役に立てるなら、ボクも協力したい。仮の保護者になれるかも知れないと言い出したのはボクだからね。最低限、自分の言ったことは、守らなくちゃ」

「それが、大人としての義務だ」と彼は付け加えた。

彼の徹な態度に、僕は感動した。オツズの年齢はリトルたちよりかずつと下なんだろうが、彼の方が、よっぽど大人らしい。

いつもからねじけて嘲弄じゆうじゆうしたような態度でいるリトルたちとは大違
いだ！

「いつかは、君も立派な魔術師になれるよ。ところで、リトルは
ウィルの所にいると言っていたね。そのウィルという人は何処に
いるんだい？」

僕は、ここで初めて夢の世界の地図のことを思い出した。

「ああ、それは……」

ちゃんと夢の世界に夢の世界の地図が現れたのだろうか。僕は、
服の裏やポケットをさぐった。

すると、ズボンの後ろポケットのところに、地図の写しが挟み込
まれていることを発見した。

よかった！ 僕も捨てたもんじゃない。ちゃんと夢の世界に地
図が現れてくれたじゃないか！ 夢枕にあるものはちゃんと夢に現
れるんだ！ きつとこれは才能に違いない。

僕が、地図をオッズに見せようとしていると、そこへカウルが入
ってきた。

「よ！ また来やがったな、へなちよこめ！」

彼は、ゲップをすると、相変わらずの罵詈雑言で僕をコケにして
きた。さっきまでカウルが食べていたと思われる、食べ物匂い
がプンプンする。僕は今までのムードを台無しにされた気分だっ
たが、オッズは寛大に

「食事が終わったのかい。ほら、ちゃんと挨拶をしなくちゃダメ

だろう。難ならこれから出かけるところなんだが、一緒についてくるか？」

とカウルに問い掛けてなだめようとした。しかし僕は、内心では彼が何か厄介事を引き起こしてしまうのではないかと、ハラハラしている。彼とリトルが出会ったら、どうなるだろう……。

「行ってくて、何処へさ？」

オッズは、今から僕の保護者であるリトルのところへ向かうところだとカウルに伝えると、カウルは

「へえー。興味がある」

と行って、僕らに着いてくることになった。

僕らは、夢の世界の地図を見ながら、ウィルの療養院へと向かっていった。

第六十四話 - 疑心 -

僕たちは、夢の世界の地図を頼りに、ウイルの療養所へと向かった。

ウイルの療養所は、ウイルの本家があるところから、一キロばかり離れた、小高い丘の上に、建設されている。白い壁に黒く雨のしみがつき、古ぼけた様相は、まるでお化け屋敷のようだ。

僕らを待っていたのは、他でもないウイルとリトルで、それ以外には、ウイルと縁故のある女性が奥に控えているという。（これについては、少し後にウイルに説明された）僕たちは、茨の生垣で囲まれた門を通り抜けると、ウイルに迎えられ、そのあと待合室へと通された。

「リトルと話しがしたいんだ」

僕は待合室に通されるなり、出し抜けに彼に問い掛けた。
すると、ウイルはすんなりと承って

「リトルなら奥の部屋にいるが。 と、お客様かい？」

僕の後ろに控えていたオッツとカウルを見渡した。

僕は”友達だよ”といって、軽く彼らを紹介する。

「こっちはオレグ・ロマノビッチ・スクリポフといって、大道芸人なんだ。それで、こっちの赤鬼は彼の相棒にしているカウルというぬいぐるみ」

オッツは、僕がそう紹介するとウイルに軽く一礼した。カウル

も、オッツズに勧告されて、お辞儀をした。カウルがお辞儀をしたのを見て、ウィルは「これはこれは」とおののいた。

「お会いできて光栄です。貴方は……」

オッツズがそう話し掛けたとき、ウィルはニヤリと得意の微笑をたたえたと、”私は”と自己紹介をした。

「名乗るほどのものでも無いが、ここの療養所を経営している、ウィル・ウィツシュだ。あわせて、その不思議なお友達も、どうぞ、お見知り置きを」

ウィルがオッツズやカウルと握手を交わすと、ウィルは今にリトルを呼んでくるから、その席にでも座って待っていてくれ、と僕らに合図した。

「何の用だ」

リトルは寝起きたばかりらしく、不機嫌な様子でソファにもたれかかっていた。

「まずは、僕の友達を紹介するよ」

僕はそう言っつて、ウィルにしたときと同じように、オッツズ達をリトルに紹介する。

「へえ、大道芸人ねえ。ところで、そいつは一体何者なんだ？」

リトルは、いぶかしげにカウルを見つめた。

「ボクの相棒ですよ」

すかさずオツズが説明を加えたが、リトルは「それはわかっている」と緘口する。

「生きた人形など見たことが無い。 気味が悪いわ」

「リトル……」

僕は、目で彼を諫めようとした。すると、リトルはこちらを一瞥して、”フン”と鼻を鳴らす。

「モノに命を宿らせるなど、禁忌におぼしい」

「確かに」

ウィルが、リトルの意見に平然と同意を示したので、僕はなんだか怖くなった。

「禁忌って？ 彼は別にそんな……」

「まあ、難しい話しは後だ。それで、用件があるそうじゃないか。言っただらん」

僕は、ウィルに促されて、カラス使いになることについてをリトルに話した。

「前向きにカラス使いになろうとすれば、クローズという名前も嫌

「じゃなくなるハズだぞ？」

「確かに、そうだけど……」

リトルに言われた正論に、僕は心底腰を折られた。僕は、一言一言、押し出すようにして持論を語った。

「やっぱり、僕はどうしても、今の状況を受け入れ難いよ。カラス使いにならなければ、クローズという魔法名を変えられないだなんて。でもさ、確かになるうとは思うよ。ジェシーや家族のこともあるし」

「それなら、相談するまでも無いじゃないか。なれよ」

しかし、と僕は反論した。

「どうやってなるのさ。地道に努力するんじゃないか、きっと手遅れだよ。だって、危険な夢魔が夢の世界にはびこっているんだらう？」

なんとも、オッズの言っていたことは、このとき大いに役立つてくれた。彼の言っていることはもっともであるのが、改めてわかる。

「少々危険ではあるが……」

そこへウィルが口を挟む。同時に、僕らは彼に注目した。そして、ウィルは一旦そこで区切って、一通り僕らを見渡してから、再び口を開いた。

「儀式を使う、という手もある。通過儀礼を応用するのだ。あの目的を達成するために、一つの擬似的な過程を作る。つまり、君が受けた参入儀礼と同じように、カラス使いになるための参入儀礼を作るんだ」

「画期的だ」

オッツがそこで口を挟んできた。

「だがね。一つ言っておくことがある。いかなる危険に出遭っても、自己責任だ。私はただの私見としてこれを提供したが、やるかどうかは君にかかっているからね」

そう言つて、ウィルは僕を見据えた。

「……わかったよ」

「少々、危険すぎやしないか？」

リトルが、心配そうに僕を見ている。僕は、ウィルに質問をした。

「それは、一人でやらなければならないの？」

「一人でなくとも構わないさ。君が最終的な目的を達成することができるのなら。だが、危険は二倍だよ」

すると、オッツが立ち上がった。

「なら、私が着いて行こう」

僕は、片眉を吊り上げて、オッズの方を見た。彼は、ニヤリと僕に笑いかけている。

「気に食わんな」

リトルの一言が僕らの雰囲気をぶち壊した。

「どうして?」

「どうしてって、君。そこにいる子鬼が一体なんなのか、分からないのか」

僕の質問に答えたのは、ウィルであった。僕は、カウルを見やっただ。カウルはキョトンとこちらを眺めている。

「カウルは、縫いぐるみだよ? それも……」

すると、ウィルは僕が言い終わらないうちにこう言った。

「それも、ただの縫いぐるみじゃないさ。そいつは、夢魔だからね」

第六十五話 - 決断 -

「嘘だ」

僕は、ウイルの口にしたことが信じられなかった。

「どこにそんな証拠があるのさ」

「……………」

ウイルは黙ったままである。

「証拠が無いのなら、前言撤回していただくのか」

オッズが、ウイルをきつと睨んだ。カウルは何がなんだかワケのわからぬ様子で、きよときよとしている。どうして？ 何故、カウルが夢魔なのだろう……？

結局、カウルの正体は何なのかについては、はっきりと結論が出ないまま、流された。ウイルの言っていたことは、ただのたわごとである、僕は心の底から願った。理解するのが難しい人種だと思っ分、彼の考えていることがわからなくて、怖い。

「結局、カラス使いになる件については、どうなったの？」

僕はリトルたちに質問した。

「つまり、君次第さ。君が儀式を受けようとするのか、否かにか

かっている」

「じゃあ……」

僕はしばらく、そこで間を置いて、考えを整理した。まず、僕はその儀式を受けたいと思っている。そして、今さつきオツズを連れて儀式を受けるのだと言ったら、リトルに反対された。ウィルは、それになにやらわけのわからぬ理屈をつけて、僕を説き伏せようとしている。リトルは、その事（つまり、カウルが夢魔だという事）を承知しているのだろう。でも、何故彼らはカウルが夢魔なのだということが分かったのか。ひいては、何故そうだと判断したのだろう。

「僕、その儀式を受けてみるよ。それで手っ取り早く事を進められるのなら、そっちの方が良いと思うし。けど、何故オツズがついていくことには反対なのさ？」

「ウィルのさつき言っていたことが、わからないのか。そいつは夢魔を従えているんだぞ。そんな危険な奴と一緒にいようだなんて、気がふれたか、それとも吹き込まれたのか！」

リトルが息巻いて、僕を忠告した。僕は、彼がオツズに浴びせた罵倒を許せなかった。はらわたの煮え繰り返る思いで、リトルを充分に睨みつけた後、僕は冷たくこう言った。

「わかっているよ。でも、僕には、カウルが何故、夢魔なのかがわからない。と、というか、どうしてそんなことがいえるんだ！ 証拠でもあるの」

すると、リトルは、あきれたといわんばかりに、目をぐるりと回

した。ウイルは横で、ため息をついて、言葉を探しているように見える。

「確か、オレグといったね」

ふいにウイルがオッツに尋ねた。ウイルは、リトルとは正反対の冷静さを保っている。

「はい」

「……ひよつとしたら、君の名誉に関わることもかもしれないから、一つ断っておく。カウルについての説明は、貴方がするかね？」

オッツはしばらく黙り込んでいた。そして、ウイルの目を見ながら、彼は語りだした。

「貴方が、偏見に目を侵された人間でないと、私は信じています。ですが、この場で語るには、危険です。ローザ、いやカウルのためにも、ここは私も貴方も、カウルの正体については言及しないということはどうでしょう」

こんなに真剣な様相で話しをしているオッツの見るのは、初めてだ。すると、リトルはオッツの話しを聞くなり、さも不服だと言わんばかりにため息をついた。

「わかりました」

そして、ウイルは「それなら」と付け加えた。

「それなら、さまざまな事を想定して、カウルを連れて行くのは、

止しておいた方が良く。それで良いかね、リトル」

リトルは、ぎよろりとした目つきでウィルのことを見た。

「ああ、いいだろう。レンディ達が儀式をしている間は、カウルを閉じ込めておく」

「ちょっと待て、どういうことだ！」

そこではじめて、カウルが弁論した。

「おいらが閉じ込められていなきゃいけないって？ そんなの不公平だ」

「コラ、目上の人に向かってそんな口を訊くんじゃないよ」

オッズはすかさず、カウルの口を押さえ込んだ。カウルがふがふがと抵抗している間に、ウィルがさつさと話しをまとめ上げた。

「フフ、仕方の無い子だ。カウルについては、君たちが儀式に言っている間は、私が面倒を見ておくから、心配しなくて良い。レンディ君、君の下した決断に間違いは無いね？」

その質問に対して、僕は

「はい」

と、はっきりと答えた。

第六十六話・電話ボックスの中へ・

僕がそう言った途端に、リトルはついに激怒した。

「フン！ そんなことを言っているのなら、二人で行って一生戻ってくるな！」

この言葉には、流石のオッズも堪えられなかったらしく

「貴方のような人がこの子の保護者だなんて、さぞ哀れだ」

と、つぶやいた。

その後、僕たちは一旦帰される事になった。ウイルは、儀式準備には少し時間がかかるから、二、三日後に本家に来てくれと僕に言った。ウイルの家から帰る途中、僕はあの、リトルの失礼極まりない態度についてを、オッズと話し合った。

「まったくだよ！ どうしてあんな風に物を言うんだろう。失礼にも程があるよ」

オッズは僕の言葉を聞いても、曖昧な返事しか返さなかった。彼の苦笑いが、何故だか可哀相に見える。

「仕方ないさ。ああいう人間も居るんだ。君のお師匠さんをとやかく言う資格は、ボクには無い。一つ言える事は、ボクの過ちだったということだ」

ああ、なんて彼はお人よしなんだ。 神様に救われるべき子羊は、彼であって欲しい。

「とにかく、事が決まったんだから、それで良い。 なんだか、迷惑をかけてしまったみたいで、すまないね。 一緒に頑張ろう」

そう言うと、オツズは握手を促すように、手を差し伸べてきた。僕は、オツズと硬く手を取りあって、握手を交わした。

三日後、僕たちは午前中にウィルの本家を訪ねた。 ウィルは大層手間がかかったといつて、僕たちに苦労を自慢していた。 どうやら、ウィルはこの三日間、まったく眠っていなかったらしい。しかし、ウィルは疲れを見せることも無く、いつも通りに僕たちを客間へと迎えてくれた。

「心の準備はしてあるかい？」

「え、ええ……もちろん」

しかし、僕は不意を突かれた、と思った。 一体、この先にどんな危険が待ち構えているのかも、想像できない。 むしろ、あえて想像することを避けてきたといったほうが正しい。 決断してしまった後で、あれやこれやと右顧左眄して、やっぱり嫌だ！ と思いたくなかったからだ。

このことの裏には、僕がやけくそになっているのも影響しているのかもしれない。

「いざというときは、ボクがいるから安心さ」

オッズはそう言って、胸を張った。僕はそれを聞いて、少しだけ緊張をほぐせた。

「ところで、リトルは……」

この質問は、僕がした。

「ああ、奴ならそろそろ来る頃だろう」

そんな話しをしていると、噂をしたからなのか、リトルが客間に入ってきた。

「おはよう、リトル」

リトルは不機嫌な面持ちで「ああ」と唸った。

「今日は、レンディが成長する日なんだ。祝おうじゃないか」

ウィルがそう言うと、シャンペンを持ってきて、皆に注いでくれた。（僕には、アルコールの入っていないものをくれた）

「こういう日はね、祝われるべき日なんだ。少しひねくれているが。レンディ君、健闘を祈るよ」

僕たちは、その言葉を合図に、乾杯した。少しひねくれている、というのは、この儀式には少し反対意見があるからなのだろう。僕は、祝われて嬉しいような、恐ろしいような、不可解な気分になった。

乾杯の席を離れると、僕たちは儀式の場へと通された。カウルは、儀式の場へと向かう前に、トモヒサにあずけて、彼と一緒に別の部屋にいさせることにした。儀式を受ける場所は、客間から少し離れた中庭らしい。中庭には、黒々と咲き乱れたバラの花が生垣として四面に植えられて、陰鬱な印象である。中央にはライオンの像の口から水の吹き出ている噴水が設置されており（まるでマラーンオンのようだ）、天井は植物園のように、ドーム型でガラス張りになっている。そこから太陽の光がキラキラと降り注ぎ、マラーンオンのあるところだけが、妙に明るく、神々しく思えた。

噴水の脇には、電話ボックスのような、はたまた工事現場のトイレのような小さな小屋が建てられていた。

「ここだ」

小屋は、こげ茶色の木で作られている。

ウィルは、その小屋のところまで行くと、僕たちにそれを紹介した。

「まさか。儀式をする場所って……」

「そのまさかだよ。今から君たちはこの中へ入って、儀式を受けてもらう」

前にもそうだったが、この人は、僕たちにとってはおかしな事をもさも平然と言う。僕は、おかしくて、嘔出した。

「狭すぎだよ！ どうやってそんなところで儀式をするのさ。暑くて一時間もしないうちに出てきちゃっよ」

「確かに最初は暑いかもしれないな。だが、そのうち何をすれば良いのかがわかってくるさ」

ウィルはそう言うと、強引にも、僕とオツズをその電話ボックスの中へ押し込んだ。反抗する間もなかった。僕たちは電話ボックスの闇の中へと落とされたのだ。

第六十七話・洞窟を抜けて

僕たちは、落とされた。暗い、闇の中に……。そう、電話ボックスの中には深い穴が掘られていたのだ。闇はまるで奈落の底まで続いているようで、地上の明かりとは無縁に思える。

僕らは何処までも落ちてゆく。無重力を感じるほどに。それにしても、底はまだ見えてこない……。冷たい。水が降っている。ある場所から、おびただしい量の水が、滝のように落ちていくのか。僕らはそれに乗った。同時に轟音が聞こえる。鼓膜がちぎれそうだ。こんな、奥深い地下に、滝が流れているなんて……。

約一分後、僕たちは、水の中に落ちた。後から叩きつける瀑布に押され、しばらくの間もがいて、やっとのことで水面に顔を出すことが出来た。

僕は、こう思った。あの電話ボックスはこの穴を隠すためのカムフラージュだったに違いない。

何も、こんな風に手荒なことをしなくても、丁寧にはしごでも使って降りていけばいいじゃないか、何か、特別な事情でもあるのだろうか？

「レンディ？ どこだ」

オッズが叫んでいる。暗くて、よく見えない。暗闇に目が慣れていないのだ。しかし、声の大きさからして、そう遠くにはいない。僕は、滝の音に声をかき消されないようにして、大声で叫んだ。

「ここだよ！ オッツはどこにいるの」

「レンディ！ そこを動くなよ」

オッツは僕の声聞きつけるなり、そう言った。僕たちは、声を頼りに互いを捜し求めた。

僕は、オッツに動くなと合図されたので、同じところで留まる。そうしていると、不意に肩をつかまれた。

「ここか！ よし、見つけたぞ。早く陸に上がろう」

僕は、オッツに抱えられるようにして、陸まで泳ぐことになった。背後で滝が流れているからなのか、霧のような水しぶきが一面に舞っていて、息をするたびに水を吸い込んでいる気がした。生臭い水の匂いがする。

しばらく泳いで、陸を見つけると、僕らはすぐさま、そこへあがった。

「これが、夢の世界じゃなかったら、ボクたちは間違いない気が絶していただろうね。運が悪ければ、死んでいたかも！」

オッツはぜいぜい息を荒げながらそう言った。

「うん、確かに……。それにしても、ここは何処なんだろう」

落ち着いて、辺りを良く見回してみると、だんだん目がなれてきたのか、薄暗くても光があることがわかった。しかし、あの光り輝いているものは、地上からの光ではないだろう。だと、するとこれは……。

「洞窟の中のような。 あれはヒカリゴケかな。 妙に寒い」

オッズが、僕と同じように辺りを見回しながら、そう言った。ヒカリゴケなら、凶鑑で見たことがある。 綺麗な緑色の、光るコケだ。 しかし、本物を見たのは初めてだ。

「綺麗だね……ハックション！」

僕がくしゃみをしたのを見て、オッズは笑いながらこう言った。

「服を脱いだほうがいい。 体温を奪われるよ」

夢の癖に、妙なところだけリアルだな、と思った。

僕たちは、できるだけ服を脱ぐことになった。 オッズは「誰も見ちゃ居ないんだから、全部脱いじまえよ」といったが、僕はどうしても恥ずかしかったので、全部の服を脱ぐことは出来なかった。
(男らしくない！)

「さて、どこへ行けば良いのかな」

僕が言った。

「とりあえず、風の吹いてくる方向へ進んでいこう。 そうすれば、きっと地上に出られる」

目の前には、やや右側に、ぽつかりと大きく口の開いた穴があった。 どうやら、そこから風が吹き付けてくるようである。 口は、オオウと唸っていた。

しばらくの間、僕たちはオッズの指示で洞窟を進んでゆくことに

なった。途中でヒカリゴケを集めながら（と、いつでも体中にいつのまにかくつついていたが）、その光をたいまつ代わりに道を進んだ。

意外にも洞窟は一本道だったので、僕たちは迷うことなく、道を進むことが出来た。

感覚的に、十五分ほど進んだところで、漸く外の光が見えてきた。

「もう少しのようなだ。よかったね、レンディ」

「うん」

気付けば、さっきから少しずつ気温が上がってきているようである。これは、地上に近づいてきているしるしなんだろうか。

進めば進むほど、辺りは明るくなってきた。目の前には、太陽のようにひかり輝く出口がある。僕たちは、つい嬉しくなって、そこへ向かって、一気に進んだ。

外に出て出から、まぶしさに慣れない目で、何度も瞬きをしながら辺りを見回していると、そこがジャングルのように木々の生い茂った場所であることがわかった。

「なんだか蒸し暑い。湿気がものすごいと思った。ここは、一体……。」

「まるでジャングルのようだ。最初は暑いといったのは、強ち正しかったようだね」

最初は暑い、というのは、最初の試練はジャングルだということだったのか……。そんなことよりも、彼が僕の後から明るみに出

てきたとき、僕は驚いた。なんと彼の腕には紫色の痛々しいあざが出来ていたのだ。しかもそれは何度も、いや毎日のように注射をしたかのようなあざが、肘の関節のあたり一体を埋め尽くしていた。まさか彼は、薬物中毒者か、何か重い病気にかかっているんじゃない……？ いやいや、きつとそんなことはない。崩れそうになるイメージを留めて、僕は気を取り直した。

「でもさ、一体何をしたらいいのかわからないよ。こんなジャングルで何をしろっていうんだろう」

僕がそう言うと、オッツは僕の前に立って、あたりを詮索しはじめた。足元には、草や背の低い木が生い茂っていて、かなり歩きづらい。僕らは枝をなぎ倒しながら、進んでいくしかなかった。サバイバルのようなことには、めっぽう弱い僕だったが、オッツが先に立ってくれたお陰で、それほど苦労をせずに進むことが出来た。

「ナイフでもあるといいんだけどな。まさかこんなジャングルに出くわすとは思わなかったよ」

「オッツさんは、こういうことをしたことがあるの？」

「こつこつこつって？」

「儀式だよ」

オッツは、僕の質問に「私だって初めてだ」と答えた。どうやら、僕たちは未知の体験をしているらしい。それにしても、こんな風にサバイバルができる彼を見ると、彼の腹話術師という一面がまるで仮面のように思えてくる。

「へえ、そうなんだ。僕、オツズさんのことを僕よりもずっと先輩だと思っていたよ。なんでも知っているんじゃないかと」

「まさか」

存外な答えに、僕は驚いた。

「ボクだって、魔術師になったのは、そんなに昔のことじゃないさ」

「へえ……」

和やかな会話が続くと思った矢先、僕はとんでもないものを踏んでしまった。

「痛っ！」

僕が大声を上げると、オツズが「どうした？」と言って、こちらに振り返った。

「なんだろう。何かに挟まったみたいなんだ……」

急いで足元を確認すると、どうやらネズミ捕りのようなものにかかってしまったらしい。どうして、こんなところにネズミ捕りが

……

その瞬間、僕はよくある探検映画の映像を思い出した。

ジャングルの中を探検している人々が、ジャングルの中に仕掛けられた罠にはまってしまい、同時に吊り上げられて、網の中に入れてしまう。しばらくすると、知らない民族が来て……。

まさか。そんなことがあるわけが無い。だって、あれは映画
の中での話した。まさか、本当にそんな罠が仕掛けられているわ
けが

「うわぁあああああ」

……あつた。

第六十八話 - 猿の秘宝 -

僕は一瞬にして吹っ飛んだ視界に目が回った。ものすごい勢いで宙吊りにされてしまったのだ。同時に、カウベルのような音が森中に響く。

「レンデイ！」

オッズがはるか下で叫んでいる。僕は、頭に血が上ってゆく感覚を覚えながら、オッズに向かって、叫んだ。

「た、助けて！ わー！」

半狂乱になりながら宙で必死にもがいていると、派手な格好をした集団が草むらをかき分けてやってきた。十人くらいいる。あの人たちは、一体……。

「かかったか？」

「珍しい、黒い毛の猿か」

「僕は猿じゃない！」僕は必死になって叫んだ。

「言葉を喋るぞ」

「あいつは誰だ！」

最後の一言を、集団の一人がオッズに向かって、言い放った。オッズはわけもわからずにそこで立ち尽くしている。すると、草

むらをかき分けてきた集団のうちの一人が彼のそばに寄ってきた。

「何処のどいつだ？」

オッズはとまどいながら、状況を説明する。 どうやら、言葉は通じているらしい。 彼等は、僕らと同じ言葉を使っている民族のようだ。

「なるほど。 では、猿の仲間ではないのだな？」

「猿の仲間……？」

”猿の仲間”とは一体なんのことだろう？

「知らないのか。 それなら安心した。 だが、目を光らせておくからな」

集団のリーダーかと思われる人がそう言うと、周りに五、六人いた仲間達が、枝からつるされるような格好でいた僕を助けてくれた。 どうやら悪い人たちでは無さそうだ。 ……と、思ったのも、束の間。

「ちょっとー！」

僕たちは、手足を棒に縛り付けられ、まるで豚の丸焼きにでもされるかのようなかたちで、担がれた。 僕らは、集団に連れて行かれた。 ジャングルの獣道をずんずん進んでゆく。 しばらくすると、彼等の村と思われる場所に着いた。

「さあ、歓迎のパーティだ！」

僕は耳を疑った。さっきの扱い方が、歓迎のしるしだったとは……。しかし、丁寧に縄を解いてくれたことは嬉しかった。なれない異国の文化に、僕は目が回りそうだ。

「きつと、大丈夫さ」

オツズが、そう言って僕を励ましてくれたが、緊張は一向に解けなかった。この前、リトルに誘拐されて参入儀礼を受けさせられたことを思い出す……。

しかし、村の人々は快く僕たちを歓迎してくれたらしく、僕らは村の中央にある広場へと運ばれた。そして、僕らのために用意してくれたのであろう席につき、しばらく固まっていると、綺麗な女の人たちが、次から次へと見たことも無い珍しい料理を運んできてくれた。

「ほづら、ボクらは歓迎されているんだ」

そう言って、オツズは得意になり、丸い渦巻きのような形をした料理にかぶりつく。

「× ……！」

途端に、言葉にならない悲鳴が聞こえてきた。オツズはそれをゴクリと飲み込むと、

「……実に、ユーモアのある味だね」

と言つて、僕に向かつて舌を突き出した。するとそこには、まるで身体に悪そうなければ美しい色のキャンデーを食べたときと同じような現象が起こっていた。僕はそれを見て、料理には目を向けないことにした。

「ところで」

オッツは水を飲んだあとで、辺りをぐるりと見渡すと、先に出会った集団のリーダーと思われる人を捕まえて、話し掛けた。リーダーは足早に僕らのところへと寄ってくる。

「ボクたちを歓迎してくれてありがとうございます。早速なのですが、猿の仲間とは、一体なんのことですか？」

すると、リーダーは、急に後ろめたいことを聞かれてしまったかのような決まりの悪い顔をして黙りこくった。何か、聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか……？ リーダーは、しばらく考えると、僕らにこう言った。

「時々、私たちの村を荒らしに来る輩だよ」

「村を？」

オッツが聞き返すと、リーダーは深刻そうな口調でこう語った。

「住みかを追っ払っちまったのがいけないのかもしれないが……。彼等はな、昔は人々と仲良く暮らしていたんだ。ところが人が次第に増えてきたから、村を大きくするために森を切り開いた。すると、彼等は怒って、新しく建てた家などにいたずらをするようになったのじゃよ」

「猿の報復か」と、僕。

「だから、最初は君たちがその猿の仲間なのではないかと思って心配したんじゃない。だが、わしの見るところ、そんな様子はないな」

なるほど……だからあの時僕は「珍しい黒い毛の猿」と呼ばれたのか。でも、何故珍しいのだろうか？ 黒い猿なら、何処にでもいそうだ。ここに居る人たちにとって、黒い毛の猿が普通でないのだとしたら、一体どんな猿をこの人々は普段見ているのだろうか。

「その猿は、今はどこに住んでいるのです？」

オッツがリーダーに話し掛けると

「詳しいことは知らんなあ。ただ、赤い毛をしておることは確かじゃ」と、彼はため息をつきながら答えた。

猿が、人々に復讐をするだなんてことが、実際にありえるのだろうか？ だが、ここは夢の世界だ。現実世界とは違う。

「もしかしたら……」

僕がそういうと、二人は振り返って僕に注目した。

「妖怪についての本で読んだことがあるんですが……それって、もしかして日本の南方妖怪”キジムナー”じゃないですか？」

「キジムナーとな？」

リーダーが怪訝な顔でそう言ったので、僕は説明をした。

「僕は、それが猿の正体だとは確証できませんが、話を聞いていると似ているような気がして……」

僕がなんと説明しようかで迷っていると、オッズが「それは気になるな」と言い、弁舌を促してくれた。

「キジムナーは確か、木の精霊です。他にも色々な言われがありますが……。赤ん坊や猿の姿によく似ていて、赤い毛を纏っていると云います。住みかを追い出されると、人間に報復すると」

「なるほど。だから、いたずらをするようになったのか」 オッズは納得が行ったらしく、相槌を打ってそう答える。

「あの猿は、そんなものだったのか」 リーダーもオッズと同じように驚いた口調でそう言う。

「でも、実際のものを見たわけじゃあ無いから、そうとは言い切れないけど……」

確かに、自信が無い。僕が再び黙り込んでいると、リーダーが唐突に話し出した。

「猿が、村の秘宝を持っているらしいのですわ」

「村の秘宝？」と、僕。

「そうだ。洞窟の奥に隠され、昔からこの土地を守る神として祀られているんだが……。今度村で行われる儀式のために、それが

必要なんじゃない。しかし、猿がその秘宝を村人に返そうとせんで

それが、君の試練だ。

「あれ？」

今、ふと、誰かの声が聞こえた気がした。聞き覚えがある。幻聴だろうか。

「どうしたんだ、レンディ？」 オッツが神妙な顔つきで僕を見た。

「ううん、なんでもない」

そう言って、僕はリーダーに話しの続きを促した。

「それで……。どうしても、猿から秘宝を返してもらわなければならん。儀式を中止にしても、いつかは問題が解決されなければならんからの」

僕たちは、どうしたら良いかわからなかった。しかし、しばらく黙り込んでいると、オッツが突然

「彼等はボクたちを歓迎してくれた上に料理まで振舞ってくれたんだ。ここは、感謝のしるしとして、その問題を解決してみせようじゃないか」

と言った。

オッツは、どこまでもお人よしだ。

第六十九話・村のキジムナー

オッズがそう言うと、リーダーは嬉しそうに僕らを見てこう言った。

「それは頼もしい！　今までに、何人も彼等から秘宝を取り返そうとしたが失敗続きだったんじゃ。　おお、まさかこんなお客が来てくれるとは……。　いやはや、感謝せねばならん」

僕が、あまりに大げさなリーダーの態度にあたふたしていると、威勢良くオッズが乗り出して

「ところで、その洞窟というのは、どこにあるのです？」

と、リーダーに尋ねた。

「まあ、詳しい話しはわしの家で話そうじゃないか。　付いて来てくれたまえ」

僕たちは、リーダーの後について、彼の家へ向かうことになった。僕は、あまりに身勝手なふるまいをするオッズに抗議した。

「いくら感謝をするにしても、見ず知らずの人の相手をするだなんて、オッズの好奇心は一体どうなっているの？」

すると彼は、まるで茶目っ気たっぷりの子のような微笑を浮かべて

「ボクはこういふことをするのが好きなんだよ。　ワクワクするじ

やないか」

と、答えた。子供の僕よりも子供らしい大人……ある意味で恐ろしい大人に出会ったのは、彼が初めてである。僕は、洞窟よりも、むしろオツズに好奇心が沸く。そして、洞窟へは行きたくなかった……。

リーダーの家につくと、彼はまず自身の自己紹介をしてくれた。

「名乗り遅れてすまない。わしはこの村の長を務めているヤブカラじゃ。さて、早速本題に入るが、この地図に洞窟についてかかれておる」

そう言うと、ヤブカラさんは部屋の置くにある本棚から、古めかしい巻物のようなものを取り出して、僕たちの前にもってきてくれた。ヤブカラさんの家は、アジアンテイストの落ち着いた雰囲気でお香か何かの良い香りが部屋中に漂っている。家具や調度品などは、皆あめ色の木で作られていて、それらの古さが良い味を出している。

テーブルの上に広げられた地図を見ると、そこには洞窟内部の地図と、その下に地図の幅いっぱいに次のような文章が書かれていた。

”己の足元に気をつけて進め”

己の足元……？

「洞窟の中は地下水が流れているために、かなり湿っている。滑

りやすいからの。　わしが書いておいたのじゃ」

なるほど。　と、　　いと僕たちがここに来る前、　　辿ってきた洞窟と似たようなつくりをしているのか。

「ところで、洞窟へはどうやっていくんです？」

オツズは早くその洞窟へ行きたくて仕方が無いらしい。

彼がそう言つと、ヤブカラさんは、しばらく考えこんだあとで、
答えた。

「入り口までいくには少し手間が掛かる。　急いでも船で二日はかかるじやろ。　わしが船を用意しておいてやるから……いや、お前達は本気であるの洞窟へ行くつもりなのか？」

すると、オツズははっきりと頷いた。　僕は、しばらく戸惑っていたが、やっぱりオツズと同じように頷くしかなかった。

「今からいくのが無理なら、明日にでも行きます」

そこまでいうのなら、とヤブカラさんも納得したらしく、船を出してもらえらることとなった。　あまりに話しが早く進みすぎている。　オツズのやる気がありすぎるのか、それとも僕が儀式に対して消極的なのか知らないが、事の進み方がまるでとんとん拍子だ。

その日は、ヤブカラさんの家に泊めてもらうことになった。

そしてその翌日の早朝、ヤブカラさんは、既に村から少し離れた川岸に、木製のボートを一台用意してくれていた。　どうやら同じ村の漁業組合に協力してもらったらしい。　僕たちは朝食をおえた後で川岸まで行くと、小さいが、ちゃんと二人が乗れることの出来

る大きさであるのがわかった。 オッズがヤブカラさんにお礼をいうと、さっそくそのボートに乗って、出発することにした。

「気をつけるんじゃないよ！」

遠くのほうで、ヤブカラさんが手を振っている。 僕たちも、彼に向かって手を振った。

ヤブカラさんの話しに寄れば、この川をずっと上流へと上ってゆけば、洞窟の入り口につくらしい。

ところで、キジムナーという妖怪は、火を吹くという特質を持っている。 確か、今までに秘宝を彼らから取り返しに行った人々は、皆失敗していたとヤブカラさんは話していた。 僕の脳裏に恐ろしい妄想がよぎる。 まさか、みんな……キジムナーの吹く火にやられたんじゃない……？

いやいや。 まだそれはわからない。 自分で確かめたワケじゃないんだから！ いざとなったときは、そう。 きつと前で梶を取っているオッズが助けてくれる。 そう信じて、僕は、手にしていた梶に力を込めた。

「お」

すると、オッズが何かに気付いたのか、右手側の岸を見て、僕に話し掛けた。

「あれを見る」

そこには 正確には、右手側の岸辺に赤い毛をした猿の群れが、こちらを見ているのが見えた。 あれは、もしかして……？

「キジムナー……かな」

オツズがそう言うと、僕たちは、梶をこぐ手を止めて、赤い毛の猿たちキジムナーに見入った。 彼らは、こちらを不思議そうな目で見ている。 それにしても、彼らは普通の猿とは、やはりどこか違っていきような気がした。 なんと言おう、顔がまるで人間の赤ちゃんのようだ。 それに、つぶらな目をしていても可愛い。 腰にはボロ布のようなものを巻きつけていて、ちゃんと性別があるようだ。 絵でみたりすることは以前あったが、本物を見たのは、これが初めてである。

しばらくキジムナーたちを見ていると、オツズが不意に独り言をつぶやいた。

「カウル……」

確かに。 あれに二本の角を生やしたら、カウルにそっくりだろう。 しかし、僕はオツズを見て、彼は単にキジムナーをカウルと比較しただけでないと思った。 オツズは、どこか寂しそうな顔をしている。

「やっぱり、一緒についてきてもよかった。 そうだよ。 何故、リトルがカウルやオツズのことを煙たがっているのか分からないけど……。 でも、僕はカウルが悪い奴だとは思えない。 そりゃあ、口はたまに悪いけどさ」

「いや、いいんだ。 これでよかったのさ」

するとオツズは開き直るようにして、にっこりと笑って見せた。
自然な笑顔だとは思えなかったが、以前僕が彼と会ったときに見
たときよりか、少しは隈が薄らいで、顔色が良くなっているように
見えた。

第七十話・カウルの秘密

あの後、僕たちはしばらくのあいだ沈黙で船を進めた。しずかな波の音、動物の鳴き声、風のさすらい……僕らを取り巻く環境の全てが、それはそれは穏やかで、美しかった。僕は、時間を忘れて雄大な雲が流れていく様子を見つめていた。

「のどかなところだな」

オッツがそう言ったとき、僕は彼に何か話したいことが合ったのではないかと、思い出した。

「そうだね。ずっとこういうところで暮らしていたら、少しくらいの悩みがあっても、すぐに気にならなくなるだろう。それくらい元気になれる気がする。オッツさんの隈だって、薄らいでいるし」

すると、オッツは驚いて、僕を見返した。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

きっと何かある。そうに違いないと僕は思った。いやらしい感情が湧きあがってくる。

「嘘だ。何か有るはずだよ」

僕は、オッツに問い詰めた。

自分で言っておきながら、まるでジェシーのようなセリフだ、と僕は思った。

「何かって」

オツズはそこで一旦区切ると、一息ついて、言葉を探すようにそこらを見回したあと、こう言った。

「レンディ？ 隈ができるのは何故だか知っているかい」

「貧血だって、この前言っていたよね？」

「そうだ。貧血……つまり、エーテルを失うことで、隈ができているんだ」

エーテルを失う？ つまり、それは貧血………どういうことだろう。エーテルについては、以前リトルから聞いたことがある。生命力そのもののような物質らしい。だとすると、血液か、何かのことなんだろうか。

「……もう気付いているかもしれないが、ボクはね。勘違いしないでくれよ？ ここだけの秘密だから……。ボクはカウルのために自分のエーテルをあげているんだ」

切り口上で彼がそう述べると、僕は自分の耳を疑わざるをえなくなつた。

「へ？ カウルのために、自分の……？」

それじゃあ……それじゃあ、まるで

「断っておくが、彼は今騒ぎを起こしている夢魔とは違う」

そう断ると、オッズは真剣な目つきで、僕を正視しながら続けた。そのとき、心持、空に浮かんでいた雲が陰りはじめたような気がした。

「痛いけれども我慢するしかない。と、いうのもね。話すと長くなるんだが……何、続けて欲しいって？ それじゃあレンディのために続けるよ。」

ボクには、もともと三歳年下の妹がいたんだ。名前はローザと
いって、優しくて良い妹だった。

ただ、彼女は病弱だった。そして、両親はともに働けない……
というのも、母は幼い頃に無くなり、父はそれが原因で飲んだくれ
になり、ろくに働こうとしなかったんだ。だから、病弱な妹のため
に、ボクは子供の頃から働くしかなかった。毎日毎日、きつい
労働に耐えて頑張ったよ。君には想像もつかないだろうけど……」

確かに。少なくとも、今までに僕がきつい労働をしなければな
らなかつたことは、人生のなかで一度も無かつた。彼のことを聞
くと、自分がいかに恵まれているのかが、わかる。

「それもあるかもしれないが、ボクがこんない年になっても、子
供の夢にあこがれているのは、昔子供らしい経験をあまりできな
かつたからなのかもしれないね」

そう言うと、オッズは少し寂しそうに笑った。そうか。オッ
ズさんの作っているぬいぐるみやクッキー、そして大道芸……それ
らはすべて、子供を喜ばせる、夢のような存在だ。彼は、子供の

心に近づきたいがために、そのような職業を選んだのだろう。

「しかし、ローザは死んでしまった……。ボクの働いた甲斐も無く。甲斐も無いなんて、言いたくないが、事實は代えられない。しかしそのとき、信じてもらえないかもしれないが、彼女が病床上で死んだ瞬間、一人の男が現れたんだ」

一人の男……？

「それは本当に、幽霊のようにスツと現れてね。冥界からの迎えが来たのかと思ったよ。確か、男の名前は……ゲーテ？ いや、ゲルデだ。そう、ゲルデというんだ。見た目は小柄な紳士でね。ただ、そのゲルデの顔色は、ひどく土気色を帯びていて、深く刻まれた皺の間から見える眼は、悪魔のような眼光を宿していた。今でもそれがまぶたの裏に焼きついているよ。」

そしてゲルデは、ボクらの前に現れるなり、見た目以上に年の行った……そう、まるで百歳のおじいさんのような、しわがれた声でこう言ったんだ。『私はいつでも人の死に立ち会ってしまう、非常に不幸な男です』」

僕は、いつのまにかオツズの話しに真剣に耳を傾けていた。不思議なこと……聞くも語るも恐ろしい、奇怪な話に。

「そのとき、ボクは妹の寝ているベッドの枕元にあった椅子に腰掛けていた。ゲルデはボクの後ろから、気配を感じさせること無く、不意に現れた。妙な寒気がボクの背中を這うように伝ってきて、言葉を失ったね。それと引き換えに、ゲルデは部屋中に響くような奇怪な声を発した。」

左手側から、さつき言った言葉をボクにつぶやくと、彼はこう言っただ。

『不幸なことばかりを見てみると、自分まで不幸になった気がする。貴方だって、不幸にはなりたくないでしょう？ どうです、ここは一つ、私と取引をしてみませんか？』

ボクの心は、突然の出来事に動揺していた。今すぐにでも、「お前は誰だ！ どこから入ってきたんだ」と問い詰めたかったが、言葉が出なかつたんだ。でも、彼を追い返さなかつたことを後悔してはいない。なぜなら、この先の出来事がある意味でボクに幸福を齎してくれたからさ。

……そして、ローザが名前まで付けて、いつも大切に抱いていた……そう、死ぬ間際も大切に抱いていた鬼の縫いぐるみを指差して、ゲルデはこう言った。

『例えばその縫いぐるみ。魂の器というものは、必ずしも生きているという必要は無い。それなりのかたちをしていれば、充分器になりえるのです。貴方は、魔術というものをご存知でしょうか』

そのときボクは、やっと搾り出した声で、“知らない”と答えた。今のボクからじゃ、信じられないかもしれないが、そのときのボクは、魔術のことなんてこれっぽっちも知らなかつたんだ

オッズも、最初は僕と同じような一般人だったのか。

「ゲルデは、ボクのおどおどしている態度を確認すると、しばらくの間料簡して、こう言った。

『何をするにも、本人の承諾が必要だ。よって、真実は貴方の心のうちにある。ひとつ断っておきますが、一度行ったことは二度と取り返しのつかないことになりますよ。今はまだ未来がありますから……ほら、まだ魂がそこにいるじゃあないですか。この魂の行く先は貴方の手にかかっているのです。つまり……』

ボクは、即座に彼の謂わんとしていることを察した。そして言うまでも無く

『蘇らせることが……できるといっているのですか』と、ボクはゲルデに問い掛けたんだ。

すると、ゲルデはこう答えた。

『蘇らせることとは、また違う。魂を取り留めておくのです。その人形の中に』

その人形が……。

「魂の媒体。それが」

オッツは、そこまで話すと、ふうと一息ついてオールをこいでいた手を休めた。

「今に至る、カウルなんだよ」

僕は、これまでオッツが話したことを頭の中で整理しながら、彼に質問した。

「なんだか、信じられない話だなあ。その男の人は、本当にそ

「ここにいたんだね？」

「いたとも。ボクがこの目で確かめたんだ。信じてもらえそうも無い話したが、ボクにとってはそれが真実なんだよ」

僕は、ゲルデという謎の男について、さらに詳しい話をするようにとオツズに訪ねた。

「それについては、カウルの誕生の秘密も交えながら話していくことにしよう。でも、すこし疲れたから、そろそろランチにしないか？」

「あ」

気付けば、日は空高く上って、真上から僕らを見下ろしていた。そして僕は今の今まで、食料のことに付いてなど何も考えていなかったことに気が付いた。

「ヤブカラさんから簡単な携帯食をいくつか貰ってきたんだ」

そう言うと、オツズは僕の知らない間に舟に積み込まれていたリユックサツクの中から魚の乾物と見たことも無い、大きくて硬そうな果物、そして小さなパンを取り出して、僕に差し向けた。

僕は乾物を一つと、パンを二つ受け取って、オツズにお礼を言った。

「見たことも無い食べ物だなあ」

「でも、なかなかいけるぞ」

そういう頃には、オツズはさっそく乾物にかぶりついていた。

彼はきつと好き嫌いなく何でも食べる性質なんだろう。しかし、それはすぐにオツズに対する偏見なんだと、僕は覚った。なぜなら、その乾物を一口口にした瞬間、なんともいえない美味が口の中に広がったからだ。きつと、あの渦巻きをの形をした不可解な食べ物も、実は美味しかったのかもしれない。

しばらくして昼食を終える頃、(どうやら硬くて大きな果物はヤシの実と同じような果物だったらしい。中には甘い汁がたっぷりと入っていた)僕は再びさっきの話しをオツズに持ち出した。

「それで、話しの続きだけど」

「ああ、忘れるところだった。そう……ボクは、カウルにローザの魂を写したんだ。ボクが全部やったわけではないが、魂を取り留めておくというのは、そういうことだった。ゲルデが主に手伝ったよ。……少し残酷だったな。でも後悔はしていない。理由はさつきと同じさ。ボクは、ためらいながらも、ゲルデにそそのかされて、カウルの体の中にローザの血で書いた呪符を入れた。ボクの血との付き合いはそれが始まりだったな。それから、毎日のように血液を……夢の中でだけ、ささげなければならなかったんだ」

なるほど！ だから、オツズはいつでも(少なくとも僕が彼と以前会ったときは)貧血のようだったんだ。

「経験からして、エーテルというのは、生命力そのものだ。夢の世界で生命力が衰えれば、当然肉体にもその影響がでてくる。老廃物が溜まったり、血液の循環が悪くなったりしたんだろうね。もう気付いていると思うが、ボクの左腕にあるあざは、注射によつてできたものだ。でも、ボクは……今でも覚えている。はじめ

てカウルと話すことのできたあの日を」

オッツは夢を見ているようなまなざしを宙に向けていた。そして、ゆっくりと僕に視線を戻した。

「毎日が夢のようだった。すぐにカウルと話すことはできなかったが、最初のうちでも、確かに妹のローザのぬくもりが感じ取れたんだ。そして、ボクはある種の魔術的な行為をして以来、そつちの世界に自然と足を踏み込むようになった。いや、正確には踏み込まざるを得なかった。と、いうのもカウルに悪霊が取り付かないように、一ヶ月に一度は清めなければならぬし、カウルと話しができるようになるためには、修行が必要だった。あ、現実世界での会話は別だよ？ タネあかしをしたらつまらないから、そのなぞについてはこれを読んでいる読者の方と君への課題としておこう。

(笑)

さて、これでカウルのことは大体話した。ゲルデの詳細については……すまないが、最初に話したとおりなんだ。これ以上を語ることは出来ない。彼は、カウルへローザの魂の乗り移らせる作業を終えると同時に、跡形も無く姿を消してしまったから。でもきっと、ボクは彼が天の使いか何かだと思っているよ」

悪魔的な目をしたおじいさんが、天の使いだなんて……不自然だが、彼に齎したことに、裏はないだろう。きっと。

「それにしても、オッツがカウルと話しをするために修行が必要なものに対して、どうして僕は最初からカウルと話すことが出来たんだろうね」

すると、オッツは、それもそうだ、と少し驚いた様子で僕を見返した。

「ボクは今までカウルと話せることはあたりまえのことのように思っていたが……鈍感だった。君が何故カウルと喋ることができるのか。いや、あの時リトルも喋っていたし、ウィルも……」

僕は彼の言葉を聞いて、もしかしたらオツズのレベルが低いだけなんじゃないかと、ひそかに思った。

「まったく、世の中は不思議なことではいっばいだね！」

そう言うとオツズは無理矢理とりつくろった笑みを浮かべて、肩をすくめた。

「本当にね……」

むしろ、オツズを除く僕たちのメンバーが極めて特殊だったということは、言うまでもない。

第七十一話・キジムナーのいたずら

「ところで、カウルが他の夢魔とは違うとか、なんとか言っていたけど」

僕は、話題がそれてしまわないうちに、先ほどオッズが話しの冒頭で触れていたことについてを聞いてみた。

「カウルの正体については、しばらくたってから気付いた。そうだな。ボクが、魔術について、ある程度の知識を得た頃合いだったよ。」

最初、彼にエーテルを上げなければ、死んでしまうといったのは、ゲルデだったんだ。最初はなんのこともよくわからなかった。

ただ、エーテルをあげるのをさぼっていると日に日に彼が無口になっていくことは、わかる。だから、上げていた。そしてその後、何故彼にエーテルをあげなければならないのか、ということに疑問をもったボクは、エーテルについて調べ始めた。すると、ある文献から興味深い一文を発見したんだ。

”エーテルを糧とするもの、夢魔について。 人の^{エーテル}生命力を糧とし、夢の世界に住む住人”

夢魔のことに、興味がいったわけではないよ。もし、その一文が本当だとしたら、カウルはどうだろうって。彼は夢の中でしか喋ることが出来なかった。それに、エーテルという生命力を必要としている。まさかの偶然じゃないかと、最初は疑ったさ。しかし、よく考えて見ろよ。生命力を糧としていることや、夢の世界でのみ、彼の命が有効であるということが、夢魔の性質とそっくりじゃないか」

オツズは、そこまで一気に言い遂げると、僕が信じられないような目つきで彼を見ていることに彼自身が気が付いたのか、自分の発言に少し後悔した様子で、ため息をついた。

僕は、もしやと思い、彼にこう言った。

「もしも、その文献がインチキだらけのグリモワール（魔道書のこと）だとしたら……？」

「そうだといいいね。でも、他の文献を探ってみても、同じようなことしかかかれていなかった。皆が口をそろえて言うのだから、強ち間違っではないないさ……。ただ、彼だけは特別なんだと思いつい込むことしか出来ない。いや、そうであってしかるべきなんだ」

なんと言い返せばよいのだろうか？ 僕の立場として、夢魔が彼の仲間であるということに、反感を持って掛かっても良いのか。いや、そんなことをしたら、きっとオツズは傷ついてしまう。むしろ、軽蔑されるかも。僕を何度もカラスから救ってくれた恩人に対して、疎遠的な態度を取るのには、辛いことだ。仲間の縁は切りたくないけれど、恐ろしい、未知の存在である夢魔に関しては、一歩も近づきたくなかった。

日が暮れかかり、赤く燃えるような空を見渡していると、不意に彼はこう言った。

「やはり、ヤブカラさんの言っていたとおりだ。今日中に洞窟までたどり着くのは無理だろう。そろそろ寝るところを確保しないといけないな」

「どこで寝るのさ……？ きっと、蚊がたくさんいるに違いないよ」

するとオツズは、少し考えてから、案を出した。

「じゃあ、どこか小屋を探そう」

僕たちは、そこだけ木々が避けるように生えている小さな岸边に船を着けてから、ジャングルの中を散策することにした。その頃には、ほとんど日が暮れかかっていた。こういった、ジャングルには、必ず猛獣がつきものだが、ヤブカラさんは特に注意していなかったし、猛獣のような鳴き声も聞こえてこない。

もしかしたら意外と安全なジャングルなのかも、と思い、僕は少しだけ安心した。

「こんなところに、小屋なんてあるの？」

挑戦的に彼に話し掛けてみたハズだったが、挑戦するまでもなかった。

なぜなら、そう言った一、二分後には、誰も使っていない、打ち捨てられたような小屋を見つけたからだ。小屋といっても、大木の根が二股に割れている部分に掘建てられた、極小さなものだった。

小屋には、壁から屋根に向かって、つる科の植物が這いまわり、大木の成に溶け込んで、カメレオンのような様相を呈しているそれは、僕たちを不気味に見つめていた。

「なんだか……すごい小屋だね」

なんとコメントしたら良いのかわからなくて、僕が遠くから小屋を眺めていると、オツズはずんずんと小屋の方へ進んでいって、中を調べに行った。

廃材のようなもので出来たみすばらしい小屋だったが、中に入れば、雨風がある程度は防ぐことの出来るようだ、オッツが言った。

「とりあえず、今日はここに寝泊りしよう。 レンディ？ 荷物を運ぶのを手伝ってくれ」

僕たちは、船に置き去りにしてきた荷物を小屋の中へと移動させた。 移動させ終わる頃には、既に夕闇が地平線の彼方まで広がり、むっとする熱帯夜が訪れる。

ジャングルの日没は、駆け足で去るも同然だった。 僕等が蚊を避けるためのテントを小屋の入り口に張ったところには、足元に気をつけなければすっころぶ（何しろ地面が湿っている）場合であった。 僕たちは、小屋の中にカンテラを灯して、明かりを確保した。

天井につるされたカンテラの暖かな光が、でこぼことした木の壁に黒い影を浮かび上がらせた。

「なんだかおとぎばなしにでも出てきそうな小屋だね」

「本当におとぎばなしなんだから仕方が無いさ」

オッツは皮肉っぽくそう言うと、今日は疲れたなどと漏らして、リュックを枕にさっさと寝てしまった。 僕は何もすることがなかった。 ドアのない入り口から吹いてくる、生暖かくて、きつと誰かがバーベキューでもやっているのであろう煙っぽい風を感じながら暗い天井を見つめていた。

” ガサゴン ”

……何か物音が聞こえやしなかったか？

おかしい。僕はさつと立ち上がってあたりを見回してみた。何か動くものが無いかと、よく

目を凝らしてみたが、それらしきものは見当たらず、虫の無く声しか聞こえない。

そのハズだ。きっと空耳だったのだ。

僕は自分にそうやって言い聞かせ、さつさと寝た。

翌朝。僕たちは葉っぱなどをふとんの代わりにして眠ってはいなかった。なのに、葉っぱのほかにはドロや木の枝などが小屋の中に散乱しているから、どうみてもいたはずをされたに違いない。そういう形跡が、僕等を驚かせる。

「これは一体どういうことだ？ レンディ、もしかして君は」

オッズが疑い深く僕をにらんだが、僕は

「僕がこんなユーモアのある人間だと思っ？」

と、一言言い返した。

「じゃあ、一体だれが……」

嫌な予感がする。僕等は、部屋の中を片付けて、ボートを着けた岸へ向かうことにした。

ボートにのって得体の知らない何か潜んでいるであろう小屋から離れようとしたのだが、そこで、ああ、嫌な予感はこのせいだったのだ、と悟った。

ボートをつけておいたハズの岸には、真っ黒い燃え殻のようなものしか残っていなかったのだ。そが風に吹かれて四方にばら撒けている。もちろん、ボートはあった。しかし、先ほど言ったような姿で……僕はこれら二つの事件に遭遇して、あるキジムナーの性質を思い出した。

「こりゃあ、いたずらだよ」

「いたずら？ 悪質すぎやしないか？」

「なんたつて、キジムナーのいたずらだもの。彼等は火を吹くんだ。昨日、寝付こうと思ったときにかいた煙のような匂いは、きっとボートが焼けていた匂いなんだな……。さて、捕まえてみればわかるよ？ 彼等は可愛くていたずらっ子なんだ」

僕らがそんな会話をしているところへ、待っていましたと言わんばかりに一人の（一匹か？）キジムナーが木のツタをつたって舞い降りてきた。僕たちは驚いて一、二歩あとずさったがキジムナーの方はじつと僕等を睨んでいた。

キジムナーの格好をまじかで見るのは、これが初めてだ。やはり、赤っぽくてゴワゴワした髪の毛に、身に纏っているぼろきれのような布が印象的である。

「もしか、おまえらは昨日俺の家に勝手に入り込んでいた連中だろう？ そんな真似をするから！ 当然のむくい……」

するとあとからそのキジムナーの家族と思われる、子供や女のキジムナーがこのこと出てきた。

僕たちは困惑して、互いに目を合わせた。それから、とりあえず謝罪することを決めると、まずはオッズが彼のほうへと歩み出て

いく。

「すまなかった。でも、今回のことは、決してわざとじゃあないんだ。許してくれないか」

しばらくキジムナーはいぶかしげにオツズを見ていたが、やがてそれなら……ということ、なんとか僕等は許してもらえることとなった。

しかしその後僕は、キジムナーに焼け焦げた船のことを訪ねたが、一度やってしまったものは元に戻せないといわれ、仕方なく洞窟まで歩いていくことになった。

オツズが災難続きだ、とぼやく。

「まっただ」

「きつとこれが試練なんだね」

これがウィルの用意した試練だと思つと、彼の力の偉大さのようなものを覚つた。そして僕はあまりに無力で、彼の手の中では、運命の軌道に逆らえないといったような感覚を知る。それはまさに恐怖であつた。

彼の存在の不可思議さもされど。

第七十二話 - 災難 -

先ほど出遭ったキジムナーの家族達は、雨が降り始めるだろうからさっさと宿を探しにいこうなどと、ぶつくさ文句をたれながら去ってしまった。

僕は、オツズに何か役に立ちそうなものは残っていないかと訪ねた。すると、リュックだけは枕にしておいたおかげでなんとかいたずらをされずに済んだらしく、彼はナイフだのそういった道具は大体残っていると云った。僕はリュックを背負って、右手側に広がる川を見失わないようにしながら、ジャングルの中を突き進んだ。

「こりゃあ、キジムナーの言っていたとおりだな。雲行きがどんどん怪しくなっていくぞ」

オツズがそう言ったとき、ふと空を見上げれば、今にも泣き出しそうな雨雲が空一面に立ちこめていた。僕は、いざ雨が降ってきたらその辺の天狗の葉っぱでもちぎって傘の代わりに使おうと考えた。

数十分歩いたところで、僕は疲れてきたので、残りの食料をそこで食べ尽くし、しばらく休憩したあとでまた歩き出した。すると、歩き出して何分もたないうちに、とうとう最初の一滴が雨雲から零れ落ちてしまった。続いて、ワッと泣き出したように雨が降りはじめた。

僕は走って、洞窟まで目指した。道中、天狗の葉っぱを引き剥こうと必死になったが、僕の力では敵わないと思い、オツズに頼んだところ、それほど洞窟までは離れていないから、少しの辛抱だと諭された。なるほど、彼の言っていたことは正しく、五分か十

分走ったところで、洞窟の入り口が見えた。入り口は天井が低く、直脇に河から枝分かれした小川が流れている。

僕達は、急いで洞窟の中へ非難した。オツズがつぶやく。

「ひどい雨だな。河が氾濫しないといいんだけど……」

僕は、先を急いで、さっさと秘宝を持って帰ったほうが良いと考えた。

「大丈夫だよ！ 先に進もう」

彼は少しためらったが、一応僕の意見に了解して、先に進んだ。

だが、万が一のときにそなえて、洞窟の入り口の脇に生えていた木にロープを巻きつけて固定しておく。そのロープを洞窟の中にひっぱっておけば、迷わないし、水が流れてきたときでも安全にもどることができるという。

背後で激しく地面を打つ雨音が聞こえる……。

洞窟の中は、先に進めば進むほど現実味の薄れた静寂につつまれている世界だったので、僕達はカンテラに火を灯し、その明かりを頼りに、洞窟の中を突き進んだ。

洞窟の天井は低く、湿気などは肌に張り付くほどである。僕達は細く入り組んだ洞窟の中を十分ほど進んだところで、水の匂いに気が付いた。するとオツズがその場にひざまづいて「地面が濡れている。足元に気をつけよう」と、僕に忠告した。

その注意を聞いてから僕は、足を滑らせないように、充分足の裏に神経を歩き渡らせながら、洞窟の中を進んだ。奥に進めば進むほど蒸し暑い。

(今は秘宝だ！ 秘宝！)

またもや、不思議な声が聞こえた。だが、よく聞いてみればウイルの声であることがわかる。

「秘宝?!」

オツズが不思議そうな目で僕を見る。

「こんな状況で秘宝だなんていつていられないよ！ オツズ、とにかく、引き返そう」

「いや、今は秘宝だ」

彼にも、さっきの声が聞こえたのだろうか？

「まずは試練をクリアーすることを考えなくてはならない。あくまでこの試練を達成することが、最大の目的だ。あの伯爵だって、そう言っているだろう?」

驚いたことに、彼も僕が聞いた声と同じ声を聞いていたらしい。最初は、僕だけにしか聞こえないのかと思っていた。そして、リトルがウイルのことを非情だと言っていた理由がわかったような気がした。オツズが洗脳されているのも、きっとウイルの不思議な力のせいなんだと思い込んでおこう。

「何かと指図してくるのかとは思っていたが、本当にそうだったとはな。だが、ボクたちにはロープがあるから大丈夫！ 兎に角、この洞窟が水で浸されてしまう前に、奥まで行って秘宝をとってこよう。戻ることを考えるのは、その後だ」

刻一刻と水で浸されていく洞窟の中を先に進もうだなんて気がふれている。だが、気のふれていると思うことでも、このような極限の場においては、実行しなければならぬ正道だ。

進行方向に向かって流れていく水の中を進むのは、なかなか難しかった。水の流れに逆らって歩いていくことよりも困難である。

何しろ、水の流れて足が滑る。足元を何度も救われそうになりながら、切り立った洞窟の岩に膝小僧をなんどもぶつけながら歩いていくしかない。むしろ泳いだほうが楽ではないのか？ ああ！こんなときに、キジムナーに焼かれてしまったあのボートがあれば……！

そんなとき、オツズが悲鳴をあげた。

「さつきからおかしいと思っていたんだが……」

「どうしたの？」

嫌な予感がする。

「このロープ、いくら引つ張っても抵抗しないんだ」

まさか……

「ダメだ！ もうこれは使い物にならない。きっと何かの拍子にロープがほどけるかしてしまったんだ」

ロープを放り出すと、次にオツズはおぼれそうになりながら、リュックのなかから地図を取り出した。それを広げ、道を確認する。

「洞窟はほとんど一本道だ。だが、途中で大きな穴がぽつかりと空いている場所がある。その穴の中の壁にそって、底まで続いているらせん状の階段を降りていけば秘宝にたどりつけるんだが……。洞窟の中は、どんな風に穴が開いているか分からないから、いっなんとき、どこから水が噴出してきてもおかしくない。それに、水はきつとその穴へ全部流れ込んでいくだろう。それが秘宝を取るために潜っている間に穴の天井まで達すれば、ボクたちは……」

悪い冗談でもいうような、皮肉っぽい目つきで彼が言った。

「そ、そんな……！ 無茶だよ！ 僕達、このままじゃ溺死する」

「現実世界ならそうだろうな。だが、夢の中だから死ぬことはない。きつとなんとかなる！」

「……！」

人は極限状態になると、気が狂ったようにどんなことでもできるようになる。これがその良い例だ。

「わかったよ。じゃあ僕、全力で戦う」

すると、オッズは頼もしそうに笑った。

「全力で！」

第七十三話・空の彼方へ・

「全力で！」

彼がそう言った次の瞬間、僕は渦巻く暗い闇の中へと飛び込んだ。一瞬だった。水しぶきと、鼻に入ってこようとする水を感じながら、暗い闇の中へと、もぐる。

不思議な……母胎の中にもいるような……優しい黒につつまれた感覚をおぼえる。

だが、洞窟の奥に流れ込んでくる水の冷たさは、そんな淡い幻想を一瞬で拭い去った。

僕は目を凝らす。オツズの言うことが正しければ、底のほうに秘宝があるはずだ。

水の中で目を開けた。すべてが暗くぼやけていてよくわからない。ただ一つ、暗い水の底でぼんやりと光り輝いている秘宝を除いては……。

そう！ あれが秘宝だ！

そうに違いない。

僕は夢中で光の元へともぐりこんだ。水圧がどんどんと高くなり、身動きが取りづらくなる。耳が圧迫されるような感覚。少し頭が痛い。

だが、僕はそれに負けじと、煌々と青緑色に輝く秘宝を求めた。あともうすこしだ！

秘宝に近づけば近づくほど、光はまぶしさを増す……。

だが、まさにそれに触れたと思った瞬間、僕はがっかりした。

それはほかでもない。光ってはいるものの、実体が無い。

目の錯覚か。……いや、目の錯覚ではないはずだ。なぜなら目をこすってみてもそれがある。

これは……思い出した！ キジムナー火、水の中でも消えない、キジムナーが出せる不思議な火の玉。夜中こっそりと大好きな魚を捕まえるためにつかう火の玉だが……。今回はかりは、きつとキジムナーがいたずらを嚇け、僕をまどわしているに違いない。本物の秘宝を探さなければ。

ふり振り返ると、そこにはいくつもの光の玉が浮いていた。みんなキジムナー火だ！

僕は、水圧と目の前の火の玉の数々で、頭が混乱しそうになった。すると、ふと、背後からオツズが現れた。僕の少し前に泳いでいくと、ふと振り返って、僕にむかつてうなずいた。"ボクも秘宝探しに協力する"という意味なのだろう。

僕はニヤリと笑い、ありがとう、と笑顔で伝えた。ぼやけている視界の中で、僕の笑顔が彼にはわかったのだろうか……？

だが、そんなことは、今はどうでもよい。兎に角、息が続くうちに秘宝を見つけ出さなければ！

僕たちは必死になって、秘宝を捜し求めた。キジムナーたちが邪魔すぎる。見た目は可愛いのに、こんなに厄介な妖怪だとは思ってもみなかった！

僕ががむしゃらに手をかき回して、秘宝に当たらないか挑戦した。すると、オツズが踵を返してきて、僕の腕を掴む。

「落ち着くんだ、レンデイ」

と、彼が言っているような気がした。そのとおり、息も長く続きそうに無い極限の状況下で、僕は必死で落ち着こうと努めた。

そして落ち着くことの意味は、その数秒後に成果となって現れた。彼が、片手で輪をつくって、その穴の中から僕をのぞく。あれは一体どういうことなのだろう？

何かの文献で、幻と本物を区別するとき用いる方法に”指で輪を作って、その間からのぞく”というものがあると書かれていたことを思い出す。狐の窓のようなものだ。

そうか！

僕は、即座に右手で狐の窓を作り、その穴からキジムナー火であふれる水中をのぞいた。するとどうだろう！ 見る見るうちにキジムナー火は消えて、秘宝だけがしっかりと視界の中に入るではないか！

僕はつい嬉しくなつてワオ！ と完成をあげた。 ためしにわっかの外を除いてみたが、そうすると元のとおりには、キジムナー火が見えている。 輪の中をのぞきこんでいるときだけが、見えなくなっているようだ。

僕はそのまま秘宝に近づいて、煌々と青緑色に光る秘宝をついに手にした。 それを急いでポケットの奥につっこむ。

その瞬間だった。僕は恍惚とした安心感に一瞬浸ったかと思うと、すさまじい息苦しさを実感した。 オツズも苦しいらしい。

身もだえして、酸素の無さに耐えている。

そして徐々に意識が遠のいていく感覚に陥った。 リトルに殺されたときに感じたような、世界が真っ白か真っ黒になっていくような感覚だ。 どうして真っ青とか真っ赤じゃないんだろう、とも思ったりもしたが、今はさておき、このままではおぼれ死んでしまう……！ 想像力を持て余している暇は無い。

苦しさのあまり肺や気管支が脈打つような感覚だ。 そんな中、ふと頭上の薄明かりに気が付く。

朦朧とした意識で水の中から空を見上げると、まるで天界から天使が舞い降りてくるときのベールがそらから降りてきているように思えた。

空が少しだけ明るい。あれはお迎えなのかな……。　　はは、オツズの馬鹿め。　　死なないだなんて嘘っぱぢじゃないか。

夢の中でも死ぬことはありえるんだ……。現に僕は死にそうだ。水かさが増す。僕はそれに身を預けて上のほうへと昇っていく。上へ上がるに連れて、どんどん世界が明るくなってきた。まぶしい。

そして僕は打ち上げられた……。空の彼方まで。

第七十四話・カラスの学園 -

僕達は打ち上げられた …… 打ち上げられた、という事は、あの洞窟は、密閉された空間ではなかったのだ。そう、あのとき僕が見た天国からの導きは、頭上にある穴から差し込んでいる光だったのだ。

そして、それに僕は気付かないで、今さっきまで死ぬことばかりを考えていた。なんて馬鹿げてるんだろう！

僕らは今、生きている！ そして、飛んでいる！ はるか上空を …… そう。火山から溶岩が噴出したように、僕たちはあの洞窟の穴から飛び出したのだ！ 天に向かって飛ばされた僕らは、からだがふわふわとして不安定だ。慣性の法則と位置エネルギーに包み込まれて、一気に吹っ飛ぶ。

そして夢の中で空を飛んでいるときに感じる、いつもの足場の不安定さを覚えた。果たして、自分の体をうまくコントロールできるだろうか ……？ 夢の中で空を飛んだことなら、何度もある。

だが、いつものように快適な空の散歩をするわけにもいかず、僕らは惨めに地面に叩きつけられた。途中で木の枝などに引っかかったりしながら、無残に着地する羽目になってしまったのだ ……。

「あいてて ……。オッズは、大丈夫かい？」

「ああ …… ボクは大丈夫だ。 レンデイ、骨を折ってやしないだろうね？」

僕はオッズの言葉にはっとして、間接を動かしてみた。 …… どうやら、どのパーツも無事なようだ。 おっと、皆さんにはこれが

夢の中だからこそ可能な奇跡だということをおぼれないうで欲しい。

「僕は大丈夫だよ！ それよりも……ここはどこだろう？」

僕たちは体についた葉っぱなどを払い落としてから、のろのろと歩き出した。

どうやら、ジャングルの中に墜落したらしい。ヤブカラさんのいた村の周辺にあったジャングルと風景が似ている。あたりをキョロキョロを見回していると、どこからか男達が駆けつけてきた。

「おーい！ 無事だったか？！」

「はい！ 僕たちは大丈夫です！」

僕が、意気込んで受け答えた。きつとあの男達は、ヤブカラさんの仲間だ。数人の男達が、救急セットをもってやってきた。

「あの洞窟は、雨が降るといつも穴から水が吹き上がるんだ。海が近くにあるおかげで、波の影響を受けやすいんだよ。丁度海もしけていて、大きな波が次から次へと押し寄せてきたんだ」

そうか……それである時、一気に水かさが増してきたのか。

「とりあえず、無事で何よりだ。ヤブカラさんが村で待っているよ。さあ、帰ろう」

僕たちは、村の男達に囲まれて、ヤブカラさんのもとへと帰って来た。洞窟での一件があったおかげで、帰路は非常にだるい道の

りだった。

「やあやあ！ 無事だったかね？ 嵐がきていて、一時はどうなるかと心配でたまらなかったんじゃないよ」

「長老ったら、あの嵐の中でも、レンディたちを迎えに行く！って言って聞かなかったんだ」

僕たちに同行してきた男が、愉快そうに口を挟む。すると、オツズが慌てて謝った。

「ご心配おかけしたようで、申し訳ありません。でも大丈夫です！ほら、レンディ、秘宝を見せるんだ」

僕は、本分不安になりながらポケットをあさった。もしも、秘宝をどこかに落としてきてしまっていたらどうしよう……。だが、心配は必要なかった。

「これだ！ 秘宝だ！」

僕が青緑色に輝くそれを取り出すなり、周りからはおおっと歓声があがった。すると、ヤブカラさんは僕に近づいてきてこう話した。

「そう、それが村を守る秘宝のひとつじゃよ……。この秘宝はな、卒業の儀式にはかかせない秘宝なのじゃ」

卒業？！

「それって……。もしかして、卒業式のこと？！」

「ほほっ、言い忘れておったかの。秘室はまだ他にもたくさんある。村の東西南北をかこむ洞窟に点在しておるのじゃ。じゃが……、村にはもう子供がほとんどおらん。村にただ一つある学校は、今年で廃校になる。卒業式も、これが最後かのう……」

そんな……そんな切ない事情があつたなんて、僕は何もしらなかつた。

そういえば、この村には、ヤブカラさんくらいの老人ばかりだった気がする。若い人は、さつき助けにきてくれた男の人たちだ。子供はというと……。まだ見かけていない。きっと、それだけ少ないんだ。

「さて、その卒業式は明日だ。間に合つてよかつたよ。孫もでるのでね。是非君たちも卒業式にきてくれ。式が終わつたら、この秘室はお前さんたちにやろう」

「長老……！」

僕たちのそばにいた村の男が叫んだ。だが、ヤブカラさんは、落ち着いてこう話す。

「何、これは最初から決まっていたことじゃよ……」

翌日、僕たちは村に唯一ある学校の卒業式に参加した。あの秘室は、卒業する生徒たちが、一人ずつ手をあてて、将来の夢を語るために使われるものだった。みんなの夢を一人ずつ聞いて、それをかなえるための秘室……。なんて素敵な秘室なんだろう。あの青

緑色に輝く秘宝は、これまで学校を卒業してきた生徒たちの将来を聞いてきている。夢の塊みたいなものだ！それを手にすることができてしまったなんて、なんだか恐れ多くて、どうしようもない。

ヤブカラさんの孫は、元気そうなやんちゃっ坊やで、僕たちは直に仲良くなった。だが、もうお別れだ……。

「色々ありがとう！お前さん達には感謝しておる。ほら、お前も頭を下げなさい」

すると孫は、ヤブカラさんに頭を下げられて、僕らに挨拶をした。

「どうも、ありがとう……」

「さあ！第一ステージは終わったかな？！」

唐突に、雰囲気をぶち壊す愉快な口調で、誰かがいった。誰だ？！

「そこにいるのはレンディとオッズだろう？私だ、ウィルだ」

ウィルが喋りだすなり、僕たち以外の世界は時間が止まってしまった。どんなに触っても、叩いても、カチコチのままだ。

「秘宝は得たようだね？それでは、次のステージへと、進もう！」

……へ？

僕達の周りの風景は一瞬にして消し飛んだ。ウィルの魔法でレポートさせられたのか？そしてついた場所は洞窟の中だ……あ

れ?! この景色は、昨日冒険した洞窟じゃないか! 顔がやつと空気中に出していられるくらいまで水が迫っている。このデジヤウは……僕らはもう一度、空へと打ち上げられた。

ここはオックスフォードのはるか上空だ! まるで航空写真を生で見ている気分になる。二度目の飛行。だが、夢の中での出来事だって、何回も繰り返し返せば、上達するのだ。よし、オッズの手を取り、一緒にあの池の中へ飛び込もう。そうすればさつきジャングルの中に落ちたときよりかましな着地ができるはず……そう、地面に叩きつけられるよりか、ましだろう……

「オッズ! 僕の手を握って」

「わかった!」

僕達は、スカイダイビングをするように、手を取り合った。神様、お願いします。どうか、僕たちを池の中へと、運んでください……。

次の瞬間、水面に派手な水しぶきがあがった。そして、全身に信じられない程の痛みが走る……。不覚にも、池は水深三十センチメートルしかなかったのだ。ついでに、ボキツという嫌な音まで響いた。

「レンディ、大丈夫か?」

「あいたたた……うん……大丈夫、だと思っ。 たぶん」

これが現実でなくてよかった! 現実なら、まず僕らが生きてい

ることからして考えられないが、夢の中だからこそ、許されることもある。今度こそ、死なずに済んだのだ……？

「いや、僕達がやっとのことで池から這い上がったとき、そこは天国のような世界だと思った。と、思ったのも、そこには青々と茂った草が綺麗に刈り込んである庭園がひろがっていたからだ。

その近くにはセピア色のお城があり、空がどこまでも青く澄み渡っている……。

僕たちは、服に染み込んだ水を絞りながら、オッズと二人で近くを散策してみた。ところどころに咲いている綺麗な花を時々眺めながら、僕らはお城の中庭までやってきた。

「きつと、このお城は天国へいけるかどうかを決める裁判所なんだよ」

オッズが、そんな独り言をつぶやく。

「そっか。じゃあ、僕たちはもう死んだんだね」

僕は、冗談のつもりで、笑いながら返してやった。するとオッズの表情が一変した。

「いやいや！ 死んでたまるか！ それよりも、ほら。秘宝とかが無事なのか確かめよう」

オッズが急いで、仕舞っておいた地図を取り出した。僕も、つられてポケットの中に入れておいた秘宝を確かめる。

僕が、秘宝の無事（あれだけの衝撃があつたにもかかわらず、割れていないことが不思議なくらいだ）を確かめると、オッズがとらで頓狂な声を上げた。

「どろしたの？」と、僕。

「地図が……水浸しになったせいで、文字がぼやけてしまっている」
「どんな具合なのかを確かめるために、地図を覗くと”己”と”進”
”という文字以外は、ほとんど消えるかぼやけるかして、読めなくな
らなくなってしまった。」

「たぶん、もう使う機会はないと思うけど……あいつからの試練は
まだ終わっていないはずだ。何が起ころか解らないから、一応と
っておこう。これは万が一の時のために、レンディを渡しておく
よ」

オッズから地図を受け取ったとき、突然、ウィルの声が空から聞
こえてきた。

「もちろんさ。君たちをこんなことで死なせてゲームオーバーに
するほど、私は愚かじゃあないぞ。まあ、落ち着いて聞いてくれ
たまえ。とくにレンディ君。君たちは第一の試練を突破するこ
とが出来たんだ。おめでとう！」

僕はウィル伯爵に褒められ、つい嬉しくなって、わーいわーいと
はしゃぎまわった。

「そして今度は第二の試練だ。もう気付いているだろうが、この
近くには……」

ん？　そういえば、どこか見覚えのある場所だ。もしかしてこ
こは、ブレナム宮殿の敷地内だろうか？

と、いうと、このすぐ近くには、僕たちの……！

「学校がある。第二の試練を受ける場所は、そこだよ」

意外な展開だ。僕たちの通っている、学校が第二の試練の会場になるうとは……。

僕たちは、ウィルの言葉に従い、自分たちの通っている学校へと向かった。僕らの通っている学校は、夢の中でも、大してその外見が変わることはなく、古めかしいお城風のデザインだった。徐に扉を開けて中に入る。すると、背後で不気味なロックの音が響き渡ったかと思うと、メリメリ……ツと液体の混じった固形物が何かに取り込まれているような音がした。振り向くと……なんと、ドアが肉のように闇の食道の中へと、見る見る吸い上げられているではないか！ あれよあれよという間に、ドアはなくなってしまった……残ったのは、無慈悲な壁だけだ……。

おお、神よ。これはなんとという試練なのだ。入り口という基本的な逃げ道を隠して、僕は一体、どこから逃げれば……。

僕は、とたなりで落ち着き払っているオツズを見て、僕もなんとか落ち着こうと勤め、深呼吸をした。……周りを見渡す。一階には市松模様の床があつて、中央の階段と、それに続く壁からせり出している廊下と階段のセットが螺旋を描くように屋上まで続いているのがわかった。なんら変わったところはない……。だが、事務の受け付けのところには、普通誰か人間が立っているはずなのに、僕らが訪れたとき、そこには一羽のカラスが留まっていた。

カラス！

嫌な予感が脳裏を駆け巡る……もしや、この試練は……？

「珍しいな！ カラスの受付人かい？」

オッツが意気揚揚とそう言うと、続いてカラスのそばへと近寄っていく。

「やめようよ！ これは……いや、この先にはとんでもないものが待ち受けていそうなんだよ」

「とんでもないものが待ち受けているからこそ、試練なんだろう？ それくらいわかっていろよw」

オッツの考えは、頼りにならない。彼は続けた。

「ところで、何故カラスがいるんだ？ 何か意味でも？」

「苦手克服さ！」

突然、ウィル伯爵が口を挟んだ。

「……逃げたい」

僕がつぶやく。

「逃げたら面白くないだろう？ 立ち向かうから面白いんだ！」

だが、オッツは僕の意見に食い下がった。

「それに、逃げるともっと酷い目にあうぞ」

ウィル伯爵のサディスティックな微笑が聞こえる……。オッツとウィルに挟み撃ちにされてしまった今、僕の逃げる道はなくなってしまった。いや？

「わかったよ……でも、きっとオッツズの杖でなんとかしてくれるよ……ね？」

すると、オッツズは苦笑いして

「それが……」

ジャケットの内ポケットから、申訳無さそうにぽつきりと切断された棒を取り出した。それを見てしまった僕の驚愕を悟ってか、彼はこう言った。

「ごめんね……だぶん、池に落っこちたときに、ポツキリと逝ってしまったんだろう。嫌な音がしたと思ったら、ね。このとおりさ。むしろ骨が折れていないことの方が不思議なくらいだったよ」

最後の望みが消え入った。

「だから、この杖がきつとボクらの代わりになってくれたんだろう」

なんとかして、オツズが僕のことをなだめようとしてくれたが、僕は明るくなれそうも無かった。

そして、オツズのへし折れた杖を見て、秘宝の安否を急いで確かめた。……大丈夫なようだ。

「ところで、今回の試練は、一体何をすれば良いの？」

僕がウィル伯爵に訪ねる。

「さつきも言ったとおり、苦手の克服さ。この学校のどこかに、出口があるから、そこを探して、ここから脱出すればよい。だが、脱出するためには多くのカラスと戯れることになるだろうけどね。ま、脱出する頃には、君もカラスと仲良しこよしってことさ」

だが、不安だ。

「……もしも、仲良くなれなかったら？」

「論より証拠だよ、レンディ君。この先にその答えが待っている。数学的に完璧に設計したこの世界は、計算のどこにも狂いが無いから、答えはいつだって一つなんだ」

彼は自信満々だった。むしろ自信があるというよりは、この世界の答えを全て握っているかのような口ぶり。いや、そもそもこの試練というものは、すべて彼が用意したものなのだ……。そし

て僕らは彼の掌の中で、もがいたり喜んだりしている……。

「ようし。じゃあ、さっそく出口を探そうぜ」

既にオツズは、その気になっていて、僕の手をひっぱった。灰色の瞳がキラキラと輝いている。この試練が進むに連れて、オツズの子供っぽさにますます磨きが掛かっているような気がした。

「精々気をつけていってくるんだよ」

僕らは、しらみつぶしに教室の一つ一つを見て周ることにした。

二手に分かれて行っているが、全ての教室を見るには、かなりの時間を要しそうだ。今のところ、出口らしい出口は見つけられない。窓やドアを調べてみたが、どれも結界のようなものが張られているらしく、外へ通じない。しかも、その作業が、まだ二階の半分くらいまでしか終わっていない。驚いたことに、カラスは、全ての教室にいた。それも、皆きちんと僕の学校の制服についているリボンを首につけている。なんともおかしな……それでいて不気味な光景だ。まるでクラスの皆がカラスに変わってしまったかのような気がして、白昼夢を見ているのと同じような感覚になる。

一方で、オツズはカラスが平気なのか、教室の扉を開ける度に、きやつきやつとはしゃぎながらカラスたちと戯れている。僕が置き去りにされた。最初は優しくて良い人かとも思ったが、主人公の座は絶対にゆずらねえ。だから、早く僕もカラスと仲良くしななきゃ……！

四番目の教室を覗く。そこにも他の教室と相変わらず、カラス

たちがいる。　そういえば、この教室にいるカラス達は喋ることができるらしく、雑踏と同じようによく聞き取れないが、ワイワイガヤガヤと人間語を話しているらしいことはわかった。　もしらしたら、カラス達と喋ることができるかも……？　おっかなびっくりしつつも、僕は好奇心をくすぐられた。

「あ、あの……」

僕は、一番近くにいたカラスに話し掛けた。　すると、カラスはくるツとこちらを振り向いて

「なんだよ、うるせえな」

と、早口で答える。　苦笑いする僕。　だが、これは奇跡だ。　僕が動物と……しかも一番嫌いなカラスと会話をしている。

「これはどういうことなの？　それと君たちは一体、いつからここにいるんだい」

すると、話し掛けたカラスがふわりと舞い上がって、僕の頭の上に留まった。　思いがけず、僕はきゃつと叫んだ。

「おまえらがこの世界にくる、ずーっと前からさ！　その前は言葉の学校に通っていたんだ」

なんと。　カラス達が言葉を喋られるようになるべく、学校に通っていたとは奇想天外な話だ。　おそらくこれはウィル伯爵が設定した物語か、もしくはウィル伯爵がカラスに人間語を喋ってもらうために教え込んだことなのだろう。　彼は多才だ。

「カ、カラスも喋られるようになるためには誰かに習わないとダメ
ということなんだね」

きよどきよどしている僕がやっこのことでそう答えると、カラス
は僕の頭を右足で何度か引っかいて、こう言った。

「ところで、おまえ、弱そうだな！」

第七十六話・シューマン・

「おまえ、弱そうだな！」

カラスにそんなことを言われたのは初めてだった。いや、これは僕の勝手な一存であるのかもしれない。（向こうとしては、昔からそう思っていたのかもしれないね。残念だけど）だが、僕だって、カラスにみくびられて、黙っているワケにはいかない。

「よ、弱くなんか無いよ！」

「ほほう。ならばその震えは何だ？ 足がカクカクしているぞ」

いかにも嘲弄した態度でカラスがそう言う（まるでリトルのようだ）、カッときたので僕はこう言い返した。

「うるさいな！ ただの武者震いさ、このカラ……ス野郎」

語尾には力が入らなかったが、それでも言い切ってやったつもりだ。武者震い……！ なんとと言う素敵な言葉だろう。怖さを度胸に代えてみせる言葉だ。

……だが、僕には、怖さを度胸に代える、肝心の度胸がなかった。付け元気で奮い立っても、惨めな結果に終わってしまった。

「何を言っている。クツクツク、可愛い小僧だな。貴様のようなやつを見ているといじめたくなる！ ……ついでに言っておくが、俺様の名前は、シューマンで、カラス野郎などという不細工な名前ではない」

なるほど、シューマンというのか。このサドなカラスの名は！
さすが、ウィルの教育だけある。まるで、さっきのリトルとウ
イルを足して二で割ったかのような性格だ。シューマンは、そう
言うと、僕の頭からワサワサと羽音を立てて、床に舞い降り、僕の
顔をぶしつけに睨みつけた。

嫌なやつだ、と思いながら奴の顔を見下ろしたが……よく見ると
つぶらな瞳で可愛いじゃないか。一瞬見た夢は、そんな具合だっ
た。だがそれも、所詮見た目だけにすぎまい。おかげで目が覚
めた。僕は直に、このカラスの城と化した学校から抜け出す、と
いう目的を思い出した。

「じゃあ……残念だけど、僕はここでお暇するよ。行かなくては
ならないところがあるんでね！」

「ほう」

シューマンがそんな生返事をしたとき、彼はちよいと僕の腰元を
見て、はっとしたようにこう言う。

「お前……そのポケットのモノは……」

ポケット？僕は、ポケットのところを見やった。そこからは、
さつき洞窟からもってきた秘宝が顔をのぞかせている。青緑色の、
綺麗な輝きを放つ宝玉……。そうか、カラスは、光モノに反応す
るんだ！これを見せたら最後、きつと奴は、いや、やつだけじゃ
なく、ここにいるカラスたち全員は、僕の秘宝めがけて血なまこに
なって追いかけてくるだろう！絶対にご免だ！

「な、なんでもないよ」

おずおずと言いながら、僕は、走ってその場から逃れようと駆け出す。すると、シューマンは、「何処へ行くんだ？」などとケラケラ笑いながら追いかけてきた！ まさに地獄、地獄の試練！

「お、追いかけてこないでよ！　なんで追いかけてくるんだよ！」

「逃げるからに決まっているじゃないか！　そのポケットの中身も気になるし、さあ、追いかけてこのはじまりだい！　あっはっはっは、逃げるお前もからかいがある」

「わー！　嫌だ、オツズ！　助けてよ！」

僕は、近くの教室にいたオツズに大声で呼びかけた。　ひよっこりと出てきたオツズは、僕のほうを見て意外にも笑った。　意外ではないかもしれない。

「おやおや、鬼ごっこかい？　ボクもいれてよ」

僕は、ここで初めてオツズに対する苛立ちを覚える。　殺意といつても過言ではなかった。　きつとこれは、ミステリー小説に出てくる犯人の心境だ！

「違うんだ！　このカラスをおっぱらってよ！」

すると、オツズはお安いごようだ、というように杖を取り出すしぐさをして、ぴたりと止まる。

「おや？　おかしいな、この辺に杖が……。　ああ、忘れていた。折れていたんだ。　あっはっは、これじゃあ魔法が使えないね」

オツズが、お気楽にそんなことを言った。それを聞いたときにふっと怒りが湧き上がったが、すぐに自重した。そう、オツズは、さっきの衝撃で、杖を折ってしまったんだ。僕もそのことをすっかり忘れていた！

すうつと僕の頭上をかすめ、前に来たり、横に来たり……触れはしないがじりじりと迫りくる。カラスの責め苦。……だんだんとこの試練に嫌気が差してきた。こんな試練……！ そう思ったとたん、僕は床のちよつとしたでっぱりに足をぶつけて転んだ。後ろで、オツズが大丈夫かい？ などと答えている余裕は無かった。一々そんな一言に大丈夫だ、などと答えている余裕は無かった。再び急いで走り出す。口元には、さつきからしょっぱくて鉄の味をする液体が垂れてくる。滴る鼻血だ……うつつ……酷いよ、こんなのは試練じゃない。拷問だ！ ただ、ウィルにもてあそばれているだけなんだ！ 言葉巧みな奴ほど、加虐的だと思うことがある。人を言葉巧みに惑わさせて、かわいそうな状況におとしめる。僕はまさに……その被害者なんだ。そうか。

リトルがあの時、ウィルのことを”非情な輩だ”とっていた理由は、この出来事に関連している。リトルが、これと同じような試練を受けたかどうかは別にして、彼の性格をまさに現した一言は、この”非情な輩”であるに相違ない。

だが、いつまでもよくよくしているわけにも行かない。僕は、どうやったら彼奴を欺くことができるかについて、走りながら必死で考えた。カラスは頭が良い。だから、ちよつとやそつと隠れただけじゃ、すぐに見つかってしまう。良い隠れ場所はないだろうか。絶対に見つからない隠れ場所……。視界の脇を過ぎていく教室のドアを身ながら、隠れられそうなところを探す。だが、どの教室にもカラスがいる！ そう、カラスの学校には、あたりまえのように、カラスがいるのだ。人間がいるべきところに、カラ

すが……。もはやこれは、普通の学校で、人に見つからないように、どこか隠れる場所を探しているのと、同じことなんだ。だとしたら、良い隠れ場所は……。理科準備室！

だが、理科準備室には、カギが掛かっていた。ちくしょう！
イライラしながら立ち往生していると、そこへオッズが到着した。

「その部屋にかくまうつもりなのかい？」

「それができたら、一件落着きただけだね」

プンスカ怒りながら、僕はそう答えた。

事情を説明した後で、他の隠れ場所を探そう、ということになり別の隠れ場所を探すことにした。

他に良い隠れ場所といえはどこがあるだろう？ 人 つまり、カラス がいそうにないところは？ ……第一図書室だ。そう、あそこは多分僕らが使っている第二図書室とは別にある、普段は使われていない図書室だ。

第一図書室は、現在では倉庫として使われており、代々学校の歴史にまつわる貴重な文献や、古い教科書などが仕舞われているらしい。国語の先生から聞いた話だ。

第一図書館については、以前、リップとケビンに誘われて理科の先生にまつわる噂を調査したことで、思い出が残っている。理科の先生にまつわる噂というのは、「理科の先生は時々誰にも使われていない第一図書室に言って、秘密の実験をしている」というものだ。まったくといってよいほど出所のない噂だ。誰が言い出しつぺなのか知らないが、秘密の実験なんて馬鹿げている。だが、実際に理科の先生はこれまでに何度か第一図書室へ入っていくとこ

るを生徒に見かけられていたという。だから、僕たちはそのうわさの真相を確かめるために、好奇心丸出しで理科の先生のあとをつけたことがある。

ここで、何故理科の先生が第一図書室へいくところなのか判ったのかというと、ケビンが一番最初に、廊下で理科の先生とすれ違ったときに、彼が「第一図書室」というタグのついたカギを、ナルシストっぽそうに指に引っかけて振り回しているのを発見したからだ。彼はなかなか鋭い目をもっている。

それで、ひそかに理科の先生のあとをつけると、やはり第一図書室の中へと入ってゆくのだ。そのとき、第一図書室の場所が、第二図書室の書庫の中だということも、同時に知ることが出来た。

だが、いざこれから秘密の実験の真相を確かめるぞ！ と思つて第一図書室の中へ忍び込もうとしたとき、理科の先生の勘が良いのか、ただの偶然なのか知らないが、ドアのカギが内側から閉められてしまっていた！

僕たち三人は、みんなしてがっかりした。特に、ケビンの悔しかりかたは尋常でなかった。彼自身が一番先に、理科の先生のあとをつけようと発案した当人であつただけに……。

兎に角、僕らはドアにはめられているガラス窓から、中を覗くしか選択肢が残されていなかった。理科の先生の姿は、奥のほうに入り込んでしまったのか見当たらない。ただ、第二図書室の書庫と同じように、古めかしい革表紙に金色の文字が入った本などが本棚に整然と納められているだけの空間が広がっていた……。結局、それくらいしか見ることができず。そのうちに皆は、そのことを忘れ去ってしまったのがおそらく、現状だろう。そんな思い出だ。

だから僕も、今までに中はほとんど見たことがない。だが、カギが掛かっていたとしても、あそこのカギのありかは、おそらく職員室であるという見当がつく。職員室には、人がいそうだが、そこはオツズに頼めばなんとかなるだろう。僕らは、話をあわせて第一図書室へと向かった。第一図書室の場所は、二階にある第二図書の書庫の中にある。書庫は、カギがかかっていたので、やすやすと入られたが、第一図書室へつながっている扉がどこにあるのかが、わからない。おかしい。これは、夢の世界特有の、”現実とちよつと違っている”という現象なのだろうか。

オツズと二人で書庫の中を物色していると、突然、入り口のところで聞き覚えのあるひょうきん者の声が聞こえた。

「何をやっているんだ、お前達？ 特に弱そうな黒髪。本でも読んで心を落ち着かせようつて寸法かい？」

ニコニコしていそうな声音だ。ビックリして、入り口の方を振り向くとそこにはさつき追いかけてきたウィルのサド弟子がいた。

「おやおや！もしかしてさつきボクらを追いかけてきたカラス君か？」

オツズが、さも仲の良い友達のようにカラスのシューマンに話し掛けると（彼は本当に友好的なんだと思う）、シューマンは、方眉をつり上げて、オツズの顔をぶしつけに見上げた。

「貴様は、この黒髪の保護者か何かか？」

「保護者？ まあ……保護者といえば、保護者かもれないな。だけど、パパではないことは確かだ」

本当にそうだ。

「ほう。話を戻すが、お前達は一体何をしているんだ？」

僕は、オツズと目配せして、状況を伝えるか？と、問い掛けた。すると、彼は、君自身の選択に任せる、といった具合で、肩をすくめた。

「……」

僕は、この数秒の間に、今までにないほど頭を回転させた。どうしよう……この状況下で、まさか追いかけてくる犯人を目の前にして「君から逃れるためだ」なんていえるわけがない。そんなことをいったところで、奴はますます面白がるだけだ。ここで上手い具合に奴を騙しおおせば……。

「なんでもないよー！」

結局、単純にそう言って、僕は逃げようとした。巧みな手段を使っている余裕は無い。だが

「なんでもないわけがないだろうー！」

言い切る前に、シューマンに早速くぎを打たれた。あとにも後ろにも進めない僕の状況を見兼ねてか、オツズはこう言った。

「打開策を打つしかないようだな」

僕は、後にここではじめて、”オツズの考えていることが大人で

ある”と、感心した。

第七十七話 - 和を大切に? -

オッツの打開策とは、「そのカラスと協力して、出口を探せばよい」というものであった。

僕は、そんなことが簡単にできるはずがない、と反論した。

「出口を探すたって、その前にこのカラスは僕のポケットに入っている秘宝を狙っているんだよ？　まずは、そっちを守ることを優先させなきゃ！」

だがオッツは、落ち着き払った様子で、こう言った。

「でも、第一図書室の場所がわからないんだろう？　もう、当人のカラスくんは、ここにきてしまっているし……」

「そうだぞ。　私が協力すれば早くこの試練が終わるというものだ」

突然、シューマンが口を挟んできた。　彼は続けた。

「だが、その秘宝というやらを、私によこすことが前提だ。　フフ、私もただで協力するほど、甘くはないんでね」

なんと欲張りなカラス！　業突く張りなシューマン！

「……べ、別に、お前の協力がなくなっただって、平気だもん！」

「……！　レンディ？」

オツズが駭然とした表情で、僕のほうを見る。

「オツズ、こんなやつと取引しても時間の無駄だよ！ もう逃げる道はないようだし……この秘法を持っていれば、何れもカラスが追ってくるしね」

「じゃあ、どうしろっていうんだ？ 何か他に良い手でもあるのか？」

「それは……」

だが、すぐに思い当たる良い方法は、なかった。オツズの試すような言葉が胸に突き刺さる。やはり、さっきオツズの提案したカラスと協力して出口を探す、という方法しか、良い手はないのだろうか……？

「カラスを追っ払うか、協力するかしかないな」

オツズが、そういう。僕は、ため息をついてこう答えた。

「でも、前者は無理でしょう？ ……そうだね。協力するしかないよね」

するとオツズは、僕の同意に喜んだのか、にっこりと笑った。

「和を大切に！」

こんなメンバーで、和を大切にすることなんて、できるのだろうか？ できそうもない、と僕は思う。だが、オツズが努めて、僕のカラス嫌いを克服させようとしているのかと思うと、その提案に

そつぽを向く気持ちにはなれない。思い出してみれば、そもそもこの試練を受けた理由は僕のクラス嫌いを克服するためのものだ。なのに、僕はいつのまにかその目的を見失って、ただ逃避することしか考えていなかった。オツズが、ここで、僕のクラス嫌いを克服してくれようとしなかったら、この先、目的を見失ったまま、試練に失敗していたかもしれない。オツズは、大人の格好をした子供なんかじゃない。立派な大人だ。

「そうだよ、和を大切に……」

でも、いざクラスと協力する、といったって、どうしたら良いのかわからない。この欲張りなクラスをどう扱えばよいのだろうか？ ウイルは、この試練をはじめめる前に、このようなことっていた。「相手の気持ちを理解しようとするれば、お互いに分かり合える」と。だとしたら今、僕に突きつけられている課題はこのクラスの気持ちを理解する、ということなのだろうか？

「ねえ、シューマン？ 僕の持っている秘宝が、そんなにほしいのかい？」

「ああ、もちろんだ！」

彼はやはり、そう答える。

「じゃあ、本当にこの秘宝を渡したら、この学校から抜け出す出口を探すことに協力してくれるんだね？」

すると、シューマンは、僕の顔を見つめながら、しばらく黙りこんだ。彼がなんと言い出すのか……もし、不当なことを言われたらどうしよう？ 僕は思わず固唾を飲んだ。

「そうだな……。その珍しい秘宝をくれるんなら、約束を破るわけには行かない」

彼は、静かに語りだした。

「だが、料金前払いが、基本だ。まずは、その秘宝をくれ」

僕は思わずためらった。後払いならまだ安心できるが、前払いとなると悪い場合には逃げられてしまふかもしれないからだ！

僕は、またオツズの方を向いて目配せをする。やはり、オツズは僕自身で、物事を決めることが基本だ、というように、肩をすくめた。そのとおりだ。僕もそろそろ、この人を頼るクセをどうにかしないといけない。

僕は、嫌々秘宝をズボンのポケットから取り出した。青緑色の光が、神秘的に輝く……。シューマンは、その秘宝の全貌を見た途端、カツと目を見開いて狂喜乱舞した。そして、次の瞬間

「わあ！ 何をするんだ」

彼はなんと、僕の腕に飛びつき、その秘宝を搔つ攫ってしまった。しかも搔つ攫つただけじゃない。飲み込んでしまったのだ！

あれよあれよという間に、秘宝が食堂を伝って、胃袋へと収まる様を見た……。ああ、もう秘宝は、彼の胃袋の中へ……。

「……………」

オツズが、啞然とした表情で、カラスを見ている。僕は、それ以上に驚いて、バクバクと脈打つ心臓の鼓動が、のどのところまできているのを感じた。

一瞬の静寂。しかし、それを破ったのは、天からのお告げだった。

「あーあー、マイクのテスト中……」

のうのうとした声音が、響く。それは僕たちの緊張を、一瞬で崩した。声の主は、ほかでもない。

「どうやら、大変なことが起こってしまったみたいだね、レンディ君」

「大変なんてものじゃないよ！」

僕は宙にいる透明なウィル伯爵に向かって、がむしゃらに叫ぶ。余計にイラつかせる、その冷静な声……。

「シューマン、あれほど食べ物意外のものを口に入れてはいけないといったのに……まったく」

ウィルの落胆した声が聞こえる。そして、もう一方では、シューマンの満足しきった

「げえーっぶ」

が、聞こえる。その場にいたみんな（カラス以外）が、ため息をついた。

第七十八話・新しい同行者・

シューマンは秘宝を飲み込んでしまった。今この目で見たのだから、間違いない。直系五センチもあるつかという光の玉を丸呑みにしてしまったのだ！

ふと、のどの奥が熱くなる。

「うわーん！ これじゃあ、何もかもお終いだ……！」

気付くと、僕は今にも泣き出しそうになっていた。……前払いも、後払いも、こうなってしまったからには、もはや無関係だ。

カラスのしでかすことは、予想もつかない！
すると、ウィルが申訳無さそうに言った。

「すまない。彼は、光物を見ると口の中に入れてしまうクセがあるんだ」

それを聞くなり、オッズがいきなりケラケラと笑い出して、こんなことを付け加えた。

「まるで赤ちゃんのようだね！」

こんな風に、シューマンに対して何でも言えるオッズに、怖いものなんて何も無いんだ。彼は、無敵。きつと、ウィルに対しても。

「赤ちゃんのようなシューマンか！」

ウィルが、めずらしく陽気な様子で笑いながら、冗談を楽しむよ

うにそう言つと、シューマンはさっきまでの傲慢な態度とはうって変わり、恥ずかしそうに俯いてしまった。ちよいと彼の顔を覗き込んでみると、顔を真っ赤にして黙っている。きつと、さっきの言動を後悔したのだろう。

それにしても、ウイルに対して、何も口答えできていない様子を見ると、面白いほど彼等の力関係がわかる。

「あはは、本当に君の冗談は面白いね」

ウイルは、嬉しそうだ。

「えへへ……」

それに対して、ニコニコいつもの笑顔で答えるオッズ。二人は早くも打ち解けている。

さて、これからどうしたものかと、三人（シューマンは、話し合いにはとても参加できる様子ではなかった）で話し合っていると、ウイルが次のステージのヒントを言ってくれた。

「そういえば、次のステージは真っ暗だ。何か、明かりになるものを、確保しないとイケないな」

すぐに、さっきシューマンが飲み込んでしまった、秘宝のことが脳裏を横切る。

「また、洞窟かい？」と、オッズ。

「いや、洞窟ではない」

僕とオッズは、ウイルの言葉にほっとして、二人ともほとんど同

時に息をついた。もう、あの水責めからは逃れられる……！

「だが……、もしかしたら洞窟よりも、もっと難しいかもしれないね」

僕は、すかさずウィルに詰問した。

「ええつ、一体どんな試練なんですか？」

すると、彼はククつとどの奥で笑う。

「それを言ったら、種明かしになってしまっじゃあないか。どんなところかは、行ってからのお楽しみだ」

「そうか、行ってからのお楽しみだつてさ、レンデイ？」

オッズが、僕のほうを見て、楽しげにそういった。

行ってからのお楽しみ……本来ならば、良い期待を抱かせるために言うセリフだが、ウィルが言うと、決して期待をしない、何か恐ろしいことのように聞こえる。

きつと、良い意味で期待をしているのは、ウィルだけだ。それと……何も知らなさそうなオッズ。

僕は、これまでの話をまとめあげた。

「それにしても、どっち道明かりになるものを探さなきゃいけないわけだ？」

「それと、出口をね」

オッツが僕の言葉に付け足した。確かに、出口がわからなければ、この学校から抜け出すことは出来ない。僕は、透明なウィルに向かって質問する。

「出口に関するヒントは無いんですか？」

少しばかり期待しながら、あらぬウィルを見つめていたが、しばらくしても、回答が帰ってこない。相変わらず黙っている……このまま、ヒントは”無し”なのだろうか？

しかし、数分後、彼はうなりながら考える様子を示したあとで、こう答えた。

「探していれば、いずれは見つかるよ」

……やはり、答えに直接関係するようなことは言ってくれない。そして彼は続ける。

「そもそも、目的を忘れてはいないだろうね？ 試練は、目的を忘れてしまったら、やる意味がないぞ？」

目的のことなら、さっきオッツが言ってくれたセリフのおかげで、今思い出したところだ。

カラスの仲良しになる……それが、この試練の目的。もしかして、ウィルは僕がまだカラスと仲良くすることができていないと判断したのか？ 実際、それほど仲良くもないが……だが、これから仲良くするように努力することなら出来る。

そうだ。今は、あれこれと悩むよりも、まず行動で示したほうが良い。

「試練の目的のことなら、大丈夫だよ。何かとありがとう。そ

れじゃ」

僕たちは再び、学校の出口を探すことにした。シューマンがついてくるのかどうか気になったが、彼は、結局僕たちについてきた。それは、第二図書室の書庫を去ろうとした時のことである。

「面白そうだし、いずれ安全にもタイムリミットがあるからな」

彼はそういって、立ち去ろうとする僕らの前に現れた。

……？

「それは、どういうことなんだい……？」

オッズが、カラスを見つめながらいぶかしげにつぶやく。

「だから、つまり……」

そういうシューマンの顔が、また赤味を帯び始めている。なんだか恥ずかしそうだ。すると、次の瞬間、彼は顔を真っ赤にして、叫んだ。

「こんなことも理解できないのか、ポンコツめ！ これ以上恥をかかせるな！」

オッズは、子供をあやす母親のように、優しくシューマンに向かってこう言った。

「あはは、わかったよ。大丈夫、ボクたちはきつと出口を見つけさせるさ。できるだけ早くね」

それを聞くなりシューマンは、「本当だ！早くしないと、許さないからな！」などと叫んで、わめきちらしつつも、結局僕たちの後を追い、ついてくる。そんな風にして僕ら三人に、新しい同行者がくわわった。（この場合、同行鳥というのか？）

タイムリミットは、あと数時間くらい。それまでに、出口を見つけて出そう。

奴から秘宝を取り返すとき……つまり、消化されて出てきたとき、その秘法を持ち続けて、今度は他のカラスに目をつけられてしまうからだ。

そうだったら、終わりだ。だが、シューマンが秘宝を飲み込んでしまったこと……これは、もしかしたら、チャンスかもしれない。

第七十九話・壁の落書き

ウィルの助言を聞いた後で、僕たちは出口を探しに学校の中を探検することにした。カラスのシューマンが何故か飛ばずに、スキップをするようにして歩いてくる。さっき飲み込んでしまった秘宝のせいで、お腹が重たいのだろうか？ きつと、そうだ。

僕は、そんなシューマンにはほとんど目もくれないで、出口を探しつづけた。

「出口をさがすんだろ？」

オツズが、ふと僕に話し掛けた。

「うん、きつと窓かドアのどれかが出口になってると思うんだよ…」

すると、オツズが僕の言葉に畳み掛けてこう言った。

「でも、肝心の本物の出口がいつまでたっても見つからないじゃないか。もしかして、外へ通じるはずの窓やドアはどれも出口にはなっていないのかもしれないよ？」

「本当に？ でも、全部調べてみたほうが良いよ！」

……と、いうワケで、僕らは、引き続き外へと通じている窓やドアを徹底的に調べることにした。すると、シューマンが途中でこんなことを言った。

「なあなあ、俺疲れてきちゃったよ。誰か運んでくれないかなあ」

何を言つかと思いきや、ブツブツと文句を垂らし始めたのだ。

最初は無視しておいたが（あんなワガママ野郎だ！）、彼が何度も同じようなことを繰り返して言うてくるので、僕はだんだんイライラしてきて、ついしかりつけた。

「僕たちだって、疲れてるんだよ。　少しは頑張りなよ」

するとシューマンは、

「じゃあ、少し頑張つて……」

と言い、ワサツと舞い上がる。

僕は思わず叫んでしまった。　シューマンがちゃんと付いてきてくれるのかと思いきや、彼は一所懸命に羽をばたつかせて僕の頭の上まで舞い上がり、案の定僕の頭の上にちょこんと座り込んだからだ！　カラスは、「よいこらしよ。　ほら、少し頑張つて頭の上に来てやったぞ。ケケケツ」と愉快そうに僕の顔を覗き込む。

「ヒャー！　ほ、僕の頭の上にカラス……カラスが！」

取りたくても取れない苦痛。

「アハハ、お似合いだよ、レンディ」

オッズが楽しそうにそう言った。　まさか、彼までもがウィルの側についてるんじゃない……。

僕はカラスに向かってわめき散らした。

「どうして僕の頭にのっかるんだよ！　オッズだっていいじゃない

か！」

「どうしてって？ それは居心地が良さそうだったからさ！ このモジャモジャ髪なんか、毛皮のソファーみたいだぜ？」

馬鹿にされてるのか褒められてるのかわからない。 だが、うっとうしいことは確かだ！

「もう〜！ どうしてだよ〜……」

結局、何を言っても降りてくれそうに無かったので、僕はそのままの状態で出口探しを続けることにした。 無理矢理引き離そうとすれば、カラスがよくするように、ひっかき攻撃をくらうかもしれない。

傍から見れば不思議な帽子をかぶっているように見えるんだろうな……。 オツズがさっきから笑いを堪えているのだからお見通しだもんね！

もう嫌だ！ 何もかもが上手くいってない気がする。

……結局、外への出口だっけ見つからないままだし。

「ねえ、もうこれで全部だよ？ 出口なんてどこにもなかった！ もう、どうすればいいんだあ……」

投げやりな僕を前にして、オツズは考え込むように頬を引っかきながら、こう言った。

「うーむ……これはもしかしたら引っかけ問題なのかもしれないよ？ ほら、外へと通じるものが出口だと思わせておいて、殊の外そっつうだと思えないところが出口になっていたりして」

「例えば？」

「外に通じるものがダメということなら、うちで通じている窓やドアが正解だよ！」

……本当に？

「そうか。そういうことだったのか！　じゃあ、外へと通じていない窓やドアも調べてみるべきだったんだね」

僕は、本当にそれが正解なのか？　と疑いつつも、一応オツズの意見も試してみることにした。　兎に角、やってみないことには何も始まらない。

ところが、この案も失敗だった。　カギの掛かっていた理科準備室を除いた、すべての窓やドアを調べてみたが、結局他の世界へと通じているものはなかった。　こうなってくると、いよいよ事が行き詰まってくる……。　理科準備室が出口だったら、別だけど！　僕はオツズに訪ねた。

「理科準備室はカギが掛かっているからどうしても開けられないんだよな……。どうする？」

オツズも両手を肩のところまで上げて、首を振り「わからない」としめした。

「カギがかかっているんなら仕方が無いよな。　理科準備室は諦めるしかない。　もし、カギを見つけて理科準備室を開けなければ出口にたどり着けない、というのなら話は別だけど……」

「カギはないよ」

シューマンが唐突に言う。

「カギはないだって？」

僕は矢継ぎ早に聞き返した。
どうということなのだろうか。

「ウィル伯爵に教えてもらったんだ。あの理科準備室には、はじめからカギが掛かっていて、ウィル自身でもあけることが出来なかったらしいぜ」

「うそだー！……それじゃあ、理科準備室は、答えの候補から外れることになるじゃないか」

「そういうことだな、レンデイの坊主。おまえ等、もっと考えることは出来ないのか？」

そんな風に言われても、思いつかないから仕方が無かった。どうすれば良いのだろう……僕は必死で頭を回転させた。何故だかいつもより、考えがすつきりとまとまっていく感覚がある。

窓やドアは、全て外の世界へは通じていなかった。と、ということとは、結局のところ、窓やドアというものは不正解ということになる。それ以外で外の世界へと通じていそうなどころがあるだろうか？ 窓やドア……それ以外に外の世界へと通じそうなどころ……そうか、わかったぞ！

「壁だ！」

「壁？」

オッズが怪訝そうな顔で質問した。

「壁になにがあるってんだい？」

「“回転扉”ないし”隠し扉”だよ！ ほら、忍者屋敷にあるような……」

「ああー！ あれか！ わあ……僕はなんてそんな初歩的なところに気が付かなかったんだ……！」

オッズは悔しそうに頭を抱え込んだ。僕は得意になり、壁じゅうをさぐった。

しかし残念なことに手が真っ黒になるまでいろいろんな壁を触つてみたが、結局扉らしいところをみつけることはできなかった。だが、変わりに不思議なものを発見した。……なんだろう。誰かが書いた落書きかな。まるで魔法円のような図だ。そのようなものが、壁の目立たないところに小さくかかれている。壁をつたって探さなかったら、きっと見落としていただろう。

だが僕は、誰かの落書きかと思ったので、気にも留めず、壁を探しつづけようとした。すると、シューマンがこう言う。

「お前ってホント抜けてるよな。その模様が気にならなかったのか？」

僕は不思議なことを聞いてくると思って、シューマンに質問した。

「え、この小さな魔法円のような落書きのこと？」

するとオツズが、「何を話しているんだい？」といいながら近寄ってきた。

僕はオツズに訪ねた。

「ねえ、オツズ。 シューマンが不思議なことを言うんだ。 この落書きが気にならないかって。 これってなんの模様だと思う？ 僕には落書きにしか見えないんだけど……」

僕は、オツズがこの模様について知っていないか確認するために、近くにあつた模様を指差した。 すると、オツズはその模様を顔を近づけてじっくりと観察しながら、「こう言った。

「ん？ この模様は……ええーっと、なんだっけな。 どこか見たことがあるぞ。 うん、魔法円の種類だ。 なんの魔法円だったっけな……」

やはりあれは、魔法円だったのか……でも、なんの？

なにやら、オツズが思い出そうとしている様子を見て、シューマンがニヤニヤしている。 きつと何か知っているんだ！

「そつだ！ 思い出した。 この魔法円は……」

第八十話・巨人登場！

「その、魔法円の意味は……？」

僕が、興味津々に彼に聞いてみると、彼は眉を八の字に曲げ、機嫌を悪くしながらこう言った。

「なんてこった！ これは世界封じの魔法円だよ」

「世界封じ？」

それは一体、どんな魔法円なんだ……？

「つまり、僕たちを閉じ込めるための魔法さ。この魔法円がかかっている建物は、その中へ入ったら最後、もう外へは出られなくなっている仕掛けなんだ……」

そういうことだったのか！

「じゃあ、あの窓を開けたときに見た結界みたいなものは、この魔法のせいだったんだね！」

「そういうこと」

オッズは、沈んだ面持ちでそう答えた。

しょぼくれた一行は、当ても無く薄暗い廊下を歩き始めた。カラスを頭に乗せた僕の後ろにオッズが付いてきている。カ

相変わらず、教室からは、カラスたちの話し声が聞こえていた。まるで、ぼくらを小バカにしているみたいに！

すると、それにまじってなにやら他の声も聞こえてきた。なんだろう……声というよりは、動物の低い唸り声のようだ。

「ねえ、さっきから誰かがうめいているみたいだよ」

不安なので、僕が例の声についてオッズに切り出すと、彼は

「え？ そうかい？ ボクには誰かさんのいびきにしか聞こえないけど」

とっておどけてみせた。しかし、僕は冗談として流したくなかったので

「そう、それだよ」

と真剣に談義する。

「絶対、何かがいるんだよ！ 呻き声を上げるような、”ヘンな奴”がさ……。あ、ほら！ また聞こえた！」

僕らは一斉に耳を研ぎ澄ませた。しばらくうめき声を聞いていると、僕はふと何かを思い出しそうになった。この声は……どこかで、聞いたことがある。

うめき声……そうか！ この学校には

「巨人がいるんだよ！」

「巨人？ この学校にはそんなものがいたのかい？」

オッズは僕の言葉を聞いて、どこか嬉しそうだ。

「うん。いや、実際はいないんだけど、この学校の構造が、古い金の音を増幅させて、そういうように聞こえるって奴なんだ」

「へえ、面白い学校だね！」

僕は続ける。

「と、いうことは、今何時かになったってワケだ。一体何時になったんだ？」

「三時だよ」

「そう」

……あれ？

「ねえ、オッズ。いつからそんな唖れ声になったの？」

僕は歩きながらうしろにいる彼に問い掛けた。
するとオッズは、一瞬戸惑って

「え、ボクは何も喋っていないけど」

と返す。おかしい。オッズでなければ、誰が喋ったって？ シューマンは僕の頭の上にいるから、喋ったのかどうかすぐわかる。彼は喋っていない。

だとしたら、喋ったのは彼しかいないハズだ。得意の腹話術を使えば声を変えることなんてお茶の子さいさい……なのにどうして、彼は嘘をついているのだろう。

がない！ 世にも恐ろしい……それこそ、巨人だ！ 立ち上がったところを見ると、ちょうど雪男とトロールを足して二で割ったようないでたちで、動物の毛皮を纏っている。あの樽のように太い腕でつかみ掛かられたら、僕なんてひとたまりもないだろう……。

背後から聞こえてきた悲鳴（この場合雄たけびといったほうが正しい）に、腰を抜かしているオッツがやっとのことで僕のそばまでやってきたかと思うと、巨人はまもなく暴れだし、そこらじゅうに体当たりしていく。

ドシン！ ドシン！ 床がひしめく、窓はわれる！ 中には窓枠ごとはずれて、そのまま落下した窓もある。踏みつけられたりでもしたら、一貫の終わりだ……！

「耳が、つんぼになるかと思った」

オッツは痛そうに自分の耳を抑えながら、僕に話し掛けてきた。しかし、のんきに話をしている場合ではないと思ったので、僕は地響きに体をゆすられながらも、即座にオッツの手を取り、巨人とは反対の方向に向かって一気に駆け出した。あとからシューマンもおたおたとしながらついてくる。

「わ、私を置いていくな！ ……ヒイヒイ。 どうしてこんなに体が重いんだ…… 上手く歩けな」

ドッシーン！

「わー！」

シューマンが悲鳴をあげる。 あともうすこしで、巨人の足の下敷きになるところだ！

……そうか。彼はさつき飲み込んでしまった秘宝のせいで、上手く身動きをとることが出来なくなっている。フン、あんなヤツいい気味だ……しかし、そう考えようとしたとたん、僕の思考回路は、それとは正反対に動いた。

” たすけなきゃ……！！ ”

良心に後ろ髪をひっぱられる。僕はオツズを先にいかせて、シューマンの元へと舞い戻った。

「ヘン！ 助けに着たのか？ 私はお前なんかの手を借りなくたって……」

シューマンが言い切る前に、僕は彼を抱き上げ、オツズのいる方向へとかけだした。

「あっそ！！ じゃあ、見殺しにすることだってできたんだよ？」

「……怖いこと言つなよ。私がそう簡単に死ぬはずないだろ。この愚か者が！」

こんなときまで、人をイライラさせるやつが一体何処にいるだろう。

でも、どんなに憎いと思っっているやつにだって、命がある。それは僕も一緒。危機が迫っているときに、見殺しにするなんてできなかつた……。このときばかりは、夢だから平気だとか、死ぬはずがないだとか、そういう風には考えてはいられなかつた。

「でも、僕は助けなきゃいけないと思っただんだよ、バカ！」

「……フン！ お前に感謝なんて、してないんだからな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784d/>

LENDY CROWZ 第三部

2010年10月8日13時26分発行